

171 (神戸) 清水寺 ((ごうど)せいすいじ)

表171-1

寺院名	音羽山清水寺	所在地	みどり市東町神戸719
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 清水寺
主本尊	觀世音菩薩	仏事	御開扉(1/17)
創立・沿革	寺伝によると、開創は歎応2年(1339)、開山は安室文泰和尚といわれ、その後天文元年(1532)利根郡下牧村(旧月夜野町)玉泉寺八世洞庵文曹が入寺し中興開山となる(『勢多郡東村誌』)。		
文化財指定	なし		

位置・配置 (図171-1、写171-1)

当寺院はみどり市の北に位置し、日光から桐生に抜ける国道122号線から北に参道を登り、山間の中腹に鎮座する。道路に平行して渡良瀬渓谷鉄道が敷

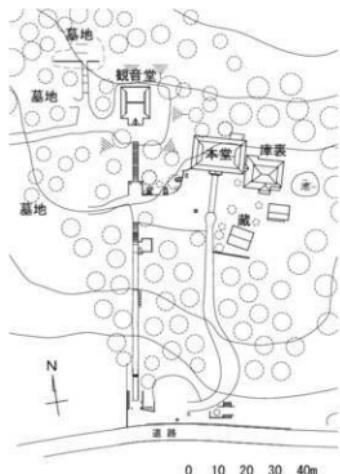


図171-1 配置図



写171-1 境内全景 本堂

かれ、渡良瀬川が流れる。南の道路は江戸時代、銅街道と呼ばれ、この街道から続く参道は当時の石畳を残し、馬頭、庚申塔30基が並び昔の面影を残す。奥の石段を登ると右手に本堂、庫裏があり、寛文6年(1666)の庚申供養塔、庚申供養石殿が置かれている。さらに50段ほどの石段を登ると観音堂が鎮座する。山の縁に囲まれた境内の南西に墓地が広がり、観音堂の裏手に代々の住職の墓がある。本堂は明治まで西向きであったが、大正年間に建て替えられ南を向く。本堂へは道路から別に東に登り口があり、国道に面して石塔と石段を残す。

由来および沿革

『勢多郡東村誌』によると、享和2年(1802)「観音堂屋根吹替奉加取帳 清水寺」、文化9年(1812)「観世音屋根吹替奉加帳 神戸村氏子中」、文政4年(1821)8月「観世音御仮屋、殿堂指萱作料取立帳 座間村、神戸村、草木村」、文政7年(1824)4月「観音堂造り請負 八木原村大塚主計、清水寺世話人」の資料があったとされるが、今回の調査では確認できていない。「観世音御仮屋、殿堂指萱作料取立帳 座間村、神戸村、草木村」からは近郷の村々から工事費の集金の一端が伺えたとされる。観音堂の扇子は1月17日に御開扉が行われる。開扉に合わせて内陣に賽銭を投げ入れる風習を今も残す。昔は、この日に馬頭観音の祭りが行われ、馬を連れて観音堂を訪れる参詣客で賑わったと伝わる。入り口中央に馬頭観世音の碑が立っている。

かみのんどう
観音堂 (図171-2、表171-2、写171-2~171-7)

観音堂は正面3間、側面4間、入母屋造妻入銅板葺、1間向拝軒唐破風付のお堂である。基礎は自然石、土台を廻さず柱を立てる。身舎の軸部は檼の粽付丸柱とし、内法長押を付け、柱頭を頭貫と台輪で

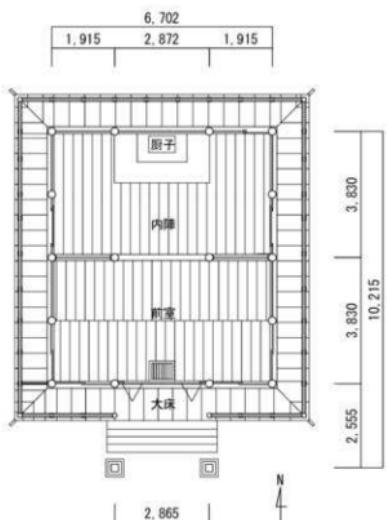


図171-2 平面図(觀音堂)

表171-2 觀音堂

建造年代／根据	文政11年(1828)／棟札	構造・形式	正面3間(6.70m)、側面4間(7.66m)、入母屋造、妻入、向拝1間軒唐破風付、棟瓦葺
工 匠	[大工]大工棟梁 大塚武兵衛 [彫工]彫物棟梁 萩原村星野慶助・座間郡高瀬忠七	基 础	自然石基礎
輪 部	[身舎]丸柱(棕)、頭貫、台輪 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]出組 [身舎内部]出組(内陣境) [向拝]連三斗2段変形
中 備	[身舎]本幕股 [向拝]彫刻嵌込	軒	二軒累重木、板支輪(彫刻)
妻 館	板張	柱 間 装 置	両折振戸戸、引違戸戸、板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	拭板張
天 井	竿縁天井(内陣)、格天井(前室)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇、扇子
塗 装	[身舎]素木、朱色(外部上部)、極彩色(本幕股・支輪、彫刻欄間) [向拝]素木、朱色(虹梁)、極彩色跡(手挾)	飾 金 物 等	釘隨金物
繪 画	天井画(花)	材 質	檜
彫 刻	[身舎外部]虹梁(絵様)、支輪(花・波)、本幕股 [身舎内部]欄間(龍、獅子・牡丹)、虹梁(絵様)、本幕股(鳥)、支輪(雲・鳳凰) [向拝]柱(地紋)、海老虹梁(絵様)、水引虹梁(絵様)、木鼻(獅子、猿)、嵌込彫刻(龍)、兎毛通(馬)、手挾(蓮)		



写171-2 全景



写171-3 側面



写171-4 向拝 唐破風

固める。向拝の角柱に地紋彫を刻み、水引虹梁は蓮の花の彫刻を施し、海老虹梁で身舎につなぐ。水引虹梁の中備に龍、その上に唐子の彫刻を嵌め、兎毛通は馬の彫刻で飾る。打越垂木はむくりを付け、手挾の彫刻は蓮の花の籠彫とする。内部は扇子を置く内陣と前室の2室からなり、室境に取外しができる腰戸を付ける。内部は簡素な造りとなっているが、内陣境は柱上部に組物を置き、彫刻欄間を嵌め、棟股の中備と彫刻支輪に極彩色を施している。前室の天井は格天井とし、草花を描く。内陣の扇子は屋根に千鳥破風・唐破風を付け、組物は三手先とし、壁に花鳥を描く。全体を極彩色で彩り、造りも見事で美しい扇子である。

今回的小屋裏調査で、文政11年(1828)11月の「奉再建觀音堂」と記す棟札を確認した。觀音堂の建造年は、虹梁の絵様や棟股の彫刻に見られる江戸後期の特徴から、棟札の文政11年とみてよい。文政7年(1824)4月の普請帳は、この時の工事のものと考える。棟札には彫刻棟梁星野慶助・高瀬忠七の他、星野按三郎、星野利三郎の名があり、花輪・田沢の彫



写171-5 向拝 海老虹梁



写171-6 内部



写171-7 唐子

刻師による建物である。正面の鶴口は文久3年（1863）桐生の鍋屋清吉作の銘を刻む。

まとめ

慶安2年（1649）に開設された銅街道は、足尾銅山からの銅を江戸に運ぶ重要な街道であった。輸送に欠かせない馬を連れて観音堂に参るお祭りは、地域の人々にとって重要な行事であり、観音堂も大切に守られてきた。今回確認された棟札に記す星野慶

助、高瀬忠七は、彫刻師石原吟八の流れを継ぐ著名な彫刻師であり、両名は県内に多くの作品を残している。観音堂は、街道の歴史や馬頭信仰を伝えるだけでなく、花輪・田沢の彫刻師の足跡を知る上で大変貴重な建物である。

（小林則子、森田万己子）

【参考文献】

『勢多郡東村誌通史編』東村 平成10年

177 光恩寺〔こうおんじ〕

表177-1

寺院名	赤岩山地藏院光恩寺(赤岩山光恩寺)	所在地	邑楽郡千代田町赤岩甲1041
宗派	高野山真言宗	所有者・管理者	宗教法人 光恩寺
主本尊	木彫明王	仏事	修正会(元旦)、六算除・厄除大護摩執行(1/3・4)、初不動(1/28)、星祭り節分会(2/3)、春季不動尊大祭・火渡り(3/28)、阿弥陀三尊会(5/1)、お花祭り・水子供養(5/5)、赤岩弁天祭(5月初旬)、盂蘭盆施餓鬼会(8/15)(川せがき(8/18))、秋季不動尊大祭(10/28)、人形供養(11月)、除夜の鑑(12/31)
創立・沿革	寺伝によると、雄略天皇が先帝の穴穂宮(安康天皇)のために全国に建立した九ヶ寺の一つとされ、推古天皇11年(603)に仏舍利を納め、同33年(625)に僧惠灌が来住した。その後、弘法大師により弘仁5年(814)(一説に大同4年809)、密教弘通の道場として当寺を再興開山されたと伝わる。平安期や鎌倉期は当地を支配していた佐貫氏の氏寺として栄える。元亨元年(1321)に戦火により焼失した堂宇を後醍醐天皇の命にて宇都宮公綱により再建され、700石の朱印と「赤岩山光恩寺」の称号を下賜された(『光恩寺庫裡建物調査報告書』)。		
文化財指定	光恩寺長屋門、光恩寺庫裏、光恩寺客殿、光恩寺石造蔵(国登録有形 平成11年2月)、銅五種鈴(国重文 平成19年6月)、地蔵菩薩画像板碑(県重文 昭和52年9月)、木造阿弥陀三尊像(県重文 昭和52年9月)、光恩寺の梵鐘(町重文 昭和63年1月)		

位置・配置(図177-1、写177-1)

群馬県南東部の千代田町大字赤岩に所在する高野山真言宗の寺院である。境内は町域の中央南側、利根川中流域の北岸にあり、南に栃木県道・群馬県道38号足利千代田線がはしり、西に埼玉県道・群馬県道83号熊谷館林線が南北に延びている。

南方の足利千代田線から山道が100m程延び、空堀に架かった太鼓橋を渡った後に山門が建つ。山門を潜ると正面に本堂が南面して建っており、東に庫裏が繋がっている。本堂の西南に釈迦涅槃堂、西北に迦利帝母堂が建つ。庫裏の北東に客殿が繋がり、客殿の東へ石蔵が接続している。庫裏の南東に長屋門を配し、東へ新設の別棟庫裏を配している。さらに東へ進むと、阿弥陀堂が南面して建っており、そ

の南方に弁天堂が池の中央に建っている。境内の北東にある城山は堂山古墳で、上がった所に鐘楼堂が建ち、その西に赤井照光の墓がある。

由来および沿革

光恩寺の歴史は古く寺伝によると、雄略天皇が先帝の穴穂宮(安康天皇)のために全国に建立した九ヶ寺の一つとされ、推古天皇11年(603)に仏舍利を納め、同33年(625)に僧惠灌が来住した。その後、弘法大師により弘仁5年(814)(一説に大同4年809)、密教弘通の道場として当寺を再興開山されたと伝わる。平安期や鎌倉期は当地を支配していた佐貫氏の氏寺として栄える。元亨元年(1321)に戦火により焼失した堂宇を後醍醐天皇の命にて宇都宮公綱により再建され、700石の朱印と「赤岩山光恩寺」の称号を下賜された。中世の光恩寺は、文和年間に

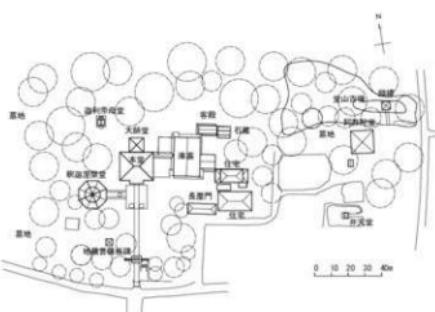


図177-1 配置図



写177-1 境内全景

1. 本調査：寺院建築

兵火により被災、天正18年(1590)に寺領の没収がなされた。近世を迎えると一変し、慶安元年(1648)徳川家光より16石8斗余りの寺領を賜り、山林竹木請役などを免除された。文政13年(1830)落雷により堂宇を焼失、天保年間に再建されたが、慶応2年(1866)再度火災により焼失した。のちに境内は整備され、現在の伽藍は明治26年(1893)にかけ再建されたものである。

庫裏(図177-2、表177-2、写177-2～177-7)

庫裏は、境内のほぼ中央に位置し、本堂の東に渡り廊下で接続し、背面側は客殿を接続する。木造平屋建、切妻屋根で、桟瓦を葺き、妻入りで南面とし、四方に下屋を葺き降ろす。

表177-2 庫裏

建造年代／根拠	江戸後期／建築様式	構造・形式	正面14.23m、側面21.79m、切妻造、妻入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	河原自然石
軸 部	角柱、土台	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊重木、西面せがい造
妻 飾	小屋組(桁、束)表	柱 間 装 置	ガラス障子
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷、板張
天 井	竿縁天井、根太床板表・野地表(一部)	須弥壇・留子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
繪 画	板戸絵	材 质	不明
彫 刻	なし		



写177-2 正面



写177-3 背面・側面



写177-4 玄関



写177-5 土間



写177-6 床の間



写177-7 小屋組



梁間8間（14.23m）、桁行12間（21.79m）と桁行が長大で、柱は全て角柱である。内部は正面側を土間として、背面を居室とする。正面側の桁行4間は、西を大玄関（土間と板間）とし、東を土間とする。東側土間はかまどや作業小屋を設ける。背面側の居室部は3列3間の9室設ける。西列は15疊、12.5疊、座敷（12疊）と続く。中央列は板間、12.5疊、背面に縁を持つ10疊、東列は板間、7.5疊、12.5疊、10疊の座敷となる。

移築の経緯が旧館林藩士・岡谷繁実の著書『館林叢談』に記載されている。旧所有者である荒川家は上三林村（現館林市上三林町）の豪農で、世帯人口も多く建物も大きかったようで「数十町四方より其の家（屋）根カ空中ニ高ク聳エテ見ユル程ナリ」と記されている。また「是時近村の赤岩村の大寺光恩寺焼失せり依て答て曰く余を以て之を考ふるに此家屋を光恩寺に寄付すべし 以下略」とあり、焼失後に寄贈したと考えられる。寺所有の「光恩寺境内全図（年代不明）」に「庫裡 明治貳年當寺七十四世隆旭建之」とあり、火災後まもなく移築したものと考えられる。移築時期は判明しているが建造年代は明確でなく、史料により江戸後期には所在していたことから江戸後期の建造と推定する。

客殿（図177-3、表177-3、写177-8～177-10）

庫裏の背面に接続する。木造平屋建、切妻屋根で、桟瓦を葺き、平入りで南面とし、三方は下屋となっている。中央に8疊を2間並べており、東側に床の間を設け、西側は押入れである。西は廊下で隔て、洗面所と便所を設ける。洗面所は土間となっており、基礎に炙られた痕跡を見るが従前の室用途は不明である。正面と背面に縁を持つ下屋にて付している。

寺伝によると、明治36年（1903）以降に歓喜院の住職の隠居場所として、歓喜院が客殿を用意したと伝わる（原史料は不明）。

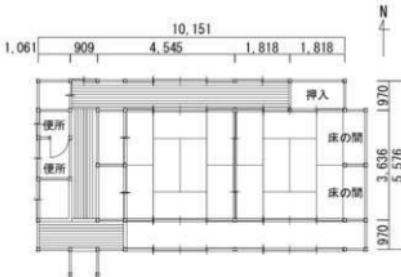


図177-3 平面図(客殿)

表177-3 客殿

建造年代／根拠	明治期／建築様式	構造・形式	正面10.85m、側面5.58m、切妻造、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石（一部切石）
軸 部	角柱、土台	組 物	なし
中 備	なし	軒	一軒疊垂木
妻 飾	小星組（桁、東）表	柱 間 装 置	ガラス障子
縁・高欄・脇障子	なし	床	畳敷、板張
天 井	竿縁天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 装	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	不明
彫 刻	なし		



写177-8 正面



写177-9 背面



写177-10 側面一東

まとめ

光恩寺の歴史は古く、最盛期は弘仁(810)～元亨(1324)の間と云われ、僧院16坊、末寺3,000余を擁し、地方豪族の氏寺として栄えた古刹である。

庫裏は史料から上三林の荒川家住宅を移築したことが明確で、来歴が確かなことが貴重である。養蚕先進国である群馬県下では、腰屋根を用いた養蚕農家としての形態が広く普及しているが、豪農であった荒川家の住宅は小屋組みの状態から腰屋根の可能性は低く、普及前もしくは、養蚕を行っていなかつたと思われる。庫裏として巧みに用途を変更、改造

し、庫裏としての存在が重要であると共に、群馬県南部の農家建築の様相を示し、群馬県下の民家史としても貴重である。また、その歴史を物語るように貴重な宝物も多数有している。

(小島恵理子)

【参考文献】

- 『明細帳』光恩寺 明治36年
- 『光恩寺由来記集』(枳祐寿集) 光恩寺 宝永6年
- 『光恩寺庫裡建物調査報告書』光恩寺 平成27年
- 『千代田村誌』千代田町教育委員会
- 『館林叢談』岡谷繁実 大正4年

179 東光寺 (とうこうじ)

表179-1

寺院名	庚王山東光寺	所在地	邑樂郡千代田町木崎357
宗派	高野山真言宗	所有者・管理者	宗教法人 東光寺
主本尊	薬師如來	仏事	薬師如來大祭大護摩供 仏生会(4/8)、盆、お施餓鬼
創立・沿革	創建不詳。応永2年(1395)12月8日僧源秀再興という。明治18年(1885)10月本堂庫裏焼失、明治19年(1886)8月再建許可となり、その後薬師堂を本堂とした。明治29年(1896)10月庫裏を建設。昭和61年(1986)4月29日、本堂再建落慶法要ならびに仁王像復修開眼法要を行った。薬師堂の改修工事を平成21年に行う。		
文化財指定	東光寺仁王像(町重文 昭和59年9月)		

位置・配置(図179-1、写179-1)

東光寺は邑楽郡千代田町役場より東に位置し、広域農道を明和町方面へ約2km進むと田園風景のなかに、薬師堂の屋根や木々が見えてくる。境内東側道

路より大きな松の木に迎えられ山門から入ると、仁王門が東に開き仁王像が左右に鎮座している。さらに仁王門を西に進むと薬師堂が東に開く。仁王門から北に行くと昭和61年(1986)に再建された本堂が南に開く。

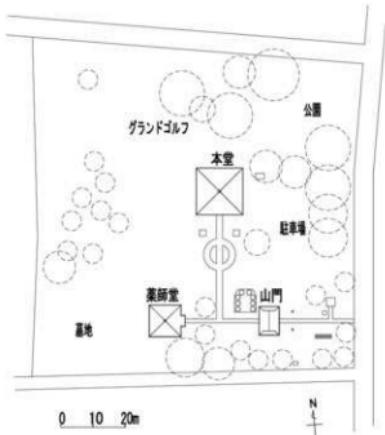


図179-1 配置図



写179-1 境内全景

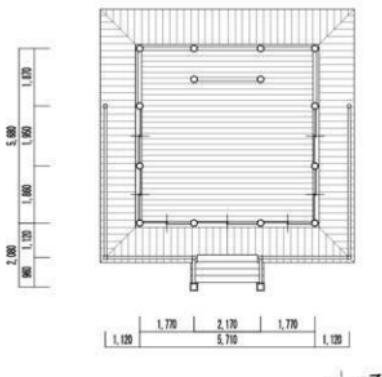


圖179-2 平面因(豪斯家)

に千代田町重要文化財1号になる。薬師堂の大改修工事を平成21年(2009)におこない、小屋組木材より墨書きを確認する。

薬師堂(図179-2、表179-2、写179-2～179-7)

建造年代の史料として平成21年(2009)大改修時に、小屋組木材墨書きにて「安永8年(1779)」と「文化3年(1806)大工 丈助、惣八郎」の墨書きが確認できる。建造年代は18世紀後期と推定する。薬師堂は正面を東に開き、正面3間(5.68m)、側面3間

(5.68m)の方形造銅板葺、正面中央部に一間向拝を設け、四方に大床を廻らせる。内部は一室で須弥壇を置く。床は板敷、天井は格天井、天井画は草花と中央に龍、その両脇に天女を描いてある。絵師は龍が主道書、天女が利道書の名が残されている。軸部は平成21年(2009)に改修した独立コンクリート基礎の上に身舎丸柱を建て、地貫、差鶴居、頭貫で固め、地長押を廻らし、柱上部に粽をつけ台輪を廻している。向拝は角柱に頭貫を掛け、身舎丸柱と海老虹梁でつなぎ、組物上部内側に手挟をつける。組物

表179-2 薬師堂

建造年代／根柢	18世紀後期／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面3間(5.68m)、側面3間(5.68m)、方形造、一間向拝付、銅板葺
工 匠	[大工]丈助、惣八郎	基 础	コンクリート基礎、基礎
軸 部	[身舎]丸柱[頭部輪付]土台無、台輪、切目・内法長押 [向拝]角柱、水引虹梁、海老虹梁、手挾	組 物	[身舎外部]拳鼻付外組 [身舎内部]拳鼻付内組 [向拝]出三斗二段
中 備	[身舎]本幕股(十二支) [向拝彫刻]本幕股	軒	[身舎]三軒繁垂木、蛇腹支輪 [向拝]二軒繁垂木
妻 飾	なし	柱 間 装 置	[正面]引違板戸 [側面]引違板戸+板壁 [裏面]板壁
縁・高欄・脇障子	四方切目縁、擬宝珠高欄	床	板張
天 井	格子天井	須弥壇・厨子・宮殿	須弥壇、厨子
塗 裝	[身舎外部]素木 [向拝]朱塗(海老虹梁・組物・柱) [身舎内部]素木、極彩色(本幕股・来迎柱組物・頭貫)、彩色(天井絵)、金襷巻(柱)	飾 金 物 等	なし
絵 画	[身舎内部]天井画(龍)、主道(墨書き)、天井画(天女)、利道(墨書き)、他天井画(草花)	材 質	漆
彫 刻	[身舎外部]本幕股(十二支)、木鼻(獅子・猿)、拳鼻 [向拝]海老虹梁、水引虹梁(唐草絵様)、中備(飛龍)木鼻(獅子・猿)、手挾(牡丹) [身舎内部]拳鼻、本幕股(花鳥)		



写179-2 正面(東側)



写179-3 背面(西側)



写179-4 向拝



写179-5 向拝虹梁



写179-6 内陣：須弥壇



写179-7 天井絵

は、内部外部とも拳鼻付出組とし、中備は透かし棊股、軒は三軒繁垂木で、妻飾りはなし。柱間装置は、正面3間引連板戸、側面両側とも2間引連板戸+1間板壁、背面3間板壁。縁は四方大床に正面側面三方に擬宝珠高欄を廻している。彫刻は、向拝水引虹梁上幕板の飛龍、向拝背水引虹梁幕板の花、木鼻は獅子と狛、手挟は籠彫牡丹、外部棊股は十二支となり、内部棊股は花鳥で飾られている。

まとめ

薬師堂は方形造の建物で軒を三軒繁垂木で深くだし全体のバランスが美しい。現在の屋根は銅板葺であるが平成21年(2009)の大改修までは茅葺であった。外部棊股は十二支を表現し四方に配置され、向拝の彫刻は木鼻を獅子・狛とし、正面中備には飛龍を置く。内部正面には見事な装飾の厨子を置き、須

弥壇には龍の彫刻があり、龍の眼はガラスがはめ込まれている。来迎柱の組物と彫刻、そして天井画の美しさが目を引く。天井画は草花と中央に龍、その両脇に天女が描かれており作者の墨書が確認できる。内部には十二神将に関わる木箱が数点残されている。又、密教寺院として背面（西側）から出入りできる入口があったが大改修時には耐震壁を設置するため開口部は壁となった。その壁の上部には水引虹梁が残されている。群馬県東部の千代田町では利根川がそばにあり、水害が多い地域に大改修をし残された貴重な建物である。

(莊司由利恵)

【参考文献】

- 『(仮称) 東光寺薬師堂改修工事図面』平成22年
- 『千代田村誌』昭和50年

182 龍泉院（りゅうせんいん）

表182-1

寺院名	祥平山龍泉院百山寺	所在地	邑楽郡大泉町城之内3-11-2
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 龍泉院
主本尊	般若如来	仏事	お施餽鬼(8/15)
創立・沿革	天文3年(1534)二代小泉城主富岡秀光の開基で、父の初代城主直光の菩提寺とし、茂林寺(館林市堀工町)の第四世梵海正音和尚を開山として迎え創建した。山号の祥平山は、初代城主の戒名よりつけたものである。慶安元年(1648)に火災にあり、伽藍を再建。文化2年(1805)再度の火災にあり、文化3年(1806)庫裡を修復し、嘉永3年(1850)僧春山が本堂を再建した。		
文化財指定	なし		

位置・配置（図182-1、写182-1）

龍泉院は群馬県南東部の大泉町城之内に所在する曹洞宗の寺院である。町の北部にある小泉城跡の北300m、元の三の丸内に位置し、山道入口は城址の東を南北にはしる道に面している。道路は元の参道である。入口の門柱を抜け、50m程参道を西に進み山門を潜ると、東に面した本堂が正面に見える。北に庫裏があり、客殿を介して本堂と繋がる。本堂南東手前の黒松の大樹は、小泉城初代城主直光のお手植えの松（樹齢500年）であり、その下に秀信公の供養塔が北向きに立っている。松の北側に奥方お手植えと伝わる藤の老樹がある。



図182-1 配置図



写182-1 境内全景

由来および沿革

龍泉院は、天文3年(1534)に二代小泉城主富岡秀光の開基で、父の初代城主直光の菩提寺とし、茂林寺(館林市堀工町)の第四世梵海正音和尚を開山として迎え創建した。山号の祥平山は、初代城主の戒名（祥平院殿豪林道逸大居士）よりつけたものである。天正18年(1590)北条氏が没落すると、属していた富岡氏一族も四散し、荒廃が進む。第7世の僧伝国はこれを憂い伽藍修復の計画をたて、檀徒と協議の上浄財を募り再興した。当時地頭の小栗又一は僧の徳を慕い幕府に寺領を願い、修復料として金若干賜ったという。この後、慶安元年(1648)10月に火災にあり、同年11月に幕府より石高14石8斗の御朱印を下賜され、慶安2年に伽藍を再建した。文化2年(1805)再度の火災にあり、文化3年(1806)庫裡を修理し、嘉永3年(1850)僧春山が本堂を再建した。昭和38年(1963)本堂の屋根を茅葺から瓦に葺替。昭和46年(1971)御拝所を増築し、庫裡は破損がひどいため新築。平成14年(2002)に客殿を新築。平成16年(2004)に庫裡を増築した。

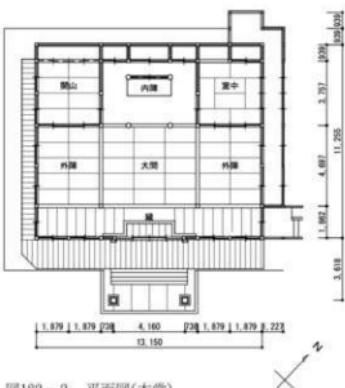
本堂（図182-2、表182-2、写182-2～182-7）

正面5.5間(14.37m)、側面5間(11.25m)で入母屋造り。屋根に桟瓦を葺く。正面に付く1間唐破風屋根の向拝は後補である。正面のみ虹梁の差鶴柱を入れる。正面と側面の東側1間のみ柱頭に台輪を廻し頭貫で固め、平三斗の組物で丸桁を受ける。側面の柱頭は実肘木のみを配し、背面は柱で直接丸桁を受ける。三方の軒を二軒繁垂木とし、背面のみせがい造で板軒である。正面に木階を設け、縁は正面と南に短手に廻す。禅宗寺院の方丈型本堂で、角柱を基本とする。内陣境の2本と来迎柱のみ丸柱である。東側1間は元は土間であったが現在は板張りとなっている。中央を大間とし、南北を外陣とする。

中央奥を板張りの内陣とし、奥に宮殿を造る。内陣西に仏壇を設け上部に大師像を祀る。内陣南の室は位牌壇を西に設け、間山を祀っている。北の室内は西に床の間を設ける。床は内陣以外畳敷きである。

大間と内陣境の欄間に龍と鳳凰の彫刻を嵌め、一手先の組物を台輪の上におき、彫刻の板支輪を組込んでいる。来迎柱は朱塗りで金襴巻が施され、眉に花頭曲線を施した虹梁が架けられ、両脇を一对の雲龍で固める。虹梁の刻線彫は金で塗られている。大間と内陣は格天井で、鏡板はすべて天井画となっており、天井画及び板戸に「法橋(北尾)重光」の墨書・落款がある。棟札は無かったが、彫刻の特徴、重光の活躍した時期を鑑み、寺伝の嘉永3年(1850)建造と考えられる。

写182-2 本堂



写182-2 平面図(本堂)

建造年代／根据	19世纪中期／建築様式	構 造 ・ 形 式	正面14.37m、側面11.25m、入母屋造、平入、瓦葺、向拝1間唐破風屋根、銅板葺
工 匠	不明	基 础	自然石、基壇
軸 部	[身舎]丸柱(内陣)、角柱(外陣) [向拝]角柱	組 物	[身舎]平三斗拳付(外部正面)、舟肘木(側面)、出組拳付(内外陣境) [向拝]出三斗
中 備	幕股(内外陣境・来迎柱上・向拝)	軒	二軒緊垂木(正面・側面)、セがい造(背面)
妻 鮎	懸魚、木連格子	柱 間 裝 置	木製ガラス戸引違い、漆喰壁
縁・高欄・船障子	三方大床、アルミ製高欄	床	疊敷(外陣・大間)、板張(内陣)
天 井	井 桟緑天井、格天井(内陣・大間)	須弥壇・扇子・宮殿	須弥壇(唐様)
塗 装	[身舎]素木、朱塗(来迎柱)、金襟巻、極彩色(影) [向拝]素木	飾 金 物 等	[向拝]唐破風(破風尻)
絵 画	天井画(法橋(北尾)重光)	材 質	檜
彫 刻	[身舎]内外陣境欄間に龍、鳳凰、幕股(獅子・鶴)板支輪(鶴) [宮殿]雲龍、獅子、板支輪(鶴) [向拝]海老虹(絵様)、水引虹梁(絵様)、木鼻(獅子・狛・手挟)、支輪(龍)、兎毛通(飛龍)		



写182-2 正面



写182-3 背面



写182-4 向拝



写182-5 内部：外陣



写182-6 外陣：欄間・幕股・中備



写182-7 内陣：須弥壇

山門（図182-3、表182-3、写182-8～182-10）
正面1間（2.92m）、側面1間（2.05m）の薬医門である。切妻屋根で棟瓦を葺く。全て角柱で妻側のみ舟肘木をのせる。妻の中備えは板薺股で斗をのせ棟木をささえる。天井は造らず、一軒で疎垂木表である。参道がそのまま延び、床に段差ではなく、扉は付いていない。背面に曲り梁を使用し中央部が高くなるようにしており、この地方によく見られる門の造り方である。境内の南東隅に総門として立つ

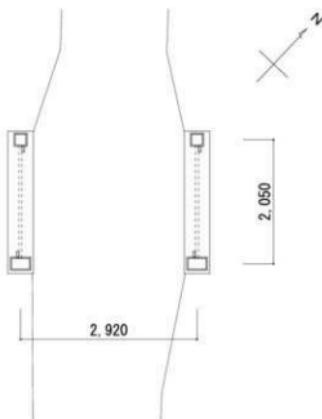


図182-3 平面図(山門)

表182-3 山門

建造年代／根据	元和元年(1615)／建築様式、寺伝	構 造・形 式	1間1戸薬医門(2.92m)、側面1間(2.05m)、切妻造、平入、瓦葺
工 匠	不明	基 础	自然石
軸 部	角柱	組 物	舟肘木(妻面)、木鼻(飛貫)
中 備	板薺股	軒	一軒疎垂木
妻 鮎	懸魚	柱 間 装 置	なし
縁・高欄・船障子	なし	床	コンクリート
天 井	なし	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	素木	飾 金 物 等	なし
絵 画	なし	材 質	檜
彫 刻	懸魚、板薺股、絵様(妻飛貫木鼻)		



写182-8 正面



写182-9 側面



写182-10 木鼻

ていたが、明治44年(1911)に現在地に移転。昭和36年(1961)二十五世正百能寛丈和尚が茅葺屋根を瓦に葺替えた。寛政2年(1790)に描かれた境内図に、本堂、三門、総門と並んで描かれ、総門と、現在の山門はほぼ同じ大きさである。板薺股や飛貫木鼻の形状、浅い彫の文様、風食等から、寺伝の元和元年(1615)建造と考えられる。

まとめ

龍泉院は小泉城主菩提寺の由緒ある寺院である。境内には初代城主直光公のお手植えの松、その奥方お手植えの藤老樹があり、花の時期には美しい景観を成している。小泉城主三代秀信公の位牌の裏面に、辞世の句とされる「誰も世に残るべきかは朝風に吹き散らしたる玉のなでしこ」とあり、歌碑が城の内公園（小泉城址）の本丸内に建立されている。本堂は曹洞宗らしい質素な外観となっているが、内部は当時の榮華が偲ばれる華やかさがある。特に内陣宮殿廻りの彫刻は見事で、来迎柱脇に対を成す彫刻の龍が號名の龍泉と合っている。歴史と共に建造物も価値のある寺院である。

(小島恵理子)

【参考文献】

- 『上野国寺院名明細帳7』群馬県文化事業振興会 平成9年
『大泉町誌(上巻)』大泉町教育委員会 昭和53年
『富岡文書』龍泉院所蔵

184 慶徳寺〔けいとくじ〕

表184-1

寺院名	傳播山無量壽院慶徳寺	所在地	邑楽郡邑楽町大字石打甲1056
宗派	曹洞宗	所有者・管理者	宗教法人 慶徳寺
主本尊	阿彌陀如來	仏事	お盆、お施餽鬼
創立・沿革	本寺の前身は天台宗正伝寺といわれ石打字間にあったとされる。天正元年(1573)佐野宗綱によって焼き払われ、同年12月小泉の龍泉院鐵翁和尚によって再興開山、曹洞宗に改宗して慶徳寺とした(寺伝、『邑楽町誌』)。		
文化財指定	慶徳寺山門(町重文 平成4年11月)、中世灰釉陶器瓶(町重文 平成4年11月)		

位置・配置(図184-1、写184-1)

慶徳寺の南を通る国道122号線は、江戸時代には日光例幣使街道を太田から分かれ、館林を経由して古河に至る、古河往還と呼ばれた街道である。当地石打は太田と館林の中間に位置し宿場があった。こ

の国道122号線から、かつて当寺の参道であった道を北へ進むと、正面に山門がある。山門を潜ると正面に本堂が建ち、東に書院が繋がり、北に開山堂と庫裏がある。境内北西に墓地が広がり、北東には竹藪に覆われた古墳がある。墓地の改修時に出土した骨蔵器の「中世灰釉陶器瓶」は15世紀末頃作られたもので、町指定重要文化財である。

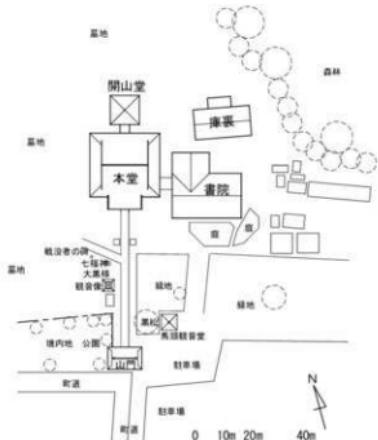


図184-1 配置図(慶徳寺)



写184-1 境内全景

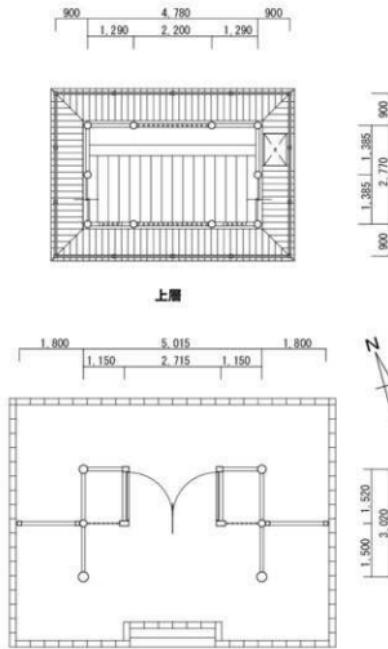


図184-2 平面図(山門)

由来および沿革

当寺は貞享年間(1684～1688)の得水船和尚(5世)時代に山門を残して諸堂宇焼失した。享保10年(1725)頃、一雙峰和尚(6世)の代に本堂、庫裏、開山堂を再建したと伝わる。昭和27年(1952)に老朽した本堂、庫裏、山門の大改修をした。昭和62年(1987)に開山堂を改築、本堂は平成25年(2013)に建て替えている。現本堂の欄間にには、旧建物の欄間彫刻を移設して飾っている。

さんもん 山門(図184-2、表184-2、写184-2～184-7)

3間1戸、側面2間の樓門で南を正面にして立つ。屋根は入母屋造銅板一文字葺、軒を二軒繁垂

木、彫刻板支輪を嵌め、組物は拳鼻付出三斗とする。基礎は切り石に改修しているが、一部自然石基礎を残し、柱脚は側面と中通りを地覆で固める。

下層は側面の柱3本を粽付丸柱、頭貫を通し、中通と背面通りは角柱を虹梁下に立てる。外周の中備は本臺股、中通りは彫刻を嵌め、木鼻は正面を象と獅子、虹梁は渦と若葉、波の絵様とする。背面の梁に装飾はなく簡素な造りである。中央に観音開きの板戸を付け、両脇間に石仏を安置する。門の左右には1間の袖室を付ける。

上層は高欄付切目縁を廻らす。柱は粽付丸柱、台輪を置き、中備に本臺股を置く。柱間装置は正面に格子窓、両脇に火灯窓を付け、側面に引違板戸、他

表184-2 山門

建造年代／根据	18世紀後期以前／建築様式	構造・形式	3間1戸樓門(5.02m)、側面2間(3.02m)、入母屋造、銅板一文字葺(当初茅葺)
工 匠	不明	基 础	基壇、切石基礎、一部自然石基礎
軸 部	[上層]丸柱(棕)、頭貫、台輪、木鼻 [下層]丸柱(棕)、角柱、地貫、頭貫	組 物	[上層外部]拳鼻付岡三斗 [上層内部]拳付岡三斗 [下層]岡三斗
中 備	[上層]本臺股(外面) [下層]本臺股、彫刻嵌込	軒	[上層]二軒繁垂木、板支輪(彫刻)
妻 飾	木蓮格子	柱間装置	[上層]板壁、板戸引違、火灯窓、格子窓 [下層]板壁、板扉般音開
締・高欄・船脛子	[上層]四方切目縁、擬宝珠高欄	床	[上層]拭板張
天 井	[上層]格天井	須弥壇・扇子・宮殿	なし
塗 裝	朱塗、檍彩色(支輪、彫刻、臺股)、黒漆(上層内部柱)	飾 金 物 等	なし
繪 画	なし	材 质	不明
彫 刻	[上層]板支輪(波、花)、木鼻(渦) [下層]虹梁(絵様)、臺股、嵌込彫刻、木鼻(渦、象、獅子)		



写184-2 全景



写184-3 側面



写184-4 下層 虹梁の絵様



写184-5 下層 木鼻



写184-6 上層 木鼻



写184-7 上層 室内

は板壁である。

建物全体は朱塗とし、板支輪、獣木鼻、裏股、中備の彫刻に極彩色を施す。内部の柱は面取をして黒漆塗とする。上層の室内北側に台座を設け、間魔大王を中心いて十王彩色坐像が置かれている。昭和27年(1952)の大改修で山門は茅葺きから銅板葺に葺き替えている。この大改修前の虹梁の絵様は単純な渦模様で、古い時代の様式を残していたという。また平成30年(2018)に銅板屋根の葺き替えと木部の塗り替え、木鼻彫刻の復元改修を行った。正面の肘木も新たに取り付けられたものである。

まとめ

山門は創建当時の天正元年(1573)の楼門と伝わる。邑楽町の重要な建物として平成4年(1992)11月26日、町指定重要文化財に指定された。象木鼻や改修前の虹梁の簡素な渦は古い形式で18世紀後期以前の形式であるが、現虹梁や木鼻の絵様、本裏股や中

備の嵌込彫刻は19世紀中期の特徴が伺える。組物や虹梁も新しく改修している。長い年月を経る中で大規模な改修が行わたると考える。現在の建築様式から当初の建造年代を推定することはできないが、改修過程については今後の調査を待ちたい。

山門正面に「間魔殿」と書かれた額が掲げられ、室内には間魔大王を中心に古い時代の十王の彩色座像を安置している。人が亡くなると7日ごとに七回墓参りを行い、百ヶ日、一周忌、三周忌の供養をし、故人の冥福を祈る習慣があるのは、この十王信仰の名残といわれている。当山門は邑楽町に現存する貴重な楼門であり、信仰と共に大切に保存されてきた重要な建物である。

(小林則子)

【参考文献】

『邑楽町誌』邑楽町 昭和58年

『邑楽町の文化財』邑楽町教育委員会

13 天増寺（てんぞうじ）

山門

寺院名	天増寺（てんぞうじ）	所在地	伊勢崎市昭和町 1645-1
宗派	曹洞宗	主本尊	聖観世音菩薩（座像）
構造・形式	3間1戸樓門、側面2間、入母屋造、軒唐破風付、銅瓦葺（当初瓦葺）		
建造年代 (根拠)	嘉永5年(1852)/ 〔格天増寺三門記〕	工匠	不明

JR伊勢崎駅より東に約1kmほどの県道68号線沿いに位置する。江戸の始めの慶長8年(1603)、初代伊勢崎藩主の稻垣長茂の願いにより創建、大胡長興寺開山の天室伊発の開山といわれる。稻垣家の菩提寺である。墓地奥には伊勢崎市指定史跡の「稻垣平右衛門長茂の墓附累代の墓所」がある。

山門の建造は、寺蔵文書より嘉永5年(1852)であり、天増寺18世徳翁大忍の発願で独力勧化により建築されている。3間1戸側面2間の楼門で、入母屋造銅瓦葺であるが、当初は瓦葺であった。

建物の柱は中央門柱のみ扁平な角柱であるが、他は丸柱で石製礎盤上に立つ。1階では柱頭に虹梁、頭貫を渡し、木鼻に丸彫りの獅子頭・牡丹をつける。中備は正面中央間のみ本幕股、その他は撥束とする。2階では四方に擬宝珠高欄付の縁を廻し三手先の腰組で支える。柱頭は頭貫、台輪を渡し、外部のみ内法長押を廻し、木鼻に獅子頭をつける。中備は本幕股で、組物は三手先尾垂木2本出しに三重に極彩色の彫刻板支輪を入れ込み、その豪華な造りや各装飾材の極彩色の彩りは目を見張るもので幕末期の造りを伝える。なお現在の極彩色等は平成10年(1998)の大修復時のものである。

(栗原昭矩)



写13-1 全景



写13-2 2階正面



写13-3 2階内部正面



写13-4 1階正面

16 大林寺（だいりんじ）

本堂・山門

寺院名	大林寺（だいりんじ）	所在地	伊勢崎市市場町1-335
宗派	曹洞宗	主本尊	聖観世音菩薩（十一面觀音）
構造・形式	[本堂]寄棟造、向拝1間軒唐破風付、瓦葺(当初茅葺) [山門]薬医門、正面1間1戸、側面1間、切妻造本瓦葺		
建造年代 (根拠)	[本堂]明治19年(1886)/寺伝 [山門]江戸後期/建築様式	工匠	[本堂]不明 [山門]不明

市北部主要地方道伊勢崎大間々線西側、国道50号交差点南約800mに位置する。文禄2年(1593)、時の赤堀城主の開基、秀山梵芝大和尚の開山である。長い参道西に山門があり、奥に本堂、手前南に鐘楼、本堂右手に庫裏等を構える。

本堂の建築は、江戸・明治と2回の火災に遭い、明治19年(1886)の再建である。平面は方丈形式6間取りで正面に入側を配し、中央手前を大間、奥を内陣とする。建物は寄棟造瓦葺で軒唐破風の向拝を付ける。側面木鼻に正面を向く獅子を付ける。内部は比較的簡素な造りで、大間天井画は花鳥と神獸が描かれ、中央の6枚には雲龍を描く。虹梁の唐草絵様は装飾化が進む。身舎は改造が進み、当初の形式等は不明であるが、全般に明治期の建築特性を伝えている。

山門は薬医門で切妻造本瓦葺である。冠木に梁3本を輪廻いで渡し、その上に組物を配し、虹梁、丸桁を載せる。比較的高い立ち、木鼻の獅子と狛、拳鼻の渦の形状や虹梁の装飾化が進んだ唐草絵様等から、江戸後期の建築と推定する。

(栗原昭矩)



写16-1 本堂全景



写16-2 本堂大間正面



写16-3 山門正面



写16-4 山門冠木廻り

17 長光寺（ちょうこうじ）

本堂

寺院名	小此木山白性院長光寺	所在地	伊勢崎市境495
宗派	天台宗	主本尊	阿弥陀如来立像
構造・形式	正面7.91m、側面14.19m、入母屋造妻入本瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根据)	江戸末期／建築様式 式	工匠	不明

東武伊勢崎線境町駅の南方に所在する。この地域は鎌倉時代から史料に名をとどめる小此木氏の境城城内にあたる。応永年間(1394～1428)に僧元高が観音木の地に開基創建する。のちに城主により城内に移されたと伝わる。永禄8年(1565)に境で施餓鬼が行なわれた記録がある。大阪夏の陣の後の元和年間(1615～24)に僧晃海によって再興する。

入母屋造妻入で、身舎の正面隅柱を独立柱とし、身舎内側に向拝空間を設ける。その先は内陣、外陣と続く。軸組は角柱に長押(切目・内法・蟻壁)がつく。向拝部は虹梁と頭貫と台輪、来迎柱部は差鴨居と頭貫と台輪からなる。来迎柱は櫛の半円柱と角柱の合成。組物は向拝部と来迎柱部が拳鼻付平三斗、向拝部の入隅と出隅が出三斗である。

建造年代は延享2年(1745)の伝承があるが、虹梁にある躍動的で細やかに植物を写実化した刻線彫と沈彫併用の唐草紋様等の建築様式より江戸末期と推定する。須弥壇には天保10年(1839)の刻銘がある。大正14年(1925)に茅葺から瓦葺へ改修、昭和55年(1980)に外陣と内陣を竿縁天井から格天井へ改修、平成26年(2014)に改修工事(瓦葺替、白壁補修、向拝部側面に白壁増築)をした。

(島崎重徳)



写17-1 全景



写17-2 正面



写17-3 屋内



写17-4 虹梁

18 愛染院（あいぜんいん）

本堂

寺院名	南嶺光山愛染院無量寺	所在地	伊勢崎市境461
宗派	真言宗豈山派	主本尊	愛染明王
構造・形式	正面16.12m、側面14.83m、入母屋造平入棟瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根据)	江戸末期／建築様式 式	工匠	[大工]上州小此木天田新六、[彫工]武州河原明戸邑飯田岩次郎

東武伊勢崎線境町駅の南方に所在する。文禄2年(1593)9月に定室法印が大学院を開山したのが前身で、その後愛染院ができたが小さな庵室だった。大学院開山後の寛永の初め境の有力者が檀家となり一寺をなした。寛永3年(1626)に客殿を建立し、安永2年(1773)に山門と鐘楼を建立した。

建造年代は天保6年(1835)と伝わるが、虹梁の紋様等の様式より江戸末期と推定する。昭和7年(1932)に茅葺から棟瓦葺へ改修した入母屋造である。その時の大工は境の内田勘次郎。外部軸部は角柱を長押(切目・内法)、頭貫、台輪で繋ぐ。組物は拳鼻付平三斗。正面に3間分の虹梁型差鴨居があり、菊水の紋様をつける。来迎柱と内外陣境柱は丸柱で、外陣と来迎柱には拳鼻付出組がつく。

内外陣境にある欄間彫刻は飯田岩次郎の初期の作品である。素木の透彫で中央間の欄間が龍、向かって右側は孔雀、左側は鳳凰である。孔雀は非常に写実的だ。長瀬町寶登山神社社殿の彫刻は晩年の作である。他の欄間彫刻、墓殿、彫刻板支輪は極彩色である。墓殿の透彫は写実的で繊細に菊、牡丹、杜若、鶴などが彫られている。

(島崎重徳)



写18-1 全景



写18-2 外陣



写18-3 内陣



写18-4 外陣欄間彫刻

21 遍照寺 (へんじょうじ)

本堂 · 三宝精神堂

寺院名	光明山常樂院總照寺	所在地	渋川市渋川744
宗派	天台宗	主本尊	枳迦三尊
構造・形式	〔本堂〕切妻造瓦葺妻入、正面5.5間(12.33m)、側面5.5間(10.45m) 1間唐破風向押付〔迴廊室三宝荒神〕1間流造替葺葺平入、正面1間(0.84m)、側面1間(0.770m)、1間向押唐破風付、唐破風、千鳥破風付「覆家有」		
建造年代 (根据)	〔本堂〕文化12年 (1815)/楳札 〔三宝荒神〕寛政4年 (1792)/楳札	工 匠	〔本堂〕大工:岸栄輔正方 他大工24名 〔三宝荒神〕大工: 山田弥四良上 星大工 森治助 他2名

本寺は市街住宅地の丘陵地に位置する。参道は両側に墓地を構える。境内は南、東側に石垣を組んだ平地にある。石段を登り山門を潜ると正面に本堂と庫裏、左側に三宝荒神の覆屋を見る。本堂は1間の唐破風付向拝、木鼻に唐獅子、狛の彫刻、組物は出三斗、中備に天邪鬼の彫刻を設ける。身舎の正面は平三斗、側面・背面は舟肘木。外、内陣の組物は出組、中備は本幕股。内外陣の欄間に極彩色の彫刻がある。棟札により文化12年(1815)の建造である。三宝荒神は一間社流造柿葺平入。正面1間(0.84m)、側面1間(0.77m)。向拝1間、唐破風、千鳥破風付、三方縁を回らし、脇障子を設ける。軸部身舎は丸柱、向拝は角柱(几帳面・地紋彫)、水引虹梁、海老虹梁、手挾を設ける。二連出三斗一体型、軒は飛燕打越ニ軒繁垂木。身舎は三手先、尾垂木付。正面は棟唐戸(彫刻)側面・背面共彩色彫刻を施す。

(須田 審一)



写21-1 本堂正面



写21-2 本股内部



第21-3 正面



写21-4 亮



写21-5 手挾海老虹梁

22 神宮寺 (じんぐうじ)

本章

寺院名	慈願山福聚院補 宮當	所在地	波川市有馬1301
宗派	天台宗	本尊	觀世音菩薩
構造・形式	正面7間(15.00m)、側面5間(10.46m)、入母屋造、1間向拝入母屋付、平入、銅板葺(当初 瓦葺)、6間取		
建造年代 (根拠)	享保19年(1734) 樺木	工匠	[本堂]當村 齋藤 勘七[樺木]

本寺はJR上越線八木原駅北西に位置し、北に旧村社有馬渠口神社が隣接する。寛弘元年(1004)に創建し、慶安5年(1652)に開山して、明暦2年(1656)長泉寺から神宮寺に寺号を改称した寺院で、境内は山門脇に大日如来石仏像が安置され、本堂左手前に平成18年に建立した観音堂がある。真光寺に残されている「分限書上帳」によると本堂は享保11年(1726)消失し、棟札に享保19年(1734)に再建したと記録されている。現在の堂宇は昭和56年(1981)に屋根葺き替えされたもので、正面7間、側面5間、入母屋造銅瓦葺、1間向拝入母屋造付である。向拝は木鼻に獅子・狛の彫刻、組物に出三斗、中備に特徴のある寺紋入り幕股を設けている。身舎軸部は角柱上に舟肘木を設け、一部擬宝珠高欄付の三方切目縁を廻した比較的簡素な意匠になっている。再建年代は「分限書上帳」に記述されている棟札の写し書の享保19年(1734)を再建年代と推定する。なお欄間彫刻の宝曆8年(1758)と須弥壇の天明5年(1785)は後補で、この頃に寺院として整えたと記録されている。当本堂は18世紀中期の群馬県内の寺院建築様式を考察するうえで大変貴重な遺構である。

(藏井宏典)



写22-1 全署



写22-2 向挥木鼎



写22-3 外·内阵櫈間影刻



图22-4 廊下外障入口影刻

23 良瑞寺（りょうさんじ）

本堂・鐘樓門

寺院名	如意山良瑞寺	所在地	渋川市上郷2919
宗派	曹洞宗	主本尊	如意輪觀音菩薩
構造・形式			
	[本堂]入母屋造瓦葺平入、正面8間(18.9m)、側面6間(14.12m)　[鐘樓門]銅板葺入母屋造、二軒繫垂木、正面3間1戸八脚門(二重鐘樓門)、正面(6.06m)、側面2間(3.81m)		
建造年代（根拠）	[本堂]嘉永2年(1849)/櫛札 [鐘樓門]寛保元年(1742)/小屋東墨書き	工匠	棟梁:内山山城 藤原吉久

市内西方の丘陵地に位置する。渋川西バイパスから沢に接する道を進むと鐘樓門を見る。右手に延命地蔵を見る。鐘樓門を抜け石段を上ると正面に玄関、左に本堂、右に庫裏がある。境内は道路側に石組し平地を造成している。境内は鬱蒼とした森に覆われて、本堂南西に経堂・薬師堂を配し、北東の旧千音寺遺址には市重文の五輪塔がある。

本堂は入母屋造瓦葺平入六間型の平面。外部は絵様肘木、漆喰塗りの簡素な造り。妻飾は二重虹梁大瓶束で笠形を付け、虹梁間を幕股や平三斗で支持する。内部は丸柱とし来迎柱上に出組を設け、彫刻欄間を設け、格天井には天井絵が描かれる。

本楼門は左右に金剛力士像を置き、2階には鐘楼を吊し格天井には花鳥絵を描く。軸部は礎盤の上に丸柱棕皮、地覆、腰貫、木鼻付頭貫、台輪を設け、出組で縁と軒を支持し、1階中備は幕股、天井には4枚の天井絵が描かれ、墨絵の脇に「子蕪齊兼伝筆」の墨書がある。昭和37年(1962)屋根葺替え時出来た小屋束に「于時寛保元龍集辛酉孟夏吉祥日」と有り、寛保元年の上棟が明らかである。

(須田睿一)



写23-1 本堂正面



写23-2 外陣正面



写23-3 鐘樓門正面



写23-4 鐘樓門2階天井絵

25 角谷戸薬師堂（すみがいとやくしどう）

薬師堂

寺院名	角谷戸薬師堂	所在地	渋川市北橘町八崎
宗派	なし	主本尊	薬師如来
構造・形式			
	正面3間(4.27m)、側面2間(4.87m)、三間社方形造、向拝一間、鉄板葺		
建造年代	天明5年(1785)/ (根拠)星野家文書	工匠	大工:(星野)幸右衛門

本薬師堂は、渋川市の東方赤城山山西南麓と利根川左岸の河岸段丘上傾斜地に位置する。元禄11年(1698)、地元の園田八右衛門を願主に創建。内陣厨子内に薬師如来が祀られ、春季例祭では、住民の健康祈願の場として地域に親しまれている。

南より石段を昇ると正面に薬師堂が建ち、境内周囲に多くの石造物が配されている。

薬師堂は、三間社方形造鉄板葺、一間の向拝付で四方に切目縁を廻らす。内部は前後に二分、奥は一段高い内陣とし、手前の外陣を板張り、格天井とする。身舎柱は礎石に棕付丸柱を立て、縁長押、内法長押、頭貫で固め、向拝は礎盤に几帳面棕付角柱を立てて虹梁で繋ぐ。身舎組物は出組、外内陣境の虹梁に幕股と出組の詰組。向拝組物は出三斗、中備は欠損、身舎・向拝を絵様刻線影の海老虹梁で繋ぐ。柱間装置は、舞良戸、横板壁とし、軒は一軒疊垂木で、方形屋根に擬宝珠が設けてある。内部格天井に、明治初年に72枚の花鳥風月絵や俳画が描かれており、1枚だけ「間引き絵」があり市重文に指定されている。現在の薬師堂の建造年代は、建築の細部意匠や古文書の記述により、天明5年(1785)と推定される。

(難波伸男)



写25-1 正面



写25-2 内陣



写25-3 天井絵



写25-4 天井絵(間引き絵)

26 雙玄寺（そうげんじ）

本堂

寺院名	赤城山護國院雙 玄寺	所在地	渋川市北橘町八崎 1091
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼如來
構造・形式	正面7間(18.25m)、側面6間(13.40m)、入母屋造、 星造、平入、銅板葺(当初茅葺)、6間取		
建造年代 (根拠)	安政2年(1855) / 棟札	[大工棟梁]栗原源 兵衛(棟札)	

本寺は渋川市東南で赤城山麓の丘陵地、利根川の東に位置する。本尊は釈迦牟尼如來である。境内には阿弥陀石仏像、薬師如來像が安置され、市重文の六地蔵は室内に保管されている。「北橘村誌」によると天正5年(1577)八崎城主長尾左衛門尉平憲景公の創立で、白井雙林寺第十世操芝永旭禪師を招請して開山し、文政12年(1829)本堂・庫裏等を消失、安政元年(1854)11月に上棟に到り、翌安政2年(1855)に完成したと棟札にある。堂宇は正面7間、側面6間、入母屋造、平入、銅板葺で一間向拝付である。向拝は唐破風銅板葺で、正面軸部は礎盤の上角柱、組物は出三斗、木鼻に獅子・象、中備に彫刻を嵌め、透彫り手挟を設け、海老虹梁で身舎と繋ぐ。身舎軸部は礎石の上角柱、正面大斗絵様肘木を設けている。内部は内陣及び外陣境の欄間に素木の透彫り彫刻を嵌め、柱上に出組受け、中備に本幕股を付けている。建造年代は再建年代と大工棟梁と共に棟札で明らかであり、再建年代を安政2年(1855)とする。彫刻欄間、水引虹梁の絵様、幕股等貴重な意匠や機構が見られ、19世紀中期の本県の建造物として重要な遺構である。

(藤井宏典)



写26-1 全景



写26-2 中備(彫刻)



写26-3 内陣正面



写26-4 外陣欄間彫刻

35 字輪寺（じりんじ）

本堂、栄陽門

寺院名	朝雲山妙覺院字 輪寺	所在地	北群馬郡棟東村広 馬場3981
宗派	真言宗豈山派	主本尊	阿弥陀如來
構造・形式	[本堂]正面11.29m、側面9.37m、入母屋造、 平入、瓦葺(当初茅葺) [栄陽門]四脚門、切妻造、 平入、瓦葺		
建造年代 (根拠)	[本堂]18世紀後期 / 建築様式 [栄陽門]安永7年 (1778) / 寺伝	[本堂]大工 小林 勘五郎(墨書き) [栄陽門]宮大工 青山数馬(寺伝)	

伊香保街道柏木宿(棟東村大字広馬場字宿)にあり、寛永年間(1624~1644)の街道整備により、宿の中央に設置された。伊香保への近道として賑わい、船尾山・実相坊とも呼ばれていた。開創は宝亀元年(770)、伝教大師により開創。柏木宿に面した石段を上り、栄陽門と呼ばれる寺門をくぐると正面に觀音堂、北側に本堂が南向きに建つ。

本堂は昭和50年代に改修し、残っているところは少ないが外部に舟肘木、せがい造の古い様式を残している。内部は6間取り、来迎柱上部は平三斗、向拝は後補である。須弥壇内部に「天明三菱卯3月十二日廿五世押憲口之、大工・小林勘五郎口○、同黒沢源藏口○」の墨書きが残る。虹梁の絵様がレリーフ化しているなどの建築様式から、建造年代は18世紀後期と推定する。須弥壇と同じ時期とみて相違ない。

栄陽門は装飾が少なく素朴であるが上部組物に平三斗で拳鼻、幕股が付く。宮大工の青山数馬は和田山の棟梁松本主水栄貞の門弟である。庫裡は平成8年(1996)頃まで建っていたと伝わる。

觀音堂は「群馬郡三十三番札所」の第一番札所となつており、木彫り(寄木造り)の十一面觀音を祀っている。

(森田万己子)



写35-1 全景



写35-2 内陣



写35-3 全景



写35-4 組物

39 光琳寺（こうりんじ）

本堂、山門

寺院名	管持 ^{官持} 山寶院院光琳寺	所在地	佐波郡玉村町飯塚 174
宗派	天台宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	[本堂]正面17.8m、側面13.5m、寄棟造瓦葺(当初草葺) [山門]3間1戸襍医門		
建造年代 (根据)	[本堂]延享元年 (1744)/ 棟札 [山門]18世紀中期 /建築様式	工	[本堂]大工 女屋 匠 村□□、天田 [山 門]不明

玉村町の北東部に位置する寺院である。寛永17年(1640)に上野寛永寺、天海の弟子尊忠により創建された。本尊は阿弥陀如来であるが、西の間に置かれ、中央の内陣に元三大師が祭られている。

本堂は間口9間側面7間の寄棟造瓦葺で向拝はない。6間取りで手前一間に廊下を配する。屋根は昭和28年(1953)に瓦葺に改装され、それ以前は茅葺であった。棟札によると建造年は延享元年(1744)である。組物は軒周りを舟肘木とし、外陣正面に出組、内陣米迎柱上に出三斗組を用い、中備は外陣正面のみに板幕股を用いている。虹梁の唐草様は渦と若葉が離れ簡素である。装飾はそれ以外見られず質素な意匠となっており、18世紀中期の建築様式を伝える建物として貴重である。

山門は3間1戸の瓦葺で薬医門形式とし、柱の下に切石基礎を置いている。山門には棟札が残されていないが、虹梁の唐草様や木鼻の意匠、幕股など簡素であり、本堂と同じ頃の18世紀中期の建築と推定される。玉村町の寺院における山門で最古であり、18世紀中期における本格的な薬医門形式を伝える建物であり価値が高い。

(角倉ゆき枝)



写39-1 本堂



写39-2 本堂外陣正面



写39-3 山門



写39-4 山門上部

40 観照寺（かんしょうじ）

本堂

寺院名	管持 ^{官持} 山吉祥院觀照院	所在地	佐波郡玉村町上之手1282
宗派	真言宗豈山派	主本尊	不動明王
構造・形式	正面13.0m、側面10.5m、寄棟造瓦葺、平入、一間向拝付(後補)		
建造年代 (根据)	安政4年(1857)/ 棟札、虹梁刻線文 字	工	[彫工]小林栄次郎 他3名 [絵師]雲 崖・玉齋

創立は鎌倉初期、元久元年(1204)明衆上人の開山による。寺地は平安時代天慶2年(939)にこの地を開いた玉村保の地頭玉村太郎の旧地で「錦野の里」と呼ばれ、玉村町中心部に位置している。

本堂は一時衰退していたが慶長2年(1597)中興開山、その後弘化2年(1845)玉村宿から出た大火で焼失し、安政4年(1857)に再建されたものであり、棟札に記されている。寄棟平入で、近年増築された一間の向拝を持つ。外部は柱の上に舟肘木とした簡素な造である。内部は手前一間を廊下とした6間取りで内陣と外陣の正面を平三斗組としている。外陣欄間には見事な彫刻が嵌込まれている。仏前欄間の裏側に、注文受として弥勒寺音八、彫工として小林栄次郎、武政常三次らの名が刻まれている。音八は境下渾名出身の本県を代表する彫物師であり、小林、武政も武州の流れをくむ彫物師である。また文久2年(1862)と刻まれ、本堂再建の5年後の作であることが分かる。外陣天井には花鳥の美しい天井絵が広がり、これは「雲崖・玉齋」刻銘がある。玉齋は玉村で活躍した絵師であり雲崖は神楽寺の僧でもあった。

(角倉ゆき枝)



写40-1 全景



写40-2 内陣



写40-3 外陣欄間彫刻



写40-4 天井絵

42 (岩鼻)観音寺 ((いわはな)かんのんじ)

如意輪観世音堂（北向観世音堂）

寺院名	福聚山 ^{ふくしゆ} 了院觀音 ^{りょういんくわん} 寺	所在地	高崎市岩鼻町253-1
宗派	高野山真言宗	主本尊	如意輪觀世音
構造・形式	切妻造、向拝1間付、瓦葺		
建造年代	文政2年(1819) (根拠) 棟札	工匠	[棟梁]矢ヶ崎善司 昭方他

県道前橋長瀬線が烏川を渡る柳瀬橋北、旧中山道と交わる交差点「岩鼻町」の東にある境内に、当観世音堂が北面して立つ。創建時期は明らかでないが、弘法大師の東国巡録にまつわるとの謂われを伝える。

建物は江戸時代後期、文政2年(1819)に建てられた小さな仏堂（観世音堂）である。現在両翼に脇部屋を持つが、昭和47年(1972)頃の増築である。近傍の観音寺が管理し、古くより北向子育観世音として地域で信仰され、その大法要としての「子育観世音大祭」は宗教の枠を越えて地域全体で主催されている。建物を見ると元々は正面1間側面2間という小さな堂宇であるが、江戸時代後期の装飾性豊かな、特に彫刻に手の込んだ造りとなっている。棟札より棟梁は、諏訪大社春宮を手掛けた諏訪大隅流の柴宮長左衛門矩重(1747~1800)の直弟子である矢ヶ崎善司昭方(1772~1841)であり多くの門弟も携わっている。櫛の目を生かした大胆な向拝中備の透彫りの龍や、海老虹梁の籠彫の龍等の彫物には目を見張るものがある。矢ヶ崎善司昭方は当観世音堂を皮切りに、富岡、松井田、下仁田と立て続けに群馬で仕事を重ね、近県では本庄市にある金鑽神社の大門も手掛けている。

(栗原昭矩)



写42-1 全景



写42-2 向背正面



写42-3 向背侧面



写42-4 外陣欄間彫刻

43 (赤坂)長松寺 ((あかさか)ちょうしょうじ)

本堂

寺院名	赤坂山 ^{あかさかさん} 長松寺 ^{ちょうそうじ}	所在地	高崎市赤坂町30
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼佛
構造・形式	正面16.1m、側面14.6m、入母屋造本瓦葺、向拝一間		
建造年代	寛政元年(1789) (根拠) 棟札	工匠	[大工]新井林右エ門

永正4年(1507)に臨済の僧嶽應元海が金井の地（現在の同市末広町の北部辺りと伝わる）に創立した。しかし、後に衰微して無住の寺になった。寛永元年(1624)になり興禪寺（同市下横町）6世虎谷春喜師が現在の地に移転し中興し、臨済宗より曹洞宗に改宗した。それで同師を以って開山とした。また、文明年間(1469~1487)の開創説もあるが定かではない。

本堂の建造年代は棟札によると寛政元年(1789)である。庇部は身舎とは年代感が違うように見受けられるが、天井絵が向拝と大間（外陣）天井に描かれており、作者も狩野探雲が寛政元年(1789)(天女)と同3年(1791)(龍)に描いたものである。これは市の文化財の指定を受けている特に大間の天井絵の龍は見事である。全体的には正面16.1m、側面14.6m縁付きの6間取、瓦葺入母屋造である。特に大間の支輪、欄間彫刻も素晴らしいものがある。組み物は内陣内と大間にある。建造年代は棟札どおり寛政年間の建造物と推定する。

(福田峰雄)



写43-1 全景



写43-2 大間・内陣



写43-3 向拝天井絵



写43-4 大間の支輪と十六羅漢像

45 天龍護国寺〔てんりゅうごこくじ〕

本堂

寺院名	新比叡山本実院天龍護国寺	所在地	高崎市上並木町922
宗派	天台宗	主本尊	慈惠大師
構造・形式	正面17.07m、側面11.58m、寄棟造瓦葺(当初茅葺)		
建造年代(根拠)	19世紀前期/建築様式	工匠	不明

市東部に位置する本寺院は、貞觀6年(864)延暦寺第三代座主慈覚大師が開山。比叡山延暦寺に模して建立され山号を新比叡山とし、僧坊三百余りを有する東國天台宗の中心靈場であった。延長6年(928)醍醐天皇の勅命による小野道風直筆の扁額(市指定重文 昭和41年)が残されている。

本堂は6間取りの手前一間を廊下とし、寄棟造瓦葺平入、向拝軒唐破風付で規模は大きい。三方大床を廻しているが現在東側は廊下となっている。外部組物は舟肘木、内部は出組で中備えはない。内部の軸組は櫛の素地で柱も太く堂々としており、また内外虹梁の唐草様も力強い。「本堂再建立書上扣」(『高崎市史』)によると、天明5年(1785)に焼失し、寛政9年(1797)に届出、5年を要し本堂再建にこぎつけ享和元年(1801)10月中旬には建立すると円覺院・住心院法印に届出たとある。唐草様や建築的特徴から建造年は享和元年とみてよい。

本尊は慈惠大師自作の像と言われ60年に一度丙午の年に御開帳されるという。江戸時代は高崎藩主の祈禱所として崇敬され、また文化人も集まつたといふ。創建当時比叡山より移植されたという並木3本(現在えんじゅのみ)がある。

(角倉ゆき枝)



写45-1 全景



写45-2 向拝



写45-3 外陣正面



写45-4 来迎柱上部

48 長年寺〔ちょうねんじ〕

山門

寺院名	室田山長年寺	所在地	高崎市下室田町1451
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如來
構造・形式	【山門】1間1戸 棟門菱形(3.00m)、側面1間(1.97m)、切妻造、平入、瓦葺		
建造年代(根拠)	【山門】江戸後期/建築様式	工匠	【山門】不明

明応元年(1492)創立。開基は初代鷹留城主長野伊予守業尚。開山は上州白郷井双林寺三代の住職雲英禅師である。延徳2年(1490)、草津川浴中の業尚の帰依を得、居城鷹留城の東南一角に当寺が開かれたという。境内には、業尚をはじめ箕輪城主長野業政など長野氏累代七人の五輪塔が安置されている。

本堂は、火災で焼失後の昭和30年(1955)に再建したものである。外陣は折上格天井で、龍や鳳凰など肉厚な欄間彫刻をもつ。北側の開山堂の天井画(龍)は旧羅漢堂より移設したもので、通路には陶器製五百羅漢を安置している。庫裏は、棟名神社双龍門棟梁清水和泉守充賢の息子浅五郎の手により明治42年(1909)に建築したものを昭和60年(1985)に改築した。

山門は、細部意匠より江戸後期につくられたものと推定する。切妻の瓦屋根は、正面より背面側が深くなつておらず、棟門形式であるが控柱で安定性を増している。正面梁上を香挾間で飾り、親柱と控柱をつなぐ貫上に板棟蓋を置く。

多くの古文書を残す寺院として知られる当寺であるが、境内に残る伝説、昔を偲ぶ碑や宝塔、池や樹木など豊かな自然が一体となり、心を満たしてくれる。

(吉垣内英子)



写48-1 山門全景



写48-2 山門側面



写48-3 本堂



写48-4 庫裏

50 (水沼)蓮華院 ((みずぬま)れんげいん)

観音堂

寺院名	蓮華院	所在地	高崎市倉渕町水沼 1303
宗派	真言宗豈山派	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	正面3間、側面3間 屋根 方形、鉄板葺		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式 式	工 匠	不明

『倉渕村誌』の別冊に、水沼遺跡の冊子がある。その中の写真の一部から蓮華院本堂が確定され、現在の本堂は昭和19年(1944)以後の再建が明らかであり、今回の調査対象から外れる。

境内には本堂のほかに、観音堂を本尊とした観音堂(通称北向堂)がある。今回、この観音堂を調査対象とする。調査地は郵便局前の、烏川にかかる水沼橋を渡り終るとその地点が駐車場で、境内は正面の小高い丘の中腹に位置する。石段から始まる山門(四脚門)をくぐり左右に石仏や石塔がある階段を上り詰めると、観音堂の正面に出る・通称の通り、堂は北向きで、正面3間、側面3間、屋根方形鉄板葺、木鼻は獅子頭、軒は正面、側面ともに1間、半繁垂木向拝は角柱、1間唐破風付、水引虹梁上の蔓股は龍と思われる彫刻である、大床は、四方縁高欄付き、親柱は、擬宝珠、海老虹梁の籠彫が目に付く。現在の観音堂は文久2年(1862)7月26日落雷のため火災となり、翌文久3年(1863)に新築された(『倉渕村誌』)。観音堂手前の1対の石燈籠の、背面の刻み文字は寛政3年(1791)と読める。

(城田富志夫)



写50-1 全景



写50-2 外陣・内陣



写50-3 外陣欄間彫刻



写50-4 内陣欄間彫刻

51 全透院 (ぜんとういん)

本堂、地蔵堂、山門

寺院名	三倉山全透院	所在地	高崎市倉渕町三ノ倉574
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼佛
構造・形式	[本堂]正面9間(20.02m)、側面7間(14.25m)、入母屋造、平入、瓦葺 [地蔵堂]正面側面3間、入母屋造、平入、千鳥破風付、向拝1間軒唐破風付、銅板葺 [山門]正面1間(4.48m)、側面1間(3.58m)、入母屋造、軒唐破風付、金属板葺		
建造年代 (根拠)	[本堂]18世紀後期 建築様式 [地蔵堂]嘉永2年 (1849)／桟札 [山門]18世紀後期 建築様式	工 匠	[本堂]不明 [地蔵堂]棟梁 清水和泉藤原充賢、彫刻 小林源太郎 [山門]不明

延徳元年(1489)に当時の領主木部新九郎によって寺の基が開かれ、大永2年(1521)になって大戸城主浦野氏の庇護の下に紹舜大和尚を招いて開山したと伝える。高崎市街から北東へ25km、草津街道三ノ倉上宿に位置する。

本堂は、三ノ倉城(栗崎城)跡の一部にあり、石垣上の高台に築かれ、西に地蔵堂がある。ともに昭和期に大規模改修が行われたが、厚肉彫の彫刻や格間画などは引き継ぎ、見応えがある。地蔵堂は正面側面4.73mの三間堂で、棟梁は棟名神社双龍門を建築したことで知られ、彫刻師は小林源太郎を輩出した熊谷の住人である。200m程の石壘の参道にある山門は鐘楼門の形式をとり、全体的に朱色が施されている。詰組の蔓股には、それぞれ異なる鳥や小動物があしらわれている。地蔵堂南の階段下にある朱塗門は、山門として参道にあったものだという。絵様は多様であるが素朴で江戸後期の建築と推定する。歴史と時代を感じる、心落ち着く寺院である。

(吉垣内英子)



写51-1 境内全景



写51-2 本堂外陣内陣境



写51-3 地蔵堂 向拝



写51-4 山門彫刻

52 妙福寺（みょうふくじ）

本堂

寺院名	長中山妙福寺	所在地	高崎市箕郷町西明屋甲633
宗派	日蓮宗	主本尊	釈尊像
構造・形式	正面8間(14.12m)、側面7間(12.47m)、向拝1間、寄棟造、瓦葺		
建造年代 (根拠)	18世紀後期／建築式様	工匠	不明

箕輪城主長野信濃守業政が開基した寺院と伝え。在原平朝臣の子孫といわれる長野家が棟名神社西方に祈願所として、現在の浜川町に堂宇を建立したのが始まりで、長野家と中沢家（委細不明）の両家頭字をとり山号としたという。その後、城の裏鬼門の護りや奥方の祈祷所として業政が現地に移転させたとする。高崎市の中心地から北西約10kmに位置し、近隣には市民の憩いの場である公園や湖がある。県道から一本入った住宅地に近接する寺院である。

本堂は寄棟造瓦葺きで屋根正面の一部を向拝上部までのばしている。以前は茅葺だったという。正面8間、側面7間で三方に縁が廻る。30年程前まで木建具であったが、檀家による寄付でアルミサッシに変わった。東側の庫裏とは40~50年前に渡り廊下で繋いだという。軒廻りの組物を大斗舟肘木とし、屋内では出組、内外陣境に棗股がある程度で全体として簡素なつくりであるが、来迎柱脇の肉厚な彫刻欄間（波と珠雲）は極彩色をともない目を引く。

境内には、赤穂浪士一の剣豪と言われた堀部安兵衛(1670~1703)築造と伝える庭園が現存し、枝垂れ桜の古木が風物詩となっている。毎年11月の「子育鬼子母神大祭」には多くの人で賑わい、地元に愛されている寺院である。

（吉垣内英子）



写52-1 全景



写52-2 外陣・内陣



写52-3 外陣内陣境紅梁絵様



写52-4 内陣欄間彫刻

56 宝勝寺（ほうしょうじ）

本堂

寺院名	宝勝寺	所在地	高崎市新町2523
宗派	真言宗豊山派	主本尊	延命地蔵、不動明王、飯糰大権現
構造・形式	正面3間、側面2間、入母屋造瓦葺、向拝一間 広縁6室		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築式様	工匠	不明

天文11年(1542)多胡郡池、蓮勝寺院代が地蔵尊を創立し、常運、行順、清澄、道賢の四世にわたり同年より天正11年(1583)に及び僧義尊により開山。弘治3年(1557)僧常運が木造の本尊を安置した。旧多野郡新町、現高崎市新町の西北部に位置し区画整理により門が建て替えられて石畳の参道が本堂正面に向う。門から左手に6地蔵尊があり本堂正面左に鐘楼門が現存している。敷地西隣には八幡神社が祀られてる。本堂は瓦葺、入母屋造、東向きにあり建築当初とほぼ同じ位置。右には庫裏が併設。現住職が居住している。調査対象である本堂は、嘉永3年(1850)に火災があり同4年(1851)に一部再建された記録があり、明治44年(1911)に落成したと伝える。入母屋造り瓦葺。向拝の虹梁にみる絵様や木鼻、来迎柱に古い様式も見られることから、明治末期の建造と推定する。

（福田峰雄）



写56-1 全景



写56-2 向拝柱組物



写56-3 来迎柱欄間彫刻



写56-4 内陣須弥壇

62 光徳寺（こうとくじ）

總門、楼門

寺院名	龍田山光徳寺	所在地	藤岡市藤岡2378
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼佛
構造・形式	[總門]高麗門、切妻造、瓦葺 [樓門]3間1戸、入母屋造、瓦葺		
建造年代（根拠）	[總門]18世紀前期 /建築様式 [樓門]18世紀中期 /建築様式	工匠	不明

当地は藤岡市南、国道254線藤の丘トンネル東の信号を北に入って100m程にある。東に面した總門を潜ると、先に樓門があり、さらに新築された本堂、右に庫裏となる。

光徳寺は龍田山といい、愛知県小牧市にある正願寺の末寺である。芦田備前守光徳の子、右衛門尉光玄が文明2年(1470)父の菩提を弔う為、信州佐久郡芦田に寺を造営したのに始まる。天正18年(1590)に芦田氏が当地に移住したのに際し、光徳寺も現在地に移ったという。本堂は老朽化のため近年新築された。残された總門は入口近くにある高麗門で瓦葺の切妻一軒疊垂木である。2本の本柱が棟木を支えその下に虹梁とし、虹梁の中央で菱形付の大瓶束で棟木を支えている。虹梁には唐草絵様が彫られているが、刻線彫で渦も良く巻き込んでいることから、江戸前期の建造とみられる。樓門は3間1戸で瓦葺入母屋屋根とする。虹梁の渦巻絵様を見ると、總門と同じか、少し新しい建造とみる。

(羽鳥 悟)

【参考資料】

『藤岡市の民家と寺社洋風建築』藤岡市教育委員会 昭和55年



写62-1 総門全景



写62-2 総門 虹梁



写62-3 樓門全景



写62-4 樓門 虹梁

63 円満寺（えんまんじ）

本堂、楼門

寺院名	護國山金剛院竹林寺	所在地	藤岡市東平井甲1070
宗派	真言宗智山派	主本尊	大日如来
構造・形式	[本堂]正面3間、側面5間、入母屋造、妻入、向拝1間、瓦葺 [樓門]3間1戸、入母屋造、瓦葺		
建造年代（根拠）	[本堂]18世紀中期 /建築様式 [樓門]19世紀前期 /建築様式	工匠	不明

当地は藤岡市南西部、平井地区にある。境内南に瓦葺二層の樓門があり、それを潜った先に本堂がある。

寺伝によると円満寺は京都の智積院を總本山として、護國山金剛院という。建長4年(1252)親快法印開創の覚洞院(極楽寺)上杉重房の祈祷所となり、永享元年(1429)上杉憲実が鎌倉より平井退去の折り円満寺とし再建した。その後数回の焼失後、3回目の再建は明和5年(1769)12月24日上棟建立された。その後昭和28年(1953)5月、それまでの草葺き屋根を瓦葺に改修する際に、規模を3分の1に縮小したとされている。本堂は入母屋瓦葺妻入で、1間の向拝を持つ。平面は正面に外陣、奥に内陣の2間取で、奥に位牌棚が付く。内陣の須弥壇には大日如来の御本尊が置かれている。建造年代は寺伝で明和5年(1769)とあるが、墓脛の形状、拳鼻の渦などから、18世紀中期とみる。同じく寺伝で樓門の再建は享和3年(1803)とされるが、墓脛、渦巻絵様の形状から、19世紀前期の建造とみる。

(羽鳥 悟)

【参考資料】

『藤岡市誌』藤岡市教育委員会



写63-1 全景



写63-2 外陣・内陣



写63-3 内陣組物



写63-4 樓門

65 満福寺（まんぶくじ）

仁王門

寺院名	三波山清水院満福寺	所在地	藤岡市諱原341
宗派	時宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	3間1戸楼門、入母屋造、銅板葺		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式	工匠	不明

当地は藤岡市の南、鬼石町（旧多野郡鬼石町）に在り、国道462号線を南に向かい、鬼石市街地手前で神流町方面に向かって右に折れ、1kmほどの右手に在る。道路に沿った石段を登ると楼門（仁王門）となり、奥には本堂と庫裏が並ぶ。

三波山清水院満福寺と称し、藤沢清淨光寺末寺の時宗。延文3年(1358)真下伊豆守勘解曲左衛門尉、法名万徳院与阿弥陀仏の開祖と言われ、本尊は法冠阿弥陀如来（立像）である。開山は桂光院基阿登雲和尚で天正19年(1591)11月徳川家康より朱印高三石を送られ、後、本堂は元禄11年(1698)再建されたとされる。

仁王門は3間1戸楼門造で、屋根は銅板葺入母屋で、軒を二軒繁垂木とする。組物は下層、上層とも二手先とし、中備は下層、上層とも幕股と彫刻嵌込みとする。彫刻は幕股内部、獅子鼻、虹梁などに見られる。虹梁の彫刻は樹木の浮彫と、獅子頭で、間を地紋彫としている。

建造年を示す資料は見当たらなかったが、獅子頭の彫刻、幕股内部の彫刻のはみだし具合、虹梁の樹木のレリーフの様子などから、江戸末期の建築とみる。

（羽鳥 悟）



写65-1 全景



写65-2 組物 虹梁



写65-3 組物 木鼻



写65-4 虹梁 幕股

66 福持寺（ふくじじ）

本堂

寺院名	慶石山福持寺	所在地	藤岡市鬼石484
宗派	真言宗豊山派	主本尊	延命地蔵菩薩
構造・形式	正面5間、側面5間1切妻造、向拝1間、瓦葺		
建造年代 (根拠)	19世紀中期／建築様式	工匠	不明

鬼石市街から西に入って100mに山門がある。右に境内地となり鐘楼、地蔵堂、不動堂、太子堂、御影堂と並ぶ中、奥正面に本堂と庫裏が並んで南面する。境内地から西に広大な墓地となっており、山腹を走る国道462号線まで続く。

寺伝によると建久2年(1191)、渋谷荘司国重の弟、福千代丸が当國への巡遊の途中でこの地で病没し、当寺に葬られ、重国は深くこれを悼み、近傍の土地を寄進し、寺觀を修理し、冥福を祈ったとされる。庫裏前に文永8年銘(1271)と文永7年(1270)、破損の激しい文永8年(1271)の銘の三基の板碑があり、昭和51年(1976)4月1日、鬼石町（現藤岡市）の重要な文化財の指定を受けている。

本堂は切妻屋根の瓦葺で、切妻の向拝を持つ。正面5間(12.29m)、側面5間(11.45m)で、長押等は無く肘木も無い。向拝は本堂との間に繋ぎ虹梁とし、正面は若葉の彫られた水引虹梁、幕股などが設置されている。平面は6間取で正面に板張の縁とその奥に12畳の外陣、さらに内陣と続き、両側には10畳の脇の間がある。内陣の奥には後補の位牌堂が設置されている。

本堂の建造年代を示す資料は見当たらなかったが、内部虹梁の彫が蔓若葉であることなどから、19世紀中期の頃に建てられたとみる。

（羽鳥 悟）



写66-1 全景



写66-2 向拝虹梁



写66-3 内陣



写66-4 内陣虹梁

70 隨應寺（すいおうじ）

本堂、山門

寺院名	緑林山金剛院隨應寺	所在地	富岡市妙義町諸戸 147
宗派	天台宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	[本堂]正面13.93m、側面12.26m、切妻造鉄板葺 [山門]3間1戸四脚門、側面2間(楼門)		
建造年代 (根拠)	[本堂]18世紀末期～19世紀初期／建築様式 [山門]18世紀末期～19世紀初期／建築様式	工 匠	[本堂]不明 [山門]不明

慶安元年(1648)2月の創建である。寺伝では開山第一世 重賢法印元禄2年(1689)6月20日寂 第二世 重栄法印亨保8年(1723)11月10日寂となつてゐる。過去帳によれば開山は慶安2年(1649)10月創立とあり、寛政10年(1798)頃落雷により全て焼失した。現在の本堂はその後、建立と推察する。材料は来迎柱、内陣外陣境柱の4本が檼、他内陣柱が檜、他柱は杉であり、向拝の造りは簡素である。一方、外陣には極彩色の彫刻欄間が嵌め込まれている。平面は1間向拝、廊下を備えた6間取りで内外陣右室(礼拝所、脇陣)には2階が有り柱、梁は燻されている。

山門(楼門)は「妙義町誌」に明和2年(1765)建立とあるが、木鼻や虹梁の唐草絵様から江戸末期と推定する。素木ながら檼を使用し、立派な造りである。石垣は妙義神社と同じ石工に依る(住職聞き取り)。扶桑台宗本末記には妙義石塔寺末とある。明治以降は延暦寺を本寺とし、安楽心院一品公延親王(213代天台座主)の位牌が祀られている。大正5年(1916)に大牛の地蔵院、行沢の東光寺を昭和26年(1951)に下仁田町福泉寺を合併した。

(久保田和人)

【参考文献】

『妙義町誌(下)』妙義町 平成5年



写70-1 本堂全景



写70-2 外陣・内陣



写70-3 山門全景



写70-4 山門/須弥壇・厨子

71 龍昌寺（りゅうしょうじ）

本堂

寺院名	緑谷山郭峯院龍昌寺	所在地	安中市安中2-7-19
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如来(釈迦牟尼佛)
構造・形式	正面14.36m、側面12.43m、入母屋造銅板葺、1間向拝付き		
建造年代 (根拠)	19世紀前期／建築 様式	工 匠	信州松代森丹田後守他

龍昌寺縁起によると元和2年(1616)安中藩主井伊直勝に頼んで、古屋村の角峯院と下野尻村の小瀧山阿弥陀寺から寺号を貰い、長野信濃守三男として生まれた、長源寺十七世名國宗覺大和尚(1572～1650)を迎えて開山した。寺は創建以来火災に遭わなかつたが、明治初年魔仏棄秉により山門と本堂を除きて解体され、以来80年の間無住又は兼任の寺であった。本堂は元和2年(1616)2月15日棟上とされてゐるが、向拝の唐草絵様や彫刻の年代から19世紀前期と推定する。山門から本堂までの参道両脇には108の鐘(昭和51年完成)を備える。平面は1間向拝、廊下を備えた6間取りで、内陣に極彩色を施した十六羅漢と獅子、十六羅漢と龍等の彫刻欄間や彫刻支輪が嵌められ、本寺院の見所となっている。彫刻の裏面には彫物師並當国勢田郡花輪住、彩色共 高瀬繁八 文化四丁卯十二月日 新造 當寺現住祖柏叟代と墨書きがあり、花輪の彫物師の仕事であることが分かる。又、外陣の格天井に四季折々の草木・花・鳥・馬等が描かれた彩色画の板が嵌めこまれている。向拝の格天井にも同じような彩色画が残されており、興味深い。

(久保田和人)

【参考文献】

『安中市史』安中市 平成12年



写71-1 全景



写71-2 外陣・内陣



写71-3 外陣天井絵彫刻支輪



写71-4 外陣欄間彫刻

77 (松井田)金剛寺 ((まついだ)こんごうじ)

本堂

寺院名	延光院金剛寺	所在地	安中市松井田町新堀1058
宗派	真言宗豊山派	主本尊	十一面觀音菩薩
構造・形式	正面8間、側面6間(実測：正面15.8m、側面11.85m)、向拝1間／單層、寄棟造平入、銅板葺		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式	工匠	不明

開基は長元年間(1028～1037)……その後再建、慶安元年(1648)7月17日に幕府から朱印地高三石三斗余を賜りその後高台に移動し、享和3年(1803)11月に本堂、庫裡、山門を再建した(『群馬県史料集・金剛寺略縁起』より)。本寺は、たびたびの火災により高台に移動し現在の位置に移ったのである。現存の建築物のうち、本堂(間口8間半・奥行6間半)、庫裡、山門は縁起にあるように享和3年(1803)11月に、薬師堂と土蔵は文化元年(1804)10月に、仁王門は寛保年間に再建されたものであり、このうち仁王門は昭和41年(1966)に現在の位置南側から移動した。また寺伝の宝物とした弘法大師御真筆と称する「愛染明王彩色画」と碓冰貞光が退治した蛇骨が遺されている。大正12年(1923)刊の『碓冰郡志』の伝説の項がある。本堂の建立時期は唐草が太く中央迄伸びている、眉三重、彫刻が素木で(大柄で派手)等から19世紀中期と推定する。内陣の来迎柱が改造されている。さらに基礎部分をみると近年に修復した形跡がある。

(三好建正)



写77-1 全景



写77-2 外陣・内陣



写77-3 外陣欄間彫刻



写77-4 内陣欄間彫刻

79 泉龍寺 (せんりゅうじ)

本堂

寺院名	天岩山泉龍寺	所在地	多野郡上野村乙父字田平927
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如來
構造・形式	正面5間(13.20m)、側面5間(11.36m)、入母屋造鉄板葺(当初茅葺)、向拝無し		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式 式	工匠	不明

安土桃山時代初期の天正3年(1575)亥年僧惠翁が釈迦の像を安置して開山。その後慶長3年(1598)僧善知坊が中興する。この時泉龍寺の号を附称する。

乙父地区は上野村の中程に南北に細長く位置する。泉龍寺は国道299号線から北に折れ、神流川に沿って西に隧道を進むと山懐の小さな集落東端に庚申塔や古びた石段が見えて来る。

本堂は水害での移動や火災にあったとの言い伝えがあり、江戸末期の建物としては装飾の少ないつくりである。

しかしながら、堂内の内陣外陣間境にある虹梁には左右の唐草が一体化した波模様や、両脇にある一対の鶴の彫刻、素木の彫刻板支輪、禪宗様の須弥壇等が江戸末期の建築様式を残している。間取りは前面に土間ではなく広縁と2列6室形式になっている。

本堂が所蔵する600巻にのぼる『墨書き大般若経』の経巻は県下でもまれにみる貴重な経巻として、県の重要文化財に指定されている。あるとき火災により百余巻を焼失したが、住人が順主となり天和元年(1681)から同3年までに補写し、奉納したと『上野村誌』に記載されている。

また入口に建つ庚申塔は表面に百庚申と刻まれ、總高265cm、幅52cmで形も珍しい。建立は文久元年(1861)と記され、村指定重要文化財である。

(松井良一)

【参考文献】

- 『上野村の文化財・芸能・伝説』上野村教育委員会 平成13年
- 『上野村誌』上野村 平成10年
- 『上野国寺院明細帳3』群馬県文化事業振興会 平成7年



写79-1 正面



写79-2 側面



写79-3 内部欄間彫刻



写79-4 庚申塔

83 常住寺（じょうじゅうじ）

本堂

寺院名	五大山普門院常住寺	所在地	甘樂郡下仁田町大字下仁田631
宗派	天台宗	主本尊	枳迦如来
構造・形式	正面6間(13.85m)、側面12間(21.60m)、入母屋造銅板葺、妻入、向拝1間唐破風付(背面の土蔵造は切妻造瓦葺)		
建造年代	19世紀前期／建築 (根拠) 様式	工匠	不明

下仁田町で国道254号線を西に向かい、上信電鉄線の踏切を渡ると、すぐ右手に天台宗常住寺の標柱が見える。寺の坂を登り境内南東に位置する山門をくぐると、左に十三仏像が並び、右手正面に本堂がある。元弘4年(1334)畠山重忠の孫の重快により創建されたと伝えられる。

現在の本堂は、江戸中期享保3年(1718)に再建されたといわれているが、墓殿、唐草模様から見て妥当と思われる。当初の屋根の仕上は不明であるが、40年位前にトタン葺きから銅板葺きへ葺替えたという。本堂は正面6間側面12間1間向拝唐破風付(背面の土蔵は切妻瓦葺)。内部は手前から、縁、外陣、内陣となる。火災除けのため、本尊は土蔵造りの蔵の中に納められている。組子化粧欄間に多数見られ、内陣外陣共に天井は格天井である。土蔵の内陣の天井には菊花紋章が描かれており、その手前には植物が描かれている。須弥壇は漆塗りで、飾金物等が付き絢爛豪華なものである。彫刻はほとんど見られず、塗装も見られない。

境内には、群馬県指定史跡(昭和38年1月)の漢学者高橋道齊の墓がある。

(久保喜由)



写83-1 外観：正面



写83-2 外観：背面



写83-3 外観：向拝



写83-4 須弥壇

87 安養寺（あんようじ）

本堂

寺院名	東越山普光院安養寺	所在地	甘樂郡南牧村大字大日向甲278
宗派	天台宗	主本尊	阿弥陀如来、正觀音、大日尊
構造・形式	正面8間、側面6間、入母屋造、平入、向拝1間唐破風屋根、銅板葺(当初茅葺)		
建造年代	18世紀中期／建築 (根拠) 様式	工匠	不明

南牧村中央の東寄り、南牧川の北に位置し東は住宅地、南は道路に接し、北・西面を墓地とする。

明応8年(1499)創立。開山は重照上人。寛保2年(1742)現在地に移転、宝暦7年(1757)8月頃に竣工と伝える。

本堂は正面8間、側面6間、入母屋造、平入、向拝1間唐破風屋根、銅板葺。向拝は左端、庫裏との境に付く。内部は6間取り、手前から、縁、外陣一室、内陣、内陣左右に和室となる。内陣には須弥壇を置き、奥には位牌堂を配置する。

軸部は、切目長押、内法長押、差鴨居、頭貫で固めている。組物は、平三斗、拳鼻付出三斗、大斗肘木とし、中備は幕股、撥束とする。柱間装置は、ガラス格子戸、火灯窓、漆喰塗壁とする。軒は二軒疎垂木で、妻飾は猪目懸魚、木連格子を飾る。彫刻は内部欄間に龍、雲、波、天女、麒麟、扇が彫られており、本寺院の見所となっている。裏面に「明和四亥十二月」と記されたものが、内外陣境にある。

唐草の渦と若葉や撥束を使用していることから、18世紀中期建造と推定する。

(齊藤朋行)



写87-1 全景



写87-2 内陣



写87-3 欄間彫刻



写87-4 欄間彫刻裏

88 大雄寺（だいおうじ）

本堂、山門

寺院名	光明山養寿院大雄寺	所在地	甘樂郡南牧村大字六車字瀬戸山甲1500
宗派	天台宗	主本尊	釈迦如来(胎内仏)
構造・形式	[本堂]正面8間、側面6間、寄棟造、向拝1間、 銅板葺[当初不明] [山門]1間1戸四脚門、切妻 造、瓦葺		
建造年代 (根拠)	[本堂]18世紀中期 /建築様式 [山門]18世紀以前 /建築様式	工 匠	[本堂]不明 [山門]不明

南牧村の中央、南牧川の北の高台に位置する。境内に位置する山門をくぐると、左手に本堂、右手に住戸、その奥に歯科医院と続く。

旧本堂は慶長7年(1602)に焼失し、本堂は元和2年(1616)に再建。初め上底瀬地区に建立され、下底瀬地区の尾崎地内に移動建立。その後現在の景勝の地を選んで建立されたと旧記にある。

本堂は正面8間、側面6間、寄棟造、向拝1間、銅板葺とする。内部は6間取り、手前から、縁、外陣、外陣左右に和室、内陣、内陣左に和室、右に床の間付の和室となる。内陣には須弥壇を置き、奥に位牌堂を配置する。欄間に多次彫刻が施され、内外陣正面の欄間彫刻と浮彫の文輪のみ彩色が施されている。内陣の天井には菊花紋章、外陣には動植物や人物が描かれている。

向拝柱・向拝柱と対にある身舎柱にはホゾ穴があり、かつては欄干の様な物があったと推測する。向拝部分の組物や若葉の彫り方などから、身舎とは同年代ではなく江戸末期と推定する。

山門は1間1戸四脚門、切妻造、瓦葺。年代指標に欠くが、舟肘木の様式などから18世紀以前に遡ると思定する。

(齊藤朋行)



写88-1 全景



写88-2 向拝



写88-3 欄間・支輪彫刻



写88-4 山門

90 宝勝寺（ほうしょうじ）

山門、太子堂

寺院名	歡喜山宝勝寺	所在地	甘樂郡甘楽町大字金井375
宗派	真言宗豊山派	主本尊	大日如来
構造・形式	[山門]四脚門、切妻瓦葺 [太子堂]正面3間、側面3間、方形屋根瓦葺、向拝1間付		
建造年代 (根拠)	[山門]19世紀中期 /建築様式 [太子堂]19世紀中期 /建築様式	工 匠	不明

当地は国道254号線を富岡方面に向かい、甘樂町金井の信号を過ぎて歩道橋下を右折し、200m程にある。正面に瓦葺きの山門があり、そこを潜ると、左手に手水舎、太子堂（地蔵堂）、正面に本堂、右に庫裏が並ぶ。

寺歴によると弘長年間(1261～1264)紀藤權守沙弥入西の草創と伝える。永祿の頃(1558～1570)小幡氏の武門祈願所となり、以来奥平氏、織田氏、松平氏と続いて、祈願所としてその帰依は深かったといわれる。それらが記載された「宝勝寺起立文書」宝勝寺蔵は昭和38年(1963)4月、甘樂町指定重要文化財に指定されている。

本堂は平成15年(2003)に建て替えられて、正面7間半、側面6間半、銅板葺の入母屋屋根で流向拝が付く。

山門は四脚門で、切妻屋根、瓦葺。虹梁に彫刻は無いが、棟股の形状などから、19世紀中期の建造とみる。

太子堂は、正面3間、側面3間、向拝1間付、方形瓦葺で二軒繁垂木である。水引虹梁の花の浮彫から、江戸末期19世紀中期の建造とみる。

(羽鳥 悟)



写90-1 全景



写90-2 山門



写90-3 太子堂(地蔵堂)



写90-4 太子堂 向拝 虹梁

91 宝泉寺（ほうせんじ）

本堂

寺院名	龍洞山宝泉寺	所在地	甘楽郡甘楽町大字小幡甲349
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼佛
構造・形式	正面8間、側面6間、入母屋造、平入、向拝1間、瓦葺		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

当地は小幡市街地から北に向かい、参道を西へ200m程入ったところにある。正面に瓦葺の山門があり、そこを潜ると、正面に本堂と左に庫裏がある。本堂は正面8間、側面6間、瓦葺の入母屋屋根で唐破風の向拝が付く。

宝泉寺は元和元年(1615)11月28日小幡信秀公を開祖し伝州忠の禅師(甘楽町内の向陽寺四世)により開山とされる。また、別に宝積寺13世「慶巖守才」が、その晩年、元和3年(1617)以降に松慶寺を建てて隠居したといわれる。当寺の参道脇には3体の石仏があり、2体が薬師如来像、1体は地蔵菩薩像であり、その特徴からそれぞれ南北朝から室町の形態を有しているため、宝泉寺の建立はそれ以前の天正から元和との説もある。

本堂の間取りは6間取で、正面板張りの縁を過ぎ、外陣、内陣と続く。左右両脇に脇の間を持つ。建造年代は不明であるが、須弥壇裏に元文元年(1736)9月の墨書き、同じく高卓下の板に明和2年(1765)の墨書きがあり、また本堂内の室に欄間が無く壁であること、幕股、虹梁に彫られている唐草絵様の形状が、比較的簡素な形状を示すことなどから、18世紀中期の建築の可能性が高い。

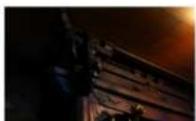
(羽鳥 悟)



写91-1 全景



写91-2 外陣・内陣



写91-3 内陣 組物彫刻



写91-4 板戸絵

96 正円寺（しょうえんじ）

本堂、馬鳴堂

寺院名	龍藏山大智院正円寺	所在地	沼田市奈良町681
宗派	浄土宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	[本堂]正面14.8m、側面12.7m、寄棟造瓦型鋼板葺(当初茅葺) [馬鳴堂]正面3.9m、側面4.3m、方形屋根鋼板横葺(当初茅葺)		
建造年代（根拠）	[本堂]延享2年(1745)／棟札 [馬鳴堂]江戸時代末期～明治初期／建築様式	工匠	[本堂]不明 [馬鳴堂]不明

沼田市北東部、薄根川と発知川に挟まれた、侵食された台地の上に、本堂を南向き、馬鳴堂を東向きに置かれている。「池田村誌」によると寛永年間(1624～1644)に正覚寺(沼田市鍛冶町)の末寺として開山、元禄16年(1703)焼失、享保18年(1733)再興とある。群馬絹遺産として馬鳴菩薩と馬鳴堂が登録されている。

本堂は基壇一段の上に漆喰塗で、正面は開口部上に貫が2段入っている。軒はせがい造出梁でさらに1軒出ているが、1軒の部分は後世の物と思われる。内部は外陣内陣境の柱と来迎柱計4本を丸柱とし他は角柱である。丸柱上部には出三斗を置き虹梁・幕股・欄間彫刻がある。欄間彫刻には寛政4年(1792)群馬郡塙田磐七との記載がある。

馬鳴堂は改修されており、当初は漆喰塗壁・茅葺である。角柱の上には舟肘木を置き、桁を支える。軒は四方せがい造で1軒出ている。内部は、厨子の中に馬鳴菩薩が安置され、来迎柱4本を丸柱とし上部一手先で格天井を支え、段違いで3本の虹梁が渡され長押・支輪がある。格天井鏡板には大正5年(1916)の記載があり、動植物の絵が描かれている。

(櫻澤 齊)



写96-1 本堂全景



写96-2 本堂内部



写96-3 馬鳴堂全景



写96-4 馬鳴堂内部

98 雲谷寺（うんこくじ）

本堂

寺院名	武尊山雲谷寺	所在地	沼田市白沢町高平戸戸ノ敷1482
宗派	曹洞宗	主本尊	延命地蔵菩薩
構造・形式	正面17.4m、側面15.6m、寄棟瓦葺		
建造年代（根拠）	18世紀中期／建築様式	工匠	不明

雲谷寺は沼田市東部旧白沢村高平宿うつぶしの森（白佐波神社境内）北方500mの戸戸ノ敷地区に、位置する。周囲を田園に囲まれた境内は、緑に包まれている。南側道路から参道をたどり山門を抜けると、正面に本堂右手に庫裏がある。

雲谷寺は、鎌倉時代元徳2年(1330)天印保宥大和尚によって開山されたといわれている。創建は、開基の石塔の切符の年号が、元徳2年(1330)と、書かれていたので、それ以前であると考えられる。

本堂の中に入ると6間取りで彫刻が水引虹梁、海老虹梁、木鼻、欄間に施されている。欄間の彫刻は透かし彫りで、虹梁の渦と若葉が簡素である。内部の欄間と下がり壁の特徴から、18世紀中期と推定する。

(三代一佳)



写98-1 全景



写98-2 外陣・内陣



写98-3 外陣欄間彫刻



写98-4 内陣欄間彫刻

101 音昌寺（おんしょうじ）

本堂

寺院名	光福山音昌寺	所在地	利根郡片品村越本1267
宗派	曹洞宗	主本尊	虚空藏菩薩
構造・形式	正面10間(19.6m)、側面8間(15.8m)、入母屋造銅板葺(当初は茅葺)		
建造年代（根拠）	天明3年(1783)／棟札	工匠	[大棟梁]松岡忠藏増浮

元迦葉山弥勒寺の末派が、元弘年中(1331～1334)本村の旧名土出下村と言われたころ、字最空寺に創立。初祖は天台派である。後に本村字大円に移し腰元山恩正寺と改めた。源姓無庵茂参禪師が慶長元年(1596)に中興、現在の位置(大字越本)に建立して曹洞宗となり善光山音正寺と改めたとされる(「片品村史」、「利根郡史」)。

参道に古い石造物を配し、寺の下手の音昌寺別院観音は「りょうかん様のお堂」と呼ばれ、沼田横道第三十二番札所となっている。

正面10間、側面8間、入母屋造銅板葺の本堂は天明元年(1781)に焼失後、棟札により天明3年(1783)11月に建造されたことが分かる。内部は6間取りの前面に海老虹梁にて疊敷の廊下がつながる形式となっている。平成元年に指定された村指定重要文化財である彫刻欄間は透彫となっており、中国の逸話を題材とした逸材で、表裏別の図柄があり、彩色、彫りの技巧とも素晴らしい、本寺院の見どころとなっている。その他、釈迦、観音に関する物語の額絵が多数保存、掲示してある。屋根、外部壁、基礎以外の軸組はほぼ創建当時のものと推定される。

(石坂孝司)



写101-1 全景



写101-2 外陣



写101-3 外陣欄間彫刻



写101-4 外陣廊下繡虹梁

104 清岸院〔せいがんいん〕

虚空藏堂、大黒天堂

寺院名	能満山清岸院	所在地	利根郡川場村立岩 464
宗派	曹洞宗	主本尊	虚空藏大菩薩
構造・形式	[虚空藏堂]正面3間(7.52m)、側面3間(6.92m)、方形造鉄板葺(当初茅葺) [大黒天堂]3.82m、3.80m、方形造鉄板葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	[虚空藏堂]18世紀中期／建築様式 [大黒天堂]19世紀初期／建築様式	工 匠	[虚空藏堂]不明 [大黒天堂]不明

永平安時代初期の天長4年(827)の創始。永祿3年(1560)建立、江戸初期の承応2年(1653)真田内記信政の家臣鎌倉重繼の発願により沼田城の鬼門除けとして改築。堂は、沼田市舒林寺和尚により永祿3年(1560)開山したとする曹洞宗清岸院所有で、虚空藏山の麓の寺院から真っすぐに伸びた48段の石段を登った先に鎮座する。南に赤城山、北に武尊山を望む山頂の境内には、虚空藏堂の他に大黒天が安置される小堂が建ち、いわれある小さな池と背後に岩山がある。

虚空藏堂は自然石に丸柱を据え、方形造屋根に唐破風付、四方に擬宝珠高欄付の縁が廻る。向拝は角柱に木鼻、籠彫りの手挾、正面中央には銅鑼を吊るし、海老虹梁は若葉と渦の彫刻。身舎外部は植物や波の彫刻支輪及び蔓股が廻る。内部は出組(拳鼻実肘木付)、彫刻蔓股には羽を付け笛を吹く童子の彫刻が目を引く。外陣格子天井の絵画は明治期の作。内部は内陣外陣と区切られ、内陣に須弥壇、厨子が置かれている。建造年代は虹梁の巻きなどから18世紀中期から後半の建物と推測。大黒天堂は、正面側面2間の方形で、内部に大黒天像が置かれ、虹梁・頭貫・組物は幾何学的な地紋彫が施されており、様式から推定し19世紀初期の建物と考える。

(関 美和子)



写104-1 虚空藏堂(全景) 写104-2 虚空藏堂(内部)



写104-3 虚空藏堂(内部蔓股) 写104-4 大黒天堂(内部組物)

106 清雲寺〔せいうんじ〕

山門

寺院名	赤城山清雲寺	所在地	利根郡昭和村糸井 1261
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如来
構造・形式	入母屋造1間1戸、瓦棒葺・楼門(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	江戸時代中期／建 (根拠) 築経式	工 匠	匠 不明

県道251号線沿い昭和村東小学校南側に位置し、竹林を背負って本堂は南西向き、山門は90度向きを変えて北西向きに建てられている。創立年は不明である。「糸之瀬村史」によると戦国時代に現在とは別の場所に天台宗のお寺として創建され弘治年間に現在の地に移され、天保年間に山門を残して寺は全焼、その後本堂・庫裡の順に再建された。群馬県に6基しかないと言われる禁芸碑が入口に建っている。

北西道路より入ると朱塗りの山門(楼門)があり、通り抜けると参道は左に90度折れる。正面に本堂、右に庫裏、その手前に鐘楼、左に衆寮がある。

山門は楼門形式の造りで、正面1間1戸、入母屋造瓦棒葺(当初茅葺)である。基壇1段は石乱張り、礎石の上に8角柱を建て、幅広の貫で足元を固めて、上部に一手先実肘木付きを載せて、擬宝珠高欄のある回縁を支える。2階部分は火灯窓を3面に配し、正面右側に入り口がある、仏像もその方向に合わせて南西向きに安置されている。柱は丸柱で上部を二手先で屋根を支え、地長押・内法長押・頭貫・蔓股・支輪が配されている。軒は二軒吹寄せ垂木で、妻飾りは猪目懸魚と格子組がある。

本柱上部蔓股に龍と蓮、木鼻に唐草文様の彫刻がある。

(櫻澤 齊)



写106-1 全景

写106-2 楼部分正面



写106-3 屋根部分組物

写106-4 線部分組み物

112 上の観音堂【かみのかんのんどう】

本堂

寺院名	上の観音堂(赤岩 觀音堂)	所在地	吾妻郡中之条町赤岩字般敷谷戸乙 237
宗派	曹洞宗龍澤寺持	主本尊	聖觀世音、藥師如來、不動明王
構造・形式	正面3.67m、側面3.70m、寄棟造茅葺		
建造年代 (根拠)	18世紀後半/建築 様式	工匠	不明

重要伝統的建造物群保存地区・中之条町赤岩地区に位置する。「上」は赤岩地区内の区分を示し、地区的最北部に位置する。三原郷三十四観音札所の第二十六番札所となる。

一辺3.7m角の小さな堂で、せがい梁に茅葺方形屋根を載せる簡素な外観である。堂内は正面に須弥壇を備え仏が安置されている。来迎柱に虹梁を架け、台輪・出組とされ、中備に蔓股が置かれる。内部の板羽目には絵画が残され、二十四孝等の画題が確認できる。外部正面には扁額が掲げられ、表面に円通堂、裏面に宝曆甲申仲春と彫られている。須弥壇上の組物・虹梁・蔓股の様式と考え合わせ、宝曆14年(1764)頃の建造と思われる。内部には寛延年代の祈祿札や明和年代の句額等、本建築の歴史を知る史料が残されている。

赤岩にある唯一の茅葺建造物で地区内最古とされる。平成12年(2000)の屋根替は、地区的茅刈作業と多くの寄附で行われた。観音堂前の権の木も重伝建群保存地区を構成する樹木に指定され、背面の高間山系で構成される美しい景観は赤岩地区を代表する歴史的風致を形成している。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)



写112-1 全景



写112-2 正面



写112-3 内部須弥壇



写112-4 円通堂扁額 裏に宝曆
甲申仲春(十四年・1764)

114 雲林寺【うんりんじ】

本堂

寺院名	大洞山雲林寺	所在地	吾妻郡長野原町長野原73
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如來
構造・形式	正面21.2m、側面15.7m、入母屋造平入剥板瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	19世紀前期/建築 様式	工匠	[彫師]原田定慶

鎌倉時代中期の弘長3年(1263)に臨済宗妙心寺派の龍幡和尚が創建。その後室町時代末期永禄2年(1559)に羽根尾城主一族の海野幸光が開基し、後閑(現 安中市)長源寺(曹洞宗)の末寺として再建された。長野原町の旧中心地、国道145号線に面す山腹に位置する寺院である。

本堂は天明3年(1783)の浅間押しで被災したが、その20余年後に再建されたとされる。入母屋造平入の堂宇は、漆喰を塗りて柱上を平三斗・舟肘木とした質素な外観を呈すが、前面土間8間取りの内部には、外陣正面に櫛素木の精巧且つ肉厚の透かし彫り欄間、内陣に極彩色を施した彫刻欄間が嵌められ、本寺院の見所となっている。彫刻の裏面には天保2、3年(1831、1832)の年号と18世住職雲松並びに大仏師原田定慶の名が刻まれている。彫師の系譜は不明であるが、同じく同時期再建の応桑(同町内)常林寺にも同名が残され興味深い。また外内陣天井は四季折々の草木・花・鳥が描かれた彩色画で埋め尽くされている。本堂の南には文政7年(1824)再建(町誌)の作道観音堂が移築されている。境内裏手には町内で数少ない浅間押しを施された瑠璃光薬師堂が残されている。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)



写114-1 全景



写114-2 外陣・内陣



写114-3 外陣欄間彫刻



写114-3 内陣欄間彫刻

117 無量院〔むりょういん〕

観音堂

寺院名	吾妻山無量院	所在地	吾妻郡嬬恋村大字大笠456
宗派	曹洞宗	主本尊	觀世音(観音堂)
構造・形式	土蔵造、正面2.7m、側面2.7m、瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	江戸後期／建築様式	工匠	不明

須坂と上州を結ぶ大坂街道の要衝大坂宿に置かれた嬬恋村唯一の寺院である。弘治3年(1557)一乘院阿闍梨が創建し元真言宗に属した。元禄11年常林寺九世寶山和尚良歩(補)が再興して曹洞宗となる。本堂は文久3年(1863)火災後再興、昭和34年(1959)新築で虹梁等に古材を流用した。庫裏は昭和45年(1970)1月焼失し、4月に再建も文書類を失っている。

観音堂は7尺四方の土蔵造である。外壁を漆喰塗と腰板張とし、一本引戸を付け、屋根はせがい梁で軒を張出し瓦葺(当初茅葺)の方形屋根を載せる。内部は正面に須弥壇を備え宮殿を置き、虹梁・支輪・飾り板を取付けている。壁は漆喰塗、天井には色鮮やかな花木・鳥獣の絵が描かれている。宮殿は禪宗様の細密な作りがなされ、全面に金泥、極彩色、金襴巻が施された華やかなものである。「嬬恋村誌」に元禄年間(1688~1704)に赤羽根(現三原)に存した正観音2体の内1体を大坂に献上したとあり、進上・安置に際し宮殿が造立されたとも推測され、技法・彩色からも江戸中期の特徴がうかがえる。無量院は天明の浅間押しを逃れたため、境内に石碑・供養塔等を多数残す。毎月地域の人人が和讚・念仏をあげる行事が今も続いている。

(岡田敦志、小池志津子、長井淳一)



写117-1 境内



写117-2 観音堂全貌



写117-3 観音堂内部



写117-4 剔子見上

119 雙松寺〔そうしょうじ〕

本堂

寺院名	中峰山雙松寺	所在地	吾妻郡高山村大字中山甲588
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如来
構造・形式	正面20.08m、側面163.24m、寄棟造、銅板平葺(当初藁葺)		
建造年代 (根拠)	18世紀中期／唐草絵様	工匠	[大工]師田村(現みなかみ町)跡次兵衛

高山村の中央、国道145号線中山交差点を東へ600m、北側山沿いに建つ寺院である。境内は、西に村重文の一軒経全6930巻を納める天満宮、南に宝曆13年(1763)の寄進札を持つ山門が建つ。創立は、村内字宿浦に天文2年(1533)一堂宇を設立。天文9年(1540)に白郷井(現渋川市)の雙林寺(曹洞宗)より、初代庵主密応秀伝長老を招き、末寺として開山する。後に字古寺へ移り、正保2年(1645)現在地に移転する。近門七ヶ寺として、雙林寺との繋りが深い。

本堂は前建物が、寛保2年(1742)8月の台風により大破され、宝曆元年(1751)に築造と伝わる。勾配の強い寄棟造の堂宇は、角柱、漆喰塗壁、桁に正側面に大斗肘木・北面に舟肘木を置く。正面はせがい造であり、藁葺の遺構を残し、古寺の外観を呈す。前面板の間(旧土間)9.5間の内部には、外陣正面両脇と両脇陣正面に簾欄間を配す。作者不明ながら、内陣正面両脇に龍と鯉乘仙人の片面透彫欄間、両脇陣境に龜と犀の透彫欄間が嵌められる。須弥壇正面獅子彫刻は珍しい形である。内陣正面柱は二手先、来迎柱は出三斗の組物が置かれる。外陣の簾板張格天井は中央部分が折上となる。本堂は虹梁の唐草絵様から、18世紀中期の建物である。

(貝磯博子)



写119-1 全景



写119-2 外陣・内陣



写119-3 内陣欄間彫刻



写119-4 外陣天井

120 法信寺〔ほうしんじ〕

本堂

寺院名	界中山法信寺	所在地	吾妻郡高山村大字中山585
宗派	浄土宗	主本尊	阿弥陀三尊
構造・形式	正面12.74m、側面11.50m、入母屋造、向拝1間軒唐破風付、銅板平葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	明治27年(1894)/ 〔根拠〕 棟札	工 匠	〔大工〕棟梁 富沢 儀八

高山村の中央、中山交差点の東北東に位置する淨土宗鎮西派の寺院である。創立は、中山城跡で戦死した城主の冥福を祈った家臣、奈良泰窓の子 奈良左近が、天正17年(1589)本山知恩院の真念和尚を請じて開山する。当地には万治2年(1659)移転する。

本堂は前建物が、嘉永5年(1852)の火災により、元禄2年(1689)作と伝わる本尊を残し、全建物焼失する。庫裏の再建後、明治24年(1891)名久田村横尾(現中之条町)にあった無量寺本堂を買取り、移転再建を始めた記録書類と明治27年(1894)12月24日上棟の棟札がある。入母屋造の堂宇は、漆喰塗壁で柱上を大斗肘木、向拝は柱上に拳鼻付連三斗、象型木鼻、二重虹梁間は大斗東に板裏股を張り、蝦紅梁と2組の板手挟を配する。唐破風の渦巻彫刻丸の毛通など無量寺の外観を残す。内部は、内陣正面虹梁上に16人の羅漢と龍虎の極彩色片面透彫欄間、両脇柱上二手先を置き、彫刻支輪(鶴)を嵌る。外陣天井は再建時に新葬され、「青山林宗昭拝写」墨書銘の花鳥画の格天井である。彫刻と共に本寺院の特徴である。来迎柱上は平三斗、内陣天井は鏡板張格天井である。元無量寺は廃寺の為、建造年を確認出来ないが、向隣の唐草絵様などより、19世紀初期の築造と推定される。

(岩崎謙治、貝殻博子)



写120-1 正面



写120-2 向拝海老向歛、手挟



写120-3 来迎柱組物



写120-4 外陣彫刻、天井

123 頤徳寺〔けんとくじ〕

本堂・觀音堂・北辰堂

寺院名	御教山妙音院顕徳寺	所在地	吾妻郡東吾妻町原町432
宗派	真言宗御室派	主本尊	胎藏界大日如來
構造・形式	[本堂]正面(6.55m)、側面(11.35m)、入母屋造銅板葺、向拝付 [觀音堂]正面3間(5.70m)、側面3間(6.88m)、入母屋造銅板葺、向拝付 [北辰堂]正面(3.98m)、側面(3.98m)、土藏造切妻屋根瓦葺		
建造年代 (根拠)	[本堂]明治17年 (1884)移築/寺院 明細帳 [觀音堂]嘉永5年 (1852)移築/棟札 [北辰堂]文政7年 (1824)/寺院明細帳	工 匠	[觀音堂][大工]棟梁 四万村 田村若狭、藤原喜之 原町 安原嘉兵衛 脇棟梁 四萬村 田村輝之進 [土方] 棟梁 在組 真下武右衛門

真田氏郡代出浦対島守の菩提寺の淨土宗専念寺が元和2年(1616)に開山されたが後に衰退し、寛文元年(1661)有範法印が郡代屋敷を拝領して真言宗顕徳寺として中興開山した。原町下之町の中心部に位置し、参道に入ると左手に北辰堂、山門を潜ると正面に本堂、左手に觀音堂が配されている。

本堂は明治17年(1884)に郷原潛龍院の護摩堂を移築して再建した。内外陣と向拝の小規模な間取りである。組物は大斗肘木と出組で向拝が平三斗、中備は向拝の本蘗のみで簡素な設えである。觀音堂は、嘉永5年(1852)に山田村の町田家阿弥陀堂(宝暦10年(1760)上棟)を譲り受けて移築しており、再建の棟札が存在する。内外陣境格子戸の上の欄間彫刻は鳳凰と麒麟の透かし彫りで、江戸神田の水守七五郎光長のものとされている。北辰堂は文政7年(1824)の建立で、土藏造り切妻置き屋根である。北辰妙見菩薩を安置している。

(宮田賢二)



写123-1 全景



写123-2 本堂正面



写123-3 觀音堂正面



写123-4 北辰堂正面

127 祥雲寺〔しょううんじ〕

本堂・山門・鐘樓

寺院名	瑞龍山祥雲寺	所在地	桐生市境野町6-甲268
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼仏
構造・形式	[本堂] 寄棟流造銅板平葺(当初茅葺)向拝付 [山門] 1間1戸四脚門		
建造年代(根拠)	[本堂] 18世紀後期 /建築様式(高橋工 家文書では1789年)	[山門]	[工匠] 市川兵部政 明

桐生市境野町7丁目県道桐生足利線の北250mに位置する。東から山門を潜り参道を直進、鐘楼の先が本堂正面である。本堂右に庫裡会館が建つ。参道の両側に右側三界万靈塔、六地蔵、光明真言塔、如意輪觀音等、左側には地蔵菩薩、聖觀音菩薩等が置かれる。境内はよく整備され明るく気持ちが良い。当寺は由良成繁家臣、高橋丹波守橋英元を開基、大雄院第2世牛室香麿大和尚を開山とし、英元の孫である風山大春和尚が正保2年(1645)この地を寺とした。天明8年(1788)山門を残し全伽藍が焼失したが寛政元年(1789)現本堂を再建したとされる。本堂は方丈形式六室構成 正面7間(15.98m)、側面7間(13.16m)、向拝1間入母屋造銅板葺平入(正面三軒疎垂木)、屋根は茅葺から～瓦葺(1908)～銅板葺(2012)に葺替、来迎柱丸柱、他角柱、床内陣以外疊敷、外部舟肘木、来迎柱上部出組、内外陣境出組、外陣縁境出組、禪宗様須弥壇、内外陣境欄間彫刻(花と波浮彫)、水引虹梁・虹梁・奉鼻(絵様)とする。山門は安永8年(1779)頃建立とされ當寺では最も古い、1間1戸四脚門(六脚門)切妻造瓦葺、柱は本柱(九柱)控柱(八角柱)、各所彫刻あり。鐘楼は本堂と同時期に建立され、1間1戸宝形造瓦葺、山門・柱角柱(内転)彫刻なし。

寺の沿革、建造年代は「瑞龍山祥雲寺のあゆみ」
〔高橋家文書〕による。

(飯山 繁)



写127-1 本堂全景



写127-2 向拝、虹梁、幕板



写127-3 鐘樓



写127-4 山門

131 青蓮寺〔しょうれんじ〕

本堂

寺院名	青蓮寺	所在地	桐生市西久方町1-10-11
宗派	時宗	主本尊	普光寺 阿弥陀三尊(国重文)
構造・形式	正面7間(14.20m)、側面5間(10.94m)、向拝入母屋造瓦葺、平入(当初草葺)		
建造年代(根拠)	18世紀初期／建築様式(高橋工 家文書では1744年)	[工匠]	延享元年(1744)欄 間彫刻 石原吟八郎

桐生市の市道1-37号線、通称山の手通りから県道桐生田沼線に交わるあたり、山の手通りの西側に建てられている。開かれた門から本堂に向かうと左に地蔵堂があり、本堂の右に庫裏がある。左の山際は墓地となっている。

本尊は国重文、新田義國所縁の阿弥陀三尊で秘仏とされ毎年秋の彼岸に御開帳される。

本堂は正面7間、側面5間の6間取りの入母屋造で正面には流れ形式で向拝がついている。本堂の室内の虹梁には18世紀初期の絵様が施してあり、向拝にはそれより下った時代の様式になっている。

欄間彫刻には石原吟八郎の延享元年の墨書きがあり、須弥壇裏には延享2年(1745)の林兵庫一門の墨書きが残っている。これらのことから18世紀初期に建物を建てその後に彫刻、須弥壇を施したものと推定した。

墨書きの延享元年は国宝に指定された妻沼の聖天堂の奥殿が完成した年であり、一時中断した頃とも重なるので、聖天堂の調査研究の対象建物にもなっている。

(下山 彰)



写131-1 全景



写131-2 目抜きの龍



写131-3 唐子の雪玉転がし



写131-4 前立てと須弥壇

135 龍真寺（りゅうしんじ）

本堂

寺院名	新川山龍真寺	所在地	桐生市新里町新川1051
宗派	曹洞宗	主本尊	聖觀世音菩薩
構造・形式	正面7間(15.30m)、側面6間(13.40m)、方形造瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	18世紀後半／建築 様式	工匠	不明

桐生市の西部、旧新里村の上毛電鉄新川駅の北側縮交差点を約700m北上すると境内に至る。境内南側入口の正面に本堂が南面する。本堂東に庫裡、南東側に鐘楼、西側から北側にかけて墓地を配する。

江戸時代初期の元和2年(1616)3月3日に創建された。開山は前橋市柏川町膳の龍源寺七世輝翁善陽和尚である。創建時から現在に至るまで無火災で存続し、現住職25世まで連綿と寺務をおこなう。境内南に市指定有形文化財の「龍真寺の石造地菩薩坐像(鶴龜地蔵)」がある。

本堂は、『ぐんまのお寺曹洞宗II』によれば寛永元年(1624)の建立とされているが、堂内虹梁の絵様等建築様式から18世紀後半と推定される。本堂入口上部の額の記載された元文元年(1736)からしても17世紀には遡らないだろう。

堂宇は南面して建ち、方形造瓦葺きで向拝はない。正面7間(15.3m)、側面6間(13.4m)の前面土間の8間取の内部には、内陣の出組、欄間超克が見どころである。昭和49年(1974)の改修(葺葺から瓦葺へ)にともない屋根勾配も変更している。また、十六羅漢像および甲子大黒天は柏川新屋の瀬戸喜他六(東陽)の作と伝わる。

(南雲啓二)



写135-1 全景



写135-2 内陣棗股



写135-3 虹梁の絵様



写135-4 本堂入口の額

142 総持寺（そうじじ）

本堂、総門、鐘楼

寺院名	威德山陀羅尼院總持寺	所在地	太田市世良田町3201-6
宗派	真言宗豈山派	主本尊	十一面觀世音菩薩
構造・形式	[本堂]正面22.58m、側面16.05m、入母屋造瓦葺(以前は麦藁葺)【總門】1間1戸妻入門【鐘樓】正面1間、側面1間		
建造年代 (根拠)	[本堂]18世紀後期 ／建築様式(第27 世宥窓の文書、天 明9年(1789)頃の 様式と推定)【總 門】棟梁:弥勒 寺、彫物師:川岸 亦八／寺伝【鐘 樓】不明	工匠	[本堂]棟梁、根岸 数馬、彫物師、後 藤周治秀信／寺伝 【總門】棟梁:弥勒 寺、彫物師:川岸 亦八／寺伝【鐘 樓】不明

太田市の西南に位置し、新田一族総領の館跡から「館の坊」と呼ばれる。正平年間に小俣雞足寺尊慶の法弟慶範により、岩松の真光寺・世良田の清泉寺と「館の坊」を合わせ一寺とし、真光寺と称し、第2世慶賢が總持寺と改称したと寺に伝わる。

本堂は、6間取変形。外部組物は正面・平三斗拳鼻付、側面・舟肘木絵様、背面・組物なし。中備は正面のみ棗股。向拝なし。内部組物は出組拳鼻付、素木造に極彩色の欄間彫刻。絵画は、棗股内部、外陣格天井、中央の龍(春易)、全帶戸(毛山憲史金壽)にある。

總門は、正面(道路面)の梁は冠木で端部に地紋彫り、背面は虹梁に木鼻。境内内側の中備は嵌込彫刻、虹梁の浮彫、木鼻は獅子。嵌込彫刻は妻飾り筈形部と中備、虹梁は唐草刻線彫り、平三斗拳鼻。屋根は戦前反っていたそうだが、現在反りはない。

鐘楼は、江戸時代は約150m東にあり、明治中期の県道新設に伴う移転を経て、平成5年の区画整理で現在の位置に移設。平成31年(2019)4月に改修と屋根の葺替をおこなった。

(伊藤美保子)



写142-1 全景



写142-2 本堂 棚間



写142-3 総門



写142-4 鐘楼

144 大慶寺〔だいけいじ〕

不動堂、山門

寺院名	妙満山大慶寺	所在地	太田市新田大根町甲1000
宗派	真言宗豊山派	主本尊	大日如来
構造・形式	[不動堂]正面3間、側面3間、寄棟造模瓦葺、1間向拝付 [山門]正面3間、側面2間、入母屋造本瓦葺、平入		
建造年代 (根拠)	[不動堂]18世紀後半／建築様式 [山門]江戸末期／住職伝承	工 匠	[不動堂]不明 [山門]不明

県道315号線面して西に参道があり、参道途中に山門、山門をくぐった正面奥に手水舎・不動堂へと続く。参道途中北側に本堂が位置する。治承4(1180)年創建とされる。明徳5年(1394)足利鶴足寺より空覚上人を招請し妙満尼の旧跡に再建。東国花の寺のひとつであるぼたん寺として近隣にも知られ、花期は多くの株が花開き、豪華絢爛なぼたん園として知られている。寺は、源義平の妻となった新田義重の娘が、平治の乱に敗れた義平を尾島町に清泉寺を創建して葬った事に始まる。本堂は昭和2年(1927)の新築当初のもので新しい。

不動堂の彫刻は、身舎に木鼻(正面:拳鼻 側面:拳鼻)、虹梁(唐草絵様)があり、向拝に木鼻(正面:獅子 側面:象)、水引虹梁(唐草絵様)海老虹梁(唐草絵様)が単純な形態で施されている。内部は台輪上に彫刻が嵌め込まれているのが特徴的である。以上の特徴から18世紀後半と推定される。

山門は、仁王像を両側に構える。せがい造であることから基は茅葺、土台が無い等の特徴より、神明明細帳との相違無く江戸末期頃と想定される。

(山本和之)



写144-1 不動堂 正面



写144-2 不動堂 妻飾



写144-3 不動堂 内部



写144-4 山門 正面

145 照明寺〔しょうみょうじ〕

本堂

寺院名	瑞雲山妙光院照明寺	所在地	太田市新田反町896
宗派	高野山真言宗	主本尊	薬師瑠璃光如来
構造・形式	正面3間、側面3間、寄棟造本瓦葺		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式 式	工 匠	不明

境内には、薬師堂・鐘楼・庫裏・不鳴池がある。寺域は新田義貞が居を構えた平城の跡とされ、周囲に土塁や堀の一部が残る。反町館跡とも呼ばれ中世の代表的平城跡で、新田荘遺跡の一つとして国指定史跡となっている。正徳4年(1714)現在地より500m北にあった寺が火災に遭い、住職祐泉和尚が本尊を現在地に移したことから始まる。

毎年1月2月に行われる護摩焚きは特徴的で、毎日行われるため、内装が度重なる煤で覆われている。三間角の方形寄棟造の軒唐破風を中心に所々に彩色痕跡のある彫刻が見受けられる。本堂身舎は出三斗の組物が主であり皿が出てるのが特徴的である。向拝には正面獅子の側面狛の組物が見事な彫刻である。また、段違いの海老虹梁、彫刻の進んだ幕殿、唐草絵様の施された手挟なども特徴である。以上の特徴から江戸末期(19世紀前半)の建築様式であると推定される。内部は一面煤で覆われ、格天井の天井絵や書記等、虹梁の彫物もかろうじて認識できる程度だが、廻縁周辺の空気抜きの加工は本堂の特徴的造作である。

(山本和之)



写145-1 正面



写145-2 側面



写145-3 海老虹梁 手挟



写145-4 外陣

146 全性寺〔ぜんしょうじ〕

本堂

寺院名	皆林山全性寺	所在地	太田市大原町371
宗派	真言宗豈山派	主本尊	大日如来
構造・形式	正面17.5m、側面11.8m、寄棟造銅板葺(当初茅葺)、向拝唐破風		
建造年代(根拠)	江戸末期/建築様式	工 匠	[彫工]岸亦八、弟子大輔

貞亨4年(1687)新田郡大根村大慶寺第15世教寛弟子全性法印により創建、明治12年(1879)まで住職代数不詳、昭和14年(1939)奈良長谷寺末となる。

蔽塚町の銅街道沿いに位置し、岡登靈神社、神明宮、八坂神社、長建寺等が近接する。

本堂は南面し、かつては正面に門があったが現在は西側の街道に面して入口とする。弘化4年(1847)の建立時、屋根は茅葺であったが昭和47年(1972)に銅板葺に改修されている。太田市指定重要文化財の本堂欄間彫刻6枚は中国の伝説等を題材にし、地元蔽塚、山の神村住人の彫工・初代岸亦八と弟子大輔・小橋勝造によるもので檜材の作品は躍動感と表情豊かな人物が表現され色彩も鮮やかに残されている。塗師は中村草斎であり、天井には中央の龍を囲む26の花鳥が描かれている。

外観は、漆喰を塗りで質素な外観を呈すが、向拝は軒唐破風とし兎の毛通しの竜の彫刻をはじめ木鼻には獅子や象の彫刻が施され、水引虹梁・海老虹梁・手挟み・柱正面の地紋彫等は檜材を使用し精巧な作りとなっている。建物全体もしっかりと造られ管理も行き届いているため殆んど狂いもなく気持ちの良い建物である。

(飯山 繁)



写146-1 本堂全景



写146-2 向拝、虹梁



写146-3 外陣欄間彫刻



写146-4 内陣欄間彫刻

147 長建寺〔ちょうけんじ〕

本堂

寺院名	笠置山崇徳院長建寺	所在地	太田市大原町1877
宗派	浄土宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	正面14.2m、側面14.06m、寄棟流造瓦葺(当初茅葺)向拝付		
建造年代(根拠)	19世紀前期/推定	工 匠	[彫工]岸亦八、弟子大輔

長建寺は、南北に走る旧あかがね街道蔽塚宿の最南部に位置する。寛文年間(1661~1673)岡登治良兵衛が知恩院万無上人により楽邦寺として創建。延宝年間(1673~1681)太田大光院隨善玄祭により中興開基とされる。天明3年(1783)火災により本堂が焼失したため、寛政12年(1800)から寄付を募り、文久3年(1863)に再建した。街道から西に向かう参道入り口に宝曆3年(1753)信州高遠住重右衛門作と刻まれた石仏が迎える。西に向かい直進し山門(薬医門)の先40mが本堂正面である。来迎柱以外は全て方柱で柱間が飛んでいるため、開放的で明るく気持ちの良い本堂である。欄間に太田市指定重要文化財の彫刻欄間が嵌込まれ、極彩色仕上げであり、背面に、彫匠 山之神村 岸大内藏義福七十二翁、同太助、同幸作の刻銘がある。内陣小壁には四天王が描かれ、格天井の鏡板には龍、花鳥などが描かれている。来迎柱上部は出組とし彫刻支輪を付ける。向拝の水引虹梁様、上部龍彫刻、海老虹梁、木鼻などの彫刻は彫が深く見事である。外部柱の柱頭には絵様付肘木が付く。内部は近年の改修で極彩色の塗えが行われ鮮やかである。

(飯山 繁)



写147-1 全景



写147-2 外陣・内陣



写147-3 外陣欄間彫刻



写147-4 内陣欄間彫刻

150 法輪寺〔ほうりんじ〕

本堂

寺院名	神龍山法輪寺	所在地	館林市朝日町7-10
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦牟尼佛
構造・形式	正面8.5間(15.96m)、側面8.5間(14.96m)、入母屋造、向拝1間、銅板葺		
建造年代 (根拠)	寛政5年(1793) 棟札	工匠	[大工棟梁]遠藤金七敷躬 〔棟梁〕丸山七右衛門久秀

館林市中央、館林駅北東1kmに位置する曹洞宗の寺院である。慶長年間、茂林寺住職久山正雄に多くの信者が帰依したため、慶長13年(1608)旧広済町に法林寺を建立したのが開山とされる。延宝3年(1675)、中興開山となる骨心正隨が現在地に移転し、寺名を法輪寺に改めた。

南道路から少し奥まつて山門が建ち、正面からやや左にずれて本堂が南面し建つ。本堂は方丈形式の正形6間取りの正面に広縁を通した曹洞宗の典型的な平面構成である。小屋組の痕跡より寄棟造から入母屋造へ改修されたとみられ、向拝も後補である。立登せ柱で梁を受け、内陣・大間境の大間側と来迎柱上に一手先組物を見せる。内陣・大間境の欄間に龍と鳳凰の彫刻を嵌め、他の室境は竹の節欄間を設ける。内陣と大間は格天井で大間は花鳥等が描かれている。棟札に寛政5年(1793)とあり、大工棟梁は下中森邑の遠藤金七敷躬、棟梁は館林片町の丸山七右衛門久秀が務めた。

小栗上野介忠順の首が一時埋葬され、秋元家の家老で藩政改革を行った岡谷蹉磨介や戊辰戦争で戦死した石川喜四郎、「お国替絵巻」を描いた山田音羽子などの墓がある。

(小島恵理子)



写150-1 全景



写150-2 大間天井



写150-3 内部虹梁・欄間



写150-4 内部幕板

151 遍照寺〔へんじょうじ〕

本堂

寺院名	高麗山遍照院	所在地	館林市緑町1-2-15
宗派	真言宗豊山派	主本尊	不動明王
構造・形式	正面9間(24.15m)、側面6間(16.65m)、寄棟造、向拝3間、檣瓦葺き(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	寛延3年(1750) 遍照密寺由緒略	工匠	[大工]須山喜右衛門、〔後補龍〕影工・寺田芳蘿、幸次

館林駅南東、旧日光脇往環沿いにある。新田義重が二親菩提のため、建久9年(1198)矢島郷に慈親上人を開山として創建。北朝貞治6年(1367)に俊海僧都が法流一世の中興開山。天正18年(1590)柳原康政が遍照寺十三世宥圓の高徳を慕って寺領を与え、寺を現在地に移し祈願所とした。將軍家光・綱吉から朱印状が発給され、館林藩内の御朱印寺五ヵ寺の一寺である。寺格は中本寺常法檀林で末寺二十七ヵ寺を有する巨刹であった。

本堂は寛延3年(1750)の建立。棟梁は本川侯村の須山喜右衛門である。平面は6間取で四方に一間の廊下を廻らす。外周部は角柱に舟肘木を置き、内部は内・外陣周りと来迎柱を円柱とし、台輪に出組の組物を置いている。外陣の南面と東西の欄間に文人等の肉厚な透かし彫欄間を嵌め、北面欄間に鳳凰を描いた板絵を嵌める。正面の差鶴居虹梁に施された渦は建造年代として相応しい。大正4年(1915)に本川侯村の三村善兵衛が茅葺から瓦葺に改造を行っている。本堂内に破却された唐門の幕板が、境内南に本堂より前に建立されたと伝わる山門と鐘楼が残されている。

(小島恵理子)



写151-1 正面



写151-2 向拝彫刻



写151-3 内部(中央)虹梁



写151-4 欄間彫刻

153 雲龍寺〔うんりゅうじ〕

本堂

寺院名	瑞光山雲龍寺	所在地	館林市下早川田町 1896
宗派	曹洞宗	主本尊	釈迦如來
構造・形式	正面8間(15.04m)、側面6間(11.87m)、寄棟造、向拝1間、棟瓦葺		
建造年代 (根拠)	天保14年(1843) 〔根拠〕棟札	工 匠	〔彫工〕小林龍洲内 田浦松 〔繪師〕北 尾重光

館林市北部にあり、中世の有力武士早川田氏館跡が境内地となっている。天文22年(1553)、足利家臣早川田喜六郎在京唯種を弔うため、家臣の川村将監・齊藤日向・土岐崎主計・中村外記らが創建。唯種が開基。茂林寺7世の月舟正初大和尚が開山である。元亀年間(1570~1573)に再興した後、第12世正克が宝永3年(1705)に伽藍を再建。天保14年(1843)本堂と山門を再々建した。

本堂は柱で丸桁を直接受け、正面の柱上のみ実肘木で飾る曹洞宗らしい質素な佇まいとなっている。当初は茅葺で、瓦葺替と共に向拝も付している。内陣境となる大間の北側のみ意匠を凝らしており、台輪をのせ出組とし彫刻板支輪を嵌め込む。差鴨居虹梁は浮き彫りが施され、彫刻欄間に柱間三間にかけて十六羅漢が彫られている。23世活眼大和尚も「現住」として加わる。裏の墨書きより彫工は熊谷の小林龍洲、吹上の内田浦松。大間の格天井板に彩画が施され、中央鏡天井には「法橋重光筆」の墨書き落款と共に龍が描かれている。

雲龍寺は足尾銅山鉱毒事件で反対運動の拠点となり、境内南西にある田中正造の墓および救現堂は館林市指定史跡となっている。

(小島恵理子)



写153-1 正面



写153-2 大間天井



写153-3 内外陣境欄間彫刻



写153-4 内外陣境幕殿

154 観性寺〔かんしょうじ〕

薬師堂、仁王門

寺院名	瑠璃山觀性寺	所在地	館林市仲町10-12
宗派	真言宗豊山派	主本尊	大日如來
構造・形式	〔薬師堂〕正面8.23m、側面8.72m、権現造、平入、向拝1間、棟瓦葺 〔仁王門〕1間1戸(6.69m)元・薬医門、側面1間(1.68m)、切妻造、平入、銅板瓦葺		
建造年代 (根拠)	〔薬師堂〕江戸末期 〔建築様式〕〔仁王門〕18世紀後 期/建築様式	工 匠	〔薬師堂〕不明 〔仁王門〕不明

館林駅北、城下町西部にある。天正4年(1576)5月、法印弘喜の開山で、はじめは観音寺と称した。嘉永元年(1848)と明治30年(1897)に火災に遭い、いずれも再建された。明治41年(1908)旧鞠町にあった同宗寺院自性院を合併し、明治43年(1910)観性寺に改称した。

薬師堂は自性院合併の際に修築され権現造の平面を持つ。新材で改修され向拝に当初の名残を残すのみである。海老虹梁の形状、茨状に延びる刻線彫から19世紀中期頃に加工されたものと推察する。薬師様は眼病に効くと言われ、目を描いた絵馬等が多く奉納されている。小室翠雲の虎図・龍図や、荒井閑窓の額も奉納されている。

仁王門は合併の際、自性院から受け継いだ仁王像を祀る。薬師堂と同時期に、他の寺院から薬医門を移築し、仁王像安置部分を改築したと考えられる。実肘木のシカミに、渦へ巻付く若葉を細工する意匠をもつ。元の薬医門は太目の刻線彫、木鼻の形状などから市内の1800年前後の建物と推定する。

(小島恵理子)



写154-1 薬師堂正面



写154-2 薬師堂虹梁



写154-3 薬師堂木鼻



写154-4 仁王門正面

155 覚應寺〔かくおうじ〕

太子堂

寺院名	弘光山太子院覺應寺	所在地	館林市栄町1-8
宗派	真宗大谷派	主本尊	阿弥陀如來
構造・形式	正面1間(背面2間)(3.19m)、側面2間(3.19m)、方形造、向拝1間、瓦葺		
建造年代 (根拠)	明治41年(1908) 墨書き	工匠	不明

館林駅の北西、城下町西端にある。源頼朝に仕えた佐々木盛綱(西念)の子孫林通が羽総大袋(羽附)で創建したという。南北朝時代の「親鸞聖人門侶交名牒」に淨土真宗光信(源海)の弟子光善が大袋を拠点としていたことが記され、その流れを汲む寺院と考えられる。城代家老金田遠江守正勝が林通の孫林易に帰依し、綱吉から三十石の墨印状を賜り、現在地に移したという。昭和6年(1931)11月今の本堂を新築した。

太子堂は本堂南に東面して建っている。明治時代の比較的新しい建造物であるが、丸柱に幅広の横板を落し込み、正面に折戸を設け古風な意匠となっている。全ての柱頭に獅子頭を付し、向拝に目貫の龍を入れる。繫ぎ梁は設げず幅広の手挟と力垂木で身舎と向拝を繋ぐ。格天井の鏡板には彩画がされている。寺宝として聖徳太子童形木像があり、佐々木盛綱が守り奉持したと伝えられる。

明治35年(1902)建立の「館林鳩組合記念碑」に建設業関係者による太子講が行われていたことが記され現在も続いている。市内や近隣の寺社に多くの絵馬や天井画などを残した浮世絵師北尾重光(1814~1883)の墓があり市指定史跡となっている。

(小島恵理子)



写155-1 正面



写155-2 側面



写155-3 須弥壇



写155-4 天井画

156 寳生寺〔ほうしょうじ〕

觀音堂、山門

寺院名	南望山自在院寶生寺	所在地	館林市日向町240
宗派	真言宗豊山派	主本尊	延命地藏尊(寶生如來)
構造・形式	[觀音堂]正面3間(4.74m)、側面2間(4.74m)、方形造、向拝1間、瓦葺 [山門]1間1戸梁門(2.62m)、側面1間(1.69m)、切妻造、平入、瓦葺		
建造年代 (根拠)	[觀音堂]18世紀後半／建築様式 [山門]18世紀後期 ／建築様式	工匠	[本堂]不明 [山門]不明

館林の北西、矢場川南に位置する。開山開基は不詳。かつて一大伽藍があり、除地三町歩もつ巨刹であった。徳川綱吉の城主時代、日光例幣使街道整備のため移転。天保14年(1843)に堂宇伽藍を焼失し、一民家を仮本堂とした。山門前の石造・不動明王像と大日如来像は享保の建立である。

觀音堂は十一面觀音を祀り、平安時代に平将門が参拝した堂といわれている。自然石に棕付丸柱を建て台輪に一手先組物をのせる。向拝の柱頭と海老虹梁で繋ぎ、木瓜渦と若葉が深めに彫られている。内部は一間で格天井を吊り、出組の通肘木に太目の格縁を差している。明和7年(1770)と寛政8年(1796)の鶴口が架かり、折曲がりのある木瓜渦から、18世紀後半の建造と推察する。

山門は薬院門で大戸を有する。三斗組で小屋を受け垂木を表す。背面の柱頭に曲り梁を架け鼻栓で締める。木鼻の先端は丸みを帯び、太目に彫られた円形刻線の特徴から、觀音堂と加工時期が異なると思われ18世紀末頃の建造と推察する。

東上州三十三番札所第八番の靈場となっている。

(小島恵理子)



写156-1 觀音堂正面



写156-2 觀音堂海老虹梁



写156-3 觀音堂内部



写156-4 山門全景

157 長壽院〔ちょうじゅいん〕

本堂

寺院名	董松山 ^良 勝院 ^法 龍寺	所在地	みどり市笠懸町阿左美2130
宗派	淨土宗	主本尊	阿弥陀如來
構造・形式	正面5間(14.17m)、側面5.5間(12.28m)、寄棟造、平入、瓦葺(当初茅葺)		
建造年代 (根拠)	明和2年(1765)/ 棟札	[大工]棟梁 田嶋定七 他8名 [彫工]中島定右衛門	工匠

『長壽院縁起』によると、嘉曆元年(1326)以前に今より約300m南に阿弥陀堂を創建。延宝8年(1680)本多政長の菩提寺として万松天龍禪師が現在地を開山した。JR両毛線岩宿駅北方、県道344号阿左美桐生線に面して位置する。薬医門をくぐると正面に本堂、西側に薬師如來堂(竹沢薬師)がある。本堂裏には櫛の大木があり、古くは周囲に土塁があったが現在は整備され墓地になっている。

本堂は明和2年(1765)の建造、棟梁は武州妻沼の田嶋定七他8名と木挽2名の名が棟札にある。瓦葺寄棟の屋根は当初は茅葺で村誌にその写真も残されており、昭和41年(1966)に葺替えられた。外觀は向拝もなく、軒廻りは正面のみ舟肘木の二軒、側面はせがい造一軒の質素な造りになっている。内部は6間取りに広縁が付き、改造は比較的少ない。禪宗様の須弥壇は豪華である。内陣外陣境の欄間彫刻には裏面に墨書きが残され、彫刻師は山田郡天沼村の中島定右衛門の寛政7年(1795)の作で、雲間に漂う二人の天女を表した透彫り極彩色のもので非常に貴重である。本堂に関する修繕等の棟札4枚が保存されている。

(亀井直行)



写157-1 本堂全景



写157-2 正面側面軒裏



写157-3 外陣、内陣



写157-4 外陣欄間彫刻

158 臥龍庵〔がりゅうあん〕

本堂

寺院名	四天王山臥龍庵	所在地	みどり市笠懸町久宮330
宗派	黄檗宗	主本尊	聖觀世音菩薩
構造・形式	正面3間(3.82m)、側面2間(3.80m)、入母屋造、平入、瓦葺(当初寄棟造、茅葺)		
建造年代 (根拠)	18世紀後半／建築 〔根拠〕 様式	工匠	不明

寺の記録では、元禄9年(1696)年に国瑞寺を開山し黄檗宗本山萬福寺4代管長の独湛和尚により創建され、国瑞寺代々の住職が隠居したとある。

東武桐生線阿左見駅南西、桐生大・短大西方、県道69号線沿に位置する。庫裏・客殿は解体され公民館に建て替えられ本堂に継っている。広い敷地には大木や庚申塔・觀音石物・住職の墓等がある。

当初は質素な庵堂であったが、宝曆8年(1758)に本堂・庫裏を建立し、享和元年(1801)に四天王尊を祀ってから近隣の村々の参拝者が年々増えて境内地が手狭になった為、天保7年(1836)に字元庵から現在の字西浦に移転し、村持にしている。「臥龍庵を村持にする証文」が残っている。本庵は通称「天王さま」と言われ、飢餓や疫病除けとして地域信仰の中心的位置にあり、現在も地域住人により年2回お祭りが盛大に行われている。明治の頃には信徒1万5千人と記録されている。

本堂は正面3間、側面2間の小庵であり、軒廻りに舟肘木、正面に引分け格子戸、太瓶束、二方に縁を廻している。建造は虹梁の絵様から18世紀後半と推定する。現在は入母屋造瓦葺きであるが、昭和40年(1965)の写真では寄棟茅葺の質素な建物となっていた。

(亀井直行)



写158-1 全景



写158-2 正面



写158-3 側面



写158-4 軒廻り

159 清泉寺〔せいせんじ〕

本堂

寺院名	清泉山普吉祥院 清泉寺	所在地	みどり市笠懸町鹿 1969
宗派	天台宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	正面5間(13.30m)、側面5.5間(10.09m)、入母屋造、平入、銅板葺(当初茅葺)		
建造年代	19世紀前期／建築 (根拠) 様式	工匠	不明

開山は良尊和尚と伝えられるが不詳。寛永17年(1640)に世良田長楽寺より俊海和尚が来て中興。明治14年(1881)大本山延暦寺の末寺になる。

JR両毛線岩宿駅西方、鹿田山の西側ふもと近くに位置する。現在は本堂前の階段に屋根を増設、内部も一部改修し、西側庫裏も建替えている。

文政5年(1822)に本堂・庫裏が全焼している。再建に際しての「本堂奉加金取立帳」と文政13年(1830)の「客殿焼失寄付奉納連印記」があり、虹梁の絵様等から19世紀前期の建造と推定する。

屋根は茅葺にトタンが被せてあったが、昭和54年(1979)に入母屋造銅板葺きに葺替えられた。外部廻りはせがい造疊垂木、舟肘木、塗壁、木連格子妻飾り等質素な外観となっている。外廻りの鴨居には溝が3本あり、当初は板戸と障子が付いていたと思われる。内部は6間取りに広縁が付き、虹梁の3カ所に唐草絵様の彫刻があるが、欄間の綾繁格子や内陣以外のほとんどに杉材を使用し、和様の須弥壇も質素で全体的に住宅風の意匠に仕上げられている。本堂はかつて学校(鹿村紅葉小学校)や役場にも使用され、当時の生徒が使用した机等も保存されている。

(亀井直行)



写159-1 全景



写159-2 正面



写159-3 外陣正面



写159-4 外陣・廊下

160 長昌寺〔ちょうしょうじ〕

本堂

寺院名	次第山清涼院 長昌寺	所在地	みどり市笠懸町西 鹿田846
宗派	天台宗	主本尊	聖觀世音菩薩
構造・形式	正面13.95m、側面9.57m 入母屋造、平入		
建造年代	江戸末期／建築様 (根拠) 式	工匠	不明

国道50号間野谷町西交差点を2km余北上した平坦地に位置する。南北に走る県道境木島大間々線から西に折れて参道を進み境内に入る。伽藍配置は、正面に本堂、東側に庫裏を配する。

天元元年(978)、本寺の善昌寺(新里)第5世慶範和尚が、西鹿田寺内に草創したと伝えられる。江戸初期の寛永2年(1625)西鹿田領主の旗本久永源兵衛が、忠慶和尚を招請して宇中島に中興した。天保11年(1840)正月六日本堂が焼失し、同15年(1844)に再建したと記している(『笠懸村誌下巻』昭和62年)。

21世(当世24世の祖父)が、佐波郡東村長安寺より明治31年(1898)に晋山、内部普請を行った。内陣・外陣の天井を格天井とし、花鳥の彩色画が描かれている。

昭和62年(1987)に寄棟造茅葺きを入母屋造銅板瓦葺向拝付に基壇部を基礎と一体化した。

本来の本堂全体の建築様式は、和様としてまとめられているので質素な感じを受ける。外部は鴨居上部の白壁中に2本の貫材を見せ、中央部に出入り口を開いている。19世紀中期における地方寺院本堂の建築様式を知る指標として重要である。

虹梁の唐草絵模様等から、建造年代は、江戸末期と推定される。

(西村良子)



写160-1 全景



写160-2 正面



写160-3 側面外観



写160-4 内外陣

162 覚成寺〔かくじょうじ〕

本堂・山門

寺院名	重朝山正教院覺成寺	所在地	みどり市大間々町上神梅152-1
宗派	天台宗	主本尊	三尊阿弥陀如来
構造・形式	[本堂]正面3間(実測5.04m)、両翼下屋各(1.10m)、側面3間(実測5.04m)、背面下屋(1.26m)、向拝1間(2.20)、入母屋流造、着色垂鉢板葺、平入 [山門]1間1戸切妻造、平入、カフー鉄板葺、四脚門		
建造年代(根拠)	18世紀後期～19世纪前期／建築様式	工匠	不明

県道上神梅大胡線の旧上神梅小学校前から北へ向かう緩やかな上りの途中200m、旧あかがね街道に面しする、西から東へ向かう段丘上の傾斜地に位置する。当寺は仁寿年間(851～854)天台宗第3世座主慈覚大師(円仁)により創立し、その後、寛永18年(1641)慈眼大師(大僧正天海)に直筆の補任状を頂戴し中興されたという。境内の南側の街道から西に向かう道に南面する山門から入り参道正面に三間四方の御堂の両翼と背面に下屋を施した本堂、その西側に庫裡が続き、東側に子安地蔵堂を置く。参道の中程に大間々用水と呼ばれる防火用水路が東北から南西に横切り流れている。明治34年(1901)火災により旧本堂が全焼したため、境内の西南の岡上に在った薬師堂を明治39年(1906)に移転し現本堂に転用したものである。本堂の中備は、軒廻・外陣正面には蔓股を用いているがその他の面と内陣は撥束とする珍しい造りとし、きれいで彩色されている。山門は小規模ながら質素でおとなしい建物である。毎年4月19日天海僧正から下賜された徳川家康の守り本尊北辰妙見菩薩を祭る、北辰尊星祭りを挙行している。

(飯山 繁)



写162-1 全景



写162-2 内陣、須弥壇



写162-3 向拝、虹梁、蔓股



写162-4 山門全景

163 光榮寺〔こうえいじ〕

本堂

寺院名	瑞應光山薬王院光榮寺	所在地	みどり市大間々町大間々1056
宗派	真言宗智山派	主本尊	薬師如来
構造・形式	正面10間、側面7間、寄棟造、平入、向拝1間軒唐破風付、桟瓦葺		
建造年代(根拠)	江戸末期／建築様式	工匠	[本堂]彫工 石原常八主信

みどり市大間々町の街中を南北に通る銅街道と呼ばれていた街道(現国道122号線)から西に入った場所に位置する。光榮寺の本尊は眼の神様で、仏像が柿の木で出来ているため「柿薬師」と呼ばれている。関東八十八カ所靈場第八番礼所、上州三十三観音靈場第一番所に指定され、近隣はもとより遠方から多くの巡礼者が訪れる。境内南東に切妻の八脚門を構え、両脇間に仁王像を安置する。門を潜ると正面に本堂が構え、南に鐘楼、手水舎、六地藏、北に壇信徒會館・納経所を配す。大間々町は江戸時代、足尾から銅を平塚まで運ぶ銅街道の宿場町で、街道に面した光榮寺は町の人々とのつながりも深く、柿薬師如来大祭は盛大におこなわれる。

本堂は正面10間、側面7間、寄棟造平入、向拝1間軒唐破風付、桟瓦葺。6間取りの方丈形式の建物である。組物は外部は柱頭に絵様肘木、内部は二手先とする。彫刻は向拝、虹梁、内部の支輪や蔓股、欄間彫刻等各所に見られ、向拝の中備や唐破風兔毛通の龍、手挾の牡丹や室内外陣の欄間彫刻は素晴らしい。向拝の龍の彫刻裏に花輪の彫刻師「石原常八主信」の刻銘がある。「山田郡誌」に「寛文年間に火災にあい元禄2年(1689)に再建、弘化4年(1847)現宇を營す」と記す。建物建造年は虹梁の絵様や彫工の生存年から江戸末期の建物とみてよいであろう。

(小林則子)



写163-1 本堂正面



写163-2 向拝



写163-3 海老虹梁



写163-4 内部欄間彫刻

164 世音寺〔せおんじ〕

地蔵堂・鐘楼

寺院名	蒲生山正觀院世音寺	所在地	みどり市大間々町桐原326
宗派	天台宗	主本尊	聖觀世音菩薩
構造・形式	[地蔵堂]正面1間(3.78m)、側面2.5間(5.00m)、向拝つき入母屋造妻入り瓦葺 [鐘楼]2.8m、方形造、鉄板葺		
建造年代 (根拠)	[地蔵堂]19世紀初期／建築様式 [鐘楼]江戸期／建築様式	工 匠	不明

旧あかがね街道桐原宿の中央に位置し、道を挟んだ東側には銅蔵があり、東北の位置には杉森稻荷、東南には郷蔵がある。いずれもかつては境内にあり、桐原郷蔵及び郷藏文書は県指定史跡として住職が管理している。『山田郡誌』によると創立は永禄年間(1558~1570)頃と記している。観音平(現在の瀬戸ヶ原と思われる)よりこの地に移すとあり、旧本堂は元禄14年(1701)建造であったといわれる。

地蔵堂は正面2間奥行3間の入母屋造、妻入りの建物で奥には半間ほどの祭壇があり、享保17年(1732)の刻印のあるお地蔵様が安置されている。

木鼻や虹梁の絵様からは18世紀末頃から19世紀初期の作風と推定できる。

鐘楼は旧梵鐘(安永8年(1779))が戦争による供出で使われなくなり、平成12年(2000)に新梵鐘の設置に伴い補強修理された。現在の鐘楼は材料の交換が多く彫刻等がなく、修理や建替えの記録がないが、明治期の明細書に載っていることから18世紀初期以降の江戸期と推定した。

(下山 彰)



写164-1 地蔵堂正面



写164-2 地蔵堂向拝の木鼻



写164-3 地蔵堂側面



写164-4 鐘楼

165 成満院〔じょうまんいん〕

不動堂

寺院名	成満院	所在地	みどり市大間々町小平602
宗派	天台宗	主本尊	不動明王
構造・形式	正面3.81m、側面4.72m、入母屋造妻入り瓦葺(当初草葺)		
建造年代 (根拠)	18世紀中期／建築 〔様式〕	工 匠	不明

小平の鍾乳洞公園から小平川を少し遡った左岸にある。橋を渡ると正面に不動堂があり左側は管理人の居宅になっている。当初は本堂もあったが現在は不動堂を残すばかりである。

不動堂は二間二間半ほどの入母屋造、妻入りで、縁が三方にめぐらされている。入り口は扁額があり虹梁には18世紀中期と思われる絵様が彫られているところから18世紀中期と推定した。

室内は奥に3尺ほどの祭壇があり、正面は不動明王・毘沙門天・庚申像等が安置されており、右にはそのほかの仏像が多数祀られ、左には御子守様と呼ばれる神殿が安置されている。部屋のほぼ中央に護摩壇が置かれ近年まで密教修業が行われていた。又、護摩壇の前には明和元年(1764)と書かれた葵の文の付いた水引幕が置かれている。

管理人宅には市重文の円空仏の「月光菩薩立像」が残されていることや、不動堂は昭和35年(1960)に屋根修理と多少の修理等は行われていたが、当初の形態が残され、地域に密着した修驗道寺院として体裁が整っている。民俗文化を知るうえでも貴重な遺構であるといえる。

(下山 彰)



写165-1 不動堂正面



写165-2 不動堂内部



写165-3 御子守様本殿



写165-4 円空仏

167 瑞璃殿（るりでん）

本堂

寺院名	瑞璃殿	所在地	みどり市大間々町 浅原乙1373
宗派	不明	主本尊	薬師三尊像
構造・形式	正面2.84m、側面4.39m、寄棟造、妻入、波形 銅板葺		
建造年代 (根拠)	明治36年(1903) 木札	工匠	不明

小平の里に通じる県道334号線、元市立福岡中央小学校前を過ぎると、右側に「薬師堂のカヤの木」の案内看板がある。その小道を入るとすぐに樹齢700年といわれる大きなカヤの木と多数の石塔類(中には寛永の刻のあるものがある)に守られるようにならなお堂が建っている。そのお堂は薬師堂または瑞璃殿と呼ばれている。

内部は中央に「瑞璃殿」の奉額がかけられ、下に厨子があり薬師三尊が安置されている。その両脇は彩色された透彫の嵌戸があり、取外すことができる。彫刻は、戸には頭部に干支が彫られた十の神将、日光菩薩、月光菩薩にも頭部に干支、合わせて十二支が彫られている。さらに、戸の内側に収められた厨子の中にも仏像が安置されている。「瑞璃殿」の奉額の裏には寛延3年(1750)の墨書きがあり、薬師三尊像は延享3年(1746)の作といわれている。戸の彫刻もその頃のものと思われる。本堂そのものは明治35年(1902)に焼失し、翌36年(1903)に再建されたものであることは棟札により確認されているので、彫刻や仏像は火事の難を逃れ再設置されたものであろう。

山里の大きなカヤの木のもとにひっそり建っているお堂は趣深いものである。

(板川多恵子)



写167-1 全景



写167-2 内陣



写167-3 左側 彫刻



写167-4 右側 彫刻

168 岩穴観音（いわあなかんのん）

農村舞台

寺院名	岩穴観音	所在地	みどり市大間々町 小平1964
宗派	不明	主本尊	なし
構造・形式	正面1間、背面5間(9.17m)、側面3間(4.57m)、 入母屋造、鉄板瓦棒葺		
建造年代 (根拠)	19世紀後半／建築 式樣	工匠	不明

県道小平塩原線の、小平の大杉を右折した集落の道から10mほど上がった所に、農村舞台の建つ敷地がある。当舞台は岩穴観音入口手前に位置し、正面を北に向けて立っている。昭和40年代に廃校になった小学校(分教場)のあった場所である。この舞台を右手に見て正面には山門、斜面中程にみどり市指定史跡、岩穴観音の地蔵菩薩坐像及び阿弥陀仏如来坐像が祀られている。別当寺は正福寺である。

岩穴観音は馬の神様として知られ、盛んな時には多くの馬が飼い主とともに参拝に来て、縁日が開かれたときには様々な余興が模様されたという。

その余興を担ったのが当舞台と推測される。正面9.17mはすべて開口となっており、中央部分の床(幅3間、高さ0.5m)は二重床構造となっている。この部分の背面壁を外すと遠見となる。

建物の建造に係る資料は残されていなかった。内部に大きな額が5枚あるが、経年劣化により判読は難しかった。「大間々町誌 別巻八 大間々の建造物」によると文久3年(1863)と判読できるものが一番古くそれより前の竣工建物であろうという判断になっている。建物の全長から1間の巾を出すと現代の巾に近い。のことから建造年代を19世紀後半とした。

現在は使用されることではなく、静かに建っている。

(久保田真理子)



写168-1 全景



写168-2 背面



写168-3 舞台二重床



写168-4 内部額

169 大蒼院〔だいそういん〕

本堂

寺院名	福聚山大蒼院	所在地	みどり市東町小中 727
宗派	曹洞宗	主本尊	紙通牟尼仏
構造・形式	寄棟造、鉄板葺(元茅葺)		
建造年代 (根拠)	寛政12年(1800) ／ 棟札	工匠	不明

室町時代後期、天文年間(1532～1553)頃の創建とされる当寺は、旧飼山街道沿いの山間に佇む曹洞宗の寺院である。

本堂の建築は、棟札記録より寛政12年(1800)である。寄棟造茅葺であるが、昭和期に茅の上に鉄板を葺いている。平面は六間取の方丈形式の典型的な曹洞宗の本堂形式を示し、正面手前に元土間であったと思われる入側、奥中央を外陣、その奥を内陣、両脇を位牌堂、室中の間を配す。内陣奥に開山堂を置くが後補のものである。外回りの設えは角柱の上に絵様肘木を載せ丸桁を受けるが、向拝は無く簡素である。内部は外陣を中心に装飾化が進むが、両脇間の造りは簡素である。内陣正面の琵琶板は彩色画であり、外陣正面の琵琶板は唐草の彩色画で、その上の天井支輪は極彩色彫刻板支輪である。また外陣正面の欄間彫刻は、花輪住の著名な彫物師石原常八主信(2代目)作であり、右から「南泉斬猫」「玉持ち龍」「徳誠華亭の船子和尚」を嵌める。作風と合わせ、作者名、作成年等が彫刻裏面に墨書きされ〔文政12年(1829)〕、その作成を明らかとしている点等から、みどり市指定重要文化財となっている。花輪の彫物師集団の足跡を辿る上でも貴重な建築である。

(栗原昭矩)



写169-1 全景



写169-2 外陣正面



写169-3 外陣正面中央欄間



写169-4 外陣正面右側欄間

172 教學院〔きょうがくいん〕

観音堂

寺院名	向雲山教學院	所在地	邑楽郡明和町中谷 145-1
宗派	真言宗豊山派	主本尊	勢至菩薩
構造・形式	正面3.65m、側面3.65m、方形造、向拝1間、瓦葺		
建造年代 (根拠)	江戸末期／建築様式 式	工匠	不明

創建の由緒は不詳である。東武線川俣駅より南西方向に向かい民家が並ぶ明和町の中央に位置している。1kmほど南には利根川、北0.8kmには谷田川が流れている。南側道路より境内に入ると広い駐車場が広がり、正面に本堂、西に観音堂、三義人の供養塔が並び、東には2地蔵と覆屋がある。観音堂に向かって右側に三義人供養塔、左側に大きな銀杏の木があり歴史を感じさせる。平成6年(1994)に建替えられた本堂奥には墓地が広がり広い境内となっている。

観音堂は正面3間(3.65m)、側面2間(3.65m)方形造瓦葺、1間向拝付、基礎自然石、土台あり。平成11年(1999)に屋根、基礎、床等が全面的に修理された(住職・總代)。正面は東向きに建立され蔀戸を中心配置し両側は開戸となっている。扉を開けると須弥壇があり、十一面觀世音菩薩が祀られている。当建物は建造年代を示す史料はないが、「明治12年寺詔明細帳」に「方2間」の堂宇を記す。建物の特徴として、向拝は後補であるが、絵様や海老虹梁の特徴や明治の明細帳の記述から江戸末期の建物と考える。観音堂本尊十一面觀世音菩薩觀音堂は三国秩父第25番札所で、「当觀世音は利益多き中に殊に女人の安産を守り給う」という。三義人とは享保3年(1718)館林騒動代表者3名の供養碑がある。

(原島伸輔)



写172-1 正面



写172-2 側面



写172-3 虹梁・木鼻



写172-4 海老虹梁

173 東光寺〔とうこうじ〕

十一面觀音堂

寺院名	東光寺	所在地	邑楽郡明和町大佐賀93
宗派	真言宗豊山派	主本尊	十一面觀音
構造・形式	正面4.54m、側面4.30m、方形造、向拝1間、瓦葺		
建造年代 (根据)	江戸末期／建築様式 式	工匠	不明

明和町の中央に位置し、東には江戸時代の日光脇往還と呼ばれた街道があった。南の県道から北に進むと東光寺の境内がある。正面に本堂があり、東奥に觀音堂が南に開いて鎮座する。本堂の西側に墓地が広がり歴代住職の墓が並ぶ。境内東には長良神社が隣接する。昭和52年(1977)5月に墓地が現在の地に移転した。

現在は住職不在となり、邑楽町の明王院が管理している。觀音堂は2間半の方形造1間向拝付の堂宇で、背面1間半は増築である。軒をせがい造としていることから、当初の屋根は茅葺であったと考える。正面中央を蔀戸、両側を板壁とする。外部は角柱上に舟肘木を置き、装飾は少なく正面や向拝虹梁に刻線彫の絵様を施す程度である。内部は一室とし、正面に須弥壇を置き十一面觀音像を祭り、前に祈禱台を置く。中央の柱を棕付丸柱とし、組物は平三斗、中備は棗股である。創建年月や由緒は不明であるが、明治12年(1879)の寺院明細帳に2間半の堂宇を記す。また觀音堂内部に改修の記録を残す書版が2枚残されていて、昭和元年(1926)改修、昭和13年(1938)に増築していることが判る。現在の建物の材の風食の状態や虹梁の絵様から、当初の建物の建造年代は江戸末期と推定する。

(原島伸輔、莊司由利恵、小林則子)



写173-1 正面



写173-2 虹梁・木鼻



写173-3 海老虹梁



写173-4 須弥壇・本尊

174 金剛院〔こんごういん〕

不動堂

寺院名	金剛院	所在地	邑楽郡明和町下江黒195-1
宗派	真言宗豊山派	主本尊	大日如来
構造・形式	正面4.72m、側面4.72m、方形造、瓦葺		
建造年代 (根据)	19世紀中期／建築様式 式	工匠	不明

金剛院は明和町の東に位置し、利根川と谷田川に挟まれた田園地帯にある集落内に鎮座する。南側道路より北に進み境内に入ると、左手に不動堂、正面奥に昭和49年(1974)に建築され、地域公民館として使われている本堂がある。不動堂は2間半方形造瓦葺、縁を正面と側面1間に廻し、漆喰壁の脇障子を付けける。柱は角柱とし自然石基礎の上に立て、柱頭に舟肘木を置く。正面は蔀戸と両脇に格子付板戸を嵌め、北面に入口を設ける。壁は内外共漆喰塗仕上げである。内部は1室とし、組物や絵様もなく簡素な作りであるが、天井1面に見事な龍が描かれ目を引く。

建造年代は史料が無く、また装飾による特徴からも推定できないが、建物柱間寸法の2間半を4.72mとしており、1間を6尺2寸3歩(1,888mm)のモジュールとしていることから、19世紀中期頃まで遡れると考える。

現在は住職が不在で、資料も少なく由緒、沿革も不明であるが、本堂内には、古い大日如来像や、慶長12年(1607)の位牌が置かれ、金剛院の歴史を感じさせる。境内には太平洋戦争戦没者供養塔、文政8年(1825)第69番巡拝塔(新四国札所道標)本堂新築記念碑、19夜塔がある。古くから八坂神社の普羅祭が境内で行われた。現在は無住寺ではあるが、寺の行事は世話人が行い、地域で引き継がれている。

(原島伸輔、小林則子)



写174-1 正面



写174-2 側面



写174-3 裏面



写174-4 天井絵

175 地蔵寺（じぞうじ）

行鑑堂

寺院名	小比叡山地蔵寺	所在地	邑楽郡明和町新里 196-1
宗派	真言宗豊山派	主本尊	地蔵菩薩
構造・形式	正面4.54m、側面6.16m、切妻造、平入、瓦葺		
建造年代 (根拠)	明治前期／建築様式	工匠	不明

明和町中央に位置し1km南には利根川が流れる。南道路より境内に入り山門を潜ると、正面に本堂と庫裏、西に薬師堂と行鑑堂が並び、東に6地蔵を祀る。本堂は平成19年(2007)、山門は平成4年(1992)に改築している。薬師堂は近隣から移築と聞く。

行鑑堂は東に開いて建ち、正面2間半、奥行2間、向拝付の建物と、背面に奥行2.5mの建物を繋げる。内部は、手前に10畳の室を置き、正面に引違戸を付け、その奥に行鑑上人の墓を安置している。

『上野国邑楽郡寺院明細帳』によると、開山堂の由緒は「中興開山ト称ス行鑑上人享保二年九月二十七遷化、同三年設立、其後嘉永元年再興」と記し、「堂宇間口七尺 奥行八尺五寸」とある。また「行鑑堂ハ明治十三年五月建添」「間口二間半 奥行二間」と記している。また虹梁の絵様の特徴から、正面の建物は明治前期に建てられたと推定する。西の建物は開山堂として、当初は嘉永元年(1848)に建てられ、その後大規模な改修を行ったと考える。行鑑上人は疫病による災難から人々を救おうと、大般若經六百巻、光明真言百万遍を一淨石に1字を書写し、三礼し地中に埋め、塔を建て石經圓塔としたと伝わる。近年、文字の書かれた石が大量に発見された。行鑑堂は、建物内に墓を安置し本尊とした珍しい堂宇である。

(原島伸輔、小林則子)



写175-1 全景



写175-2 背面



写175-3 内部



写175-4 内部

176 德藏院（とくぞういん）

薬師堂

寺院名	瑞光山德藏院	所在地	邑楽郡明和町田島 403-4
宗派	真言宗單立	主本尊	大日如來
構造・形式	正面3間(5.5m)、側面3間(5.5m)、方形造、向拝1間、瓦葺		
建造年代 (根拠)	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

徳藏院は明和町中心部から東方に位置し、1km南には利根川が流れる。周辺は住宅や梨園が点在する田園地域である。南の道路から境内に入ると左手に薬師堂があり、正面奥に大日如來を祭る本堂が建つ。

現在の本堂は昭和34年(1959)に建築され、地域の集会所としても使われている。薬師堂は3間方形造、正面に1間の向拝を付ける。内部は1室とし、正面に逆蓮柱高欄付きの須弥壇の上に厨子を置く。

薬師堂の身舎は自然石基礎に角柱を立て台輪を廻さず、組物は外を平三斗とする。室内は出三斗、中備は背面のみ板棗股を置く。来迎柱を粽付丸柱とし、台輪を置き、組物の中備を置く。薬師堂は身舎と向拝では年代を示す特徴が異なる。身舎の建造年代は、来迎柱の木鼻や組物の絵様から18世紀後期頃と推定する。向拝は上向きの木鼻や虹梁の単純な絵様、反りの少ない海老虹梁、中備の棗股の脚の形状から17世紀後期に廻る様式をみる。当建物は年代指標に欠くが、身舎に見る建物の特徴から18世紀後期頃の建物とし向拝は前進の建物のものと考える。向拝正面の鰐口には元禄10年(1697)、享保9年(1724)、天明7年(1787)の3つの異なる年号が刻まれている。

薬師堂の30年に一度の薬師如來の御開帳は現在も行われる。月に1度地域の人人が集まり、お経を唱えるなど、地域に愛されている寺院である。

(原島伸輔、小林則子)



写176-1 薬師堂正面



写176-2 内部



写176-3 海老虹梁



写176-4 向拝 組物・絵様

178 安楽寺〔あんらくじ〕

本堂・庫裏

寺院名	医王山安樂寺	所在地	邑樂郡千代田町赤岩1057
宗派	曹洞宗	主本尊	盧舍那佛
構造・形式	[本堂]正面8間、側面6間、寄棟造瓦葺、三間向拝唐破風付 [庫裏]正面6間、側面4間、寄棟造瓦葺		
建造年代(根拠)	[本堂]18世紀前期 /建築様式 [庫裏]19世紀前期 /建築様式	工 匠	[本堂]不明

千代田町役場から南方利根川にある「赤岩の渡し」近くに位置し、東側には光恩寺がある。往古行基菩薩の開闢の地で、ここに薬師如来を招じて小堂宇を設けたという。徳治元年(1306)広円明鑑禪師(臨済宗、大拙祖能禪師)の開山。寛永7年(1630)二世国嚴本策和尚により中興され、医王山竜泉寺を米頂山安樂寺と改めた。4代目住職大虫和尚のとき火災にかかり諸堂宇、宝物等悉く焼失、7代目住職のとき元文3年(1738)現本堂、諸堂宇を再建したと伝えられている。南側山門を入り左手に鐘楼があり正面に本堂が位置する。本堂東側に庫裏その奥に住居、本堂西側には千代田町文化財の米山薬師古墳がある。古墳は高さ約8m、直径30mほどの円墳。本堂は元文3年(1738)建立後、本堂・庫裏は昭和30年(1955)大修築を行う。本堂は正面8間、側面6間、寄棟造瓦葺、三間向拝唐破風付。向拝は昭和54年(1979)に建立する。内陣は丸柱に木鼻、組物は平三斗、中備は支輪、天井は格天井。本堂の内外陣境虹梁は簡素な唐草絵様などの建築様式から18世紀前期と推定する。庫裏は大修築を本堂と同様に昭和30年(1955)に行い、正面6間、側面4間、寄棟造瓦葺。平家建庫裏東には二階建てが続く。

(在司由利恵)



写178-1 全景・本堂



写178-2 本堂内陣



写178-3 本堂内陣：支輪組物



写178-4 庫裏玄関：木鼻

181 成就院〔じょうじゅいん〕

本堂・山門

寺院名	小泉山成就院	所在地	邑樂郡大泉町城之内3-17-5
宗派	真言宗豊山派	主本尊	不動明王
構造・形式	[本堂]正面3間(7.5m)、側面3間(7.5m)、入母屋造、平入、向拝1間、軒唐破風付、銅板葺 [山門]1間1戸四脚門(3.2m)、側面2間(3.2m)、切妻造、平入、銅板葺		
建造年代(根拠)	18世紀後期/建築様式 [山門]江戸前期/建築様式	工 匠	[本堂]不明 [山門]不明

成就院は小泉城跡の北西に位置し、元慶年間(877~885)対比地次郎良基により建立された町内最古の寺と伝わる。永正年間(1504~1521)富岡主税介直光が現在地に伽藍を移す。慶長(1596~1615)の頃、僧電海が伽藍を再建、元の地から毘沙門堂を移す。文政11年(1828)冬、火災で本堂・庫裏・毘沙門堂を焼失。本尊不動明王は弘法大師の作といわれ、一度も火災にあわず吉兆を現したと伝えられる。

本堂は方3間の比較的小さな建物であるが、身舎は粽付丸柱とし、外部は尾垂木付二手先、内部は出組をのせ、各所に見事な彫刻を施している。天井画に「狩野治橋壽経信門弟岡田経周筆」の墨書き落款がある。山額裏に天明2年、奉納額に寛政5年とあり、鯖尻に反りのある虹梁や木鼻の深いしきみ加工から18世紀後期の建造と推定される。

山門は四脚門で数度の火災にも難を逃れたと伝わる。二つ巴と剣鉾梁草は富岡家の定紋で、城主であった期間の建造と考えられる。風蝕のある板幕脇の形状や浅く彫られた家紋から、江戸前期には建てられていたと推定する。

(小島恵理子)



写181-1 全景



写181-2 本堂正面



写181-3 本堂内陣



写181-4 山門

183 勢光寺〔せいこうじ〕

山門

寺院名	富士山麓上院勢光寺	所在地	邑楽郡大泉町東小泉3-10-5
宗派	浄土宗	主本尊	阿弥陀如来
構造・形式	1間1戸四脚門、側面2間、切妻造、平入、瓦葺		
建造年代 (根拠)	18世紀後期／建築様式	工匠	不明

大泉町の北東、小泉駅の南東に位置する。大泉町立北小学校発祥の地である。南側の道路から少し奥まった山門から、正面に建つ本堂まで参道が延びる。本堂東側に庫裡、南東に鐘楼を配する。

天正7年(1579)僧了海の開基である。富岡秀親の室智月尼が当寺の傍に草庵を結び、亡夫の菩提を弔った。開山以来無所属であったため、五世の代に檀徒と相談し、寛文12年(1672)11月大本山知恩院の直末となる。さらに清光寺を勢光寺と改号した。その後大光院(太田市)の所属となる。元禄13年(1700)と文化元年(1804)に火災にあい伽藍を焼失。仏堂を建て平成20年(2008)に本堂を再建する。鐘楼は平成31年(2019)3月に完成。

山門は四脚門で両側に袖塀を配する。大戸を設け蹴放しは外されたままで、後補の補強柱で支えられている。安永年間の建造と伝わり、焼失を免れたと思われる。虹梁に梅の浮彫を施し、龍の彫物を嵌める。木鼻は獅子と狛になっており、頭貫は外側に花菱の地紋が施され、内側には唐草が彫られている。格天井の鏡板に花鳥が描かれ「大原散人」とある。伝承の18世紀後期の加工形状に相応しく、朱塗りされ華やかであるが慎ましい意匠の門である。

(小島恵理子)



写183-1 全景



写183-2 虹梁・彫刻



写183-3 頭貫地紋彫



写183-4 格天井・天井画

寺院建築用語の解説

【あ】

厚肉彫 あつにくぼり

浮彫の中でも、より厚みをもたせ立体感を強調したもの。高肉彫ともいう。透彫との併用の場合は「高肉透彫」と呼ぶ。

【い】

生彩色 いけざいしき

全面を漆下地から漆塗として仕上げ、さらに全面に金箔押を施した上に着彩する技法。

板裏股 いたかえるまた

虹梁の上や斗構の間などに置かれるもので、一枚の板でつくり、中を繰り抜いていないもの。裏股をふんばったような形をしている。

板支輪 いたしりん

軒裏において、通肘木と桁の間に取り付けられた平たい板。

板軒 いたのき

垂木を用いずに厚板を張った軒で、彩色や彫刻が施されていることがある。

家又首・豕囦首 いのこさす

又首竿という左右二本の木材を合唱形に組み、さらに中央に立つ又首束で支える構成で、妻飾りの架構法。

入母屋造 いりもやづくり

屋根の基本形の一つ。屋根の上部を切妻造とし、下部は四方に庇や屋根を廻した形態。

【う】

浮彫 うきぼり

部材表面に題材を浮かび上がるように周囲を彫ったもの。線的陰刻の平彫に対して面的な彫刻。

内法材 うちのりざい

敷居、鴨居、内法長押などの造作材の総称。内法高は敷居上端から鴨居下端までの距離を指す。

腕木 うでぎ

垂木・庇などを支えるために、板や梁などから横に突き出せた横木。

兎毛通 うのけどおし

唐破風に設けられる懸魚を、特に兎毛通とい。唐破風に中央及びその両側に懸魚を設ける場合、

中央のものを兎毛通、両側のものを桁隠しという。

【え】

海老虹梁 えびこうりょう

高さが異なる柱を繋ぐ虹梁。海老のように大きく反っているものをいう。

絵様 えよう

彫刻または模様をいう。唐草や渦などの文様を彫った肘木は、絵様肘木という。

【お】

扇垂木 おおぎたるき

扇を開いたように放射状に軒の端部において取り付けられた垂木をいう。唐様と天竺様に用いられる。

大床 おおゆか

階段の上にある縁をいう。階段下の浜床に対する。

置上彩色 おきあげざいしき

文様を絵具で盛り上げて立体的に仕上げる技法。

尾垂木 おだるき

組物から屋外に斜め下方に突き出ている部材で、二手先組や三手先組などの深い軒をつくる組物に用いる。

筈欄間 おさらんま

細い桟（堅子）を欄のように細かく並べた欄間。

折上天井 おりあげてんじょう

天井周りの縁から支輪などで湾曲させて、天井面を高くして仕上げた天井。折線で画した場合は折上格天井とい。なお、格縁と繋がる支輪状に湾曲した材は「亀の尾」、繋がらない材は「蛇骨子」と呼ぶ。

御靈屋 おたまや

偉人や貴人の死者の靈を祀るための建物。靈廟、廟ともいう。

【か】

墓股 かえるまた

虹梁や桁など横架材と斗などの間に置かれ、重量を支える東材の一種。形がカエルが踏ん張った姿勢に似ている。板墓股と本墓股（透かし墓股、削り抜き墓股ともいう）がある。

鏡板 かがみいた

板戸、天井、板壁などで枠や棟、額縁、枠に嵌め込んで使用する大きな平滑りな一枚板あるいは剥ぎ目がわからないように仕上げた板。

鏡天井 かがみてんじょう

一面に板を張った平らな天井。唐様にみられる。

懸造 かけづくり

面に柱・梁を組んで、その上に建物を支える構造をいう。斜面の柱・梁の上に礼堂の床を舞台のように張り出して形成することが多く、舞台造とも呼ばれる。

籠彫 かご彫り

部材を籠状に彫り抜いて、立体的に表現するもの。

鎧 かざり

鎧とは金属板を叩いて造形する鎧起のこと。

笠木 かさぎ

鳥居、門、板塀などの上に渡す横木。

頭貫 かしらぬき

柱と柱の上端部を繋ぐ横材。柱の頂部を切り抜き、そこに落とし込んで柱と柱を結んだもの。

春日造 かすがづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造の妻入の前面に本屋と同じ幅の庇が向拝として付いた形。春日大社本殿が代表例。

冠木 かぶき

柱を貫く成の高い水平材

冠木長押 かぶきなげし

中央間の柱間にある長押で、両側の内法長押より一段高く渡したもの。

冠木門 かぶきもん

門柱とその上部を貫く冠木からなる門

権 かまち

窓や障子などの周囲の細長い枠。または床に段差がある場合、高い床の末端に取り付ける横木をいう。

亀腹 かめはら

建物の基礎廻りや鳥居の根元に補強のために、幔頭形のように盛った土壇や石盤部分をいう。

唐戸面 からどめん

部材の出隅を削り取る面取りの一つで円形（4分の1）をしたもの。「丸面」ともいう。

唐破風 からはふ

中央部は弓型に起り、左右両端が反り返った曲線状の破風。門、玄関、向拝の屋根や軒先などに用

いる。

唐門 からもん

唐破風の屋根をもつ門。唐破風が正面に向いているものを向唐門、側面を向いているものを平唐門という。

【き】

階 きざはし

階段や梯子の古語で「きだはし」ともいう。

几帳面 きょうめん

部材の出隅を削り取る面取りの一つで尖頭形または四角形にしたもの。

狐格子 きつねごうし

入母屋造において破風の内側の妻面に設ける格子。木連格子ともいう。

木鼻 きばな

虹梁、頭貫、肘木などの端が柱の外側に突き抜けた先端部分。握り拳、象・獅子・猿などの彫刻が施される。

擬宝珠 ぎほしうらん

高欄の親柱の頂部を葱の花状（宝珠）にした形の飾り。
擬宝珠高欄 ぎほしうらん
高欄形式の一つで端部等の親柱に擬宝珠頂部に載せたもの。なお、禪宗様の建物は擬宝珠の代わりに逆さの蓮花を載せた逆蓮柱とする。

切妻造 きりづまづくり

屋根の基本形式の一つ。棟の前後に流れる二つの斜面からなる。最も簡単な屋根構造。神社建築に多い。妻側に入口を設けたものを妻入、妻と直交する面に入口を設けたものを平入という。

切目縁 きりめいえん

縁の長手方向と直角に縁板の小口が見えるように張った縁をいい、「木口縁」ともいう。

金襴巻 きんらんまき

柱頭部分に金襴を巻き付けたように彩色や金物で施す装飾を指す。金襴は金糸や細く切った金箔を織り込んで、紋様を表出した布地のこと。

【く】

宮殿 くうでん

仏教の本尊や祖師像などを収める厨子の一種。「厨子」との区別は必ずしも明確でないが、寺社建築の内部安置する宮殿風の厨子のこと。

組入天井 くみいれてんじょう

古くは通肘木などの構造材の内側に格子を組入れて造られた天井。水平強度を高めて建物のねじれを防止する役目も果たす。平安末期以降の構造体と独立している格天井は格間が狭い場合を組入天井、格間に小型の格子を組み込んだものは小組格天井と呼ぶ。

組物 くみもの

斗と肘木の総称。柱など軸部と小屋組みの梁、桁などの間に設けられ、上部の荷重を軸部にスムーズに伝えるもの。斗拱、斗組（とぐみ）ともいう。

博縁 くれえん

縁の長手方向に縁板を張った縁。

【け】**懸魚 げぎょ**

屋根の妻の破風に頂部から垂下して設けられる装飾材の一種。桁の鼻を隠して風化から守る部材を装飾材としたもので、火災を避けるシンボルとして魚を象徴している。

外陣 けいじん

神社本殿や仏寺本堂の、内陣の外側で、人が拝む場所。

化粧垂木 けしょうだるき

下から見えるように設けられた垂木。

化粧屋根裏 けしょうやねうら

天井を張らず、梁や垂木をそのまま見せるもののをいう。仏堂の外陣は化粧屋根裏にすることが多い。

桁隠 けたかくし

建物の端の桁を風化を防ぐために隠し、桁の鼻に取り付けられる部材。化粧を兼ねることが多い。

桁行 けたゆき

小屋梁に直角で桁が通っている方向をいう。

間斗束 けんとづか

束の上に斗が乗っているものを斗束といい、組物（斗拱）の間に中備えとして置かれた斗束を間斗束という。主として和様で用いられる。なお、東の下方が開いた撥形の束は「撥束」と呼ぶ。

【こ】**高欄 こうらん**

縁廻りや階段の縁に沿って手摺状に設けられたもの。特に伝統的様式なものを指す。勾欄とも書

き、欄干ともいう。

向拝 こうはい

参拝人の礼拝のために、仏堂や社殿の正面の中央に張り出して設けた庇。向拝の大きさは、柱間の間数で示す。

虹梁 こうりょう

柱間に掛け渡した化粧された虹のような曲線の梁。虹のように反っているので、このように呼ばれる。

虹梁棊股 こうりょうかえるまた

妻飾の一つ。虹梁の上に棊股を置いてその上に棊股を置いて棟栱を受けるようにした形。二重虹梁棊股を簡単とした形式。棊股が大きくなることが多い。

虹梁大瓶束 こうりょうたいへいづか

妻飾の一つ。虹梁棊股の棊股を置くところに大瓶束を置いたものであり、唐様に用いられる。

柿葺 こけらぶき

柿板で葺いた屋根。柿は鱗のこと、柿板は厚さ1分(3mm)、長さ7寸～1尺3(21～40cm)、幅3寸(9cm)程度の薄い板をいう。杉・楓などを用いる。

小組格天井 こぐみごうてんじょう

格天井の格縁の間に目の小さい格子を入れたもの。

腰組 こしづみ

腰は建物の構造や壁面仕上げが異なっている場合の下部の壁面を指す。腰組は縁下の組物を指す。

胡麻殻決 ごまがらじゃくり

柱の表面に付ける決の一つで、断面が菊花状のもの。

拳鼻 こぶしばな

組物に組み込まれて突き出た拳状の木鼻。

小屋組 こやぐみ

屋根を支えるために組み立てられた骨組み。小屋を造るときと似ているためにこのように呼ばれる。

権現造 ごんげんづくり

神社の社殿形式のひとつ。前方に拝殿、後方に本殿を置き、これらを石の間または相の間で繋いだもの。

【さ】**笹割り ささぐり**

角を曲線状に削った面取りを笹割りという。肘木の上辺の角を笹割ることによって、曲線に見せる。

挿肘木 さしひじき

和様では肘木を斗の上に置いて支持するが、天竺様では、肘木を柱に直接挿し込んで取り付ける。これを挿肘木という。

皿斗 さらと

柱の頭に置く皿形の斗、上に大斗が載る。

棟唐戸 さんからど

扉の一種。框のなかに棟を縱横に渡して組み、その間に障子や鏡板を入れた唐戸。

山門 さんもん

寺院の門をいう。二重門で造られたものを山門と呼ぶことが多い。禪宗寺院では三門と呼ぶ。

三門 さんもん

禪宗寺院の二重門。三解脱門（空門・無相門・無作門）の略。上層に仏像を安置し、両脇の山廊から階段で登れるようになっている。

【し】

繁垂木 しげだるき

垂木の間隔が狭く密集して並んでいるものを使う。垂木が二段の二軒のとき、二軒・繁垂木という。なお、垂木の明きを垂木の高さと幅の和くらいの場合は半繁垂木という。

沈め彫 しずめぼり

本地面より余白を彫り下げて、主題を浮彫にするもの。

地垂木 じだるき

垂木を二段の二軒にする場合、一段目（下側）の垂木を地垂木という。

四天柱 してんばしら

仏堂の中心に設けられた四本の柱を四天柱という。特に、五重塔、三重塔、多宝塔など塔婆建築の初層の四本の柱をいう場合が多い。四天柱は中央の須弥壇を囲むように配置され、仏像や文様などが極彩色に描かれることが多い。

地紋彫 じもんぼり

沈め彫で幾何学的な紋様を彫ったもの。

須弥壇 しゅみだん

仏像を安置する仏壇のこと。和様と唐様とは、欄干などが異なる。

菖蒲桁 しょうぶげた

軒唐破風、入母屋破風などの左右の指栱をいう。

鐘楼 しょうろう

梵鐘を吊るための建物。国宝指定の例はない。「しゅろう」とも読む。

支輪 しりん

軒裏や折り上げ天井の斜めに立ち上がる部分に並列する弧状やS字状に湾曲した部材をいう。

神明造 しんめいづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻の屋根を持ち、高床式で「平入」という横長の部分を正面に持つぐる造り。

素木造 しらきづくり

樹皮が付かず塗装も彩色されない造り。

【す】

透かし彫 すかしばり

題材の余白となる部分を彫り抜いて輪郭を表現するもの。背面側が透かして見える。

縋破風 すがるはふ

身舎の軒先から突き出た片流れの破風をいう。

【せ】

線状彫 せんじょうぼり

陰彫の一種で題材の輪郭を線（線的陰刻）で彫るもの。刻線彫ともいう

【ぞ】

袖切 そできり

虹梁端部の柱が取り付く位置で、薄く削り欠き取られた部分をいう。

反り増し そりまし

垂木や桁などで先端にいくにつれて反り上がり成り大きくなる状態。「照り増し」ともいう。これは中世の建物見られ、近世にはほとんど見られない。

【た】

大虹梁 だいこうりょう

虹梁のひとつ。内陣などにおいて、長く掛け渡されているものをいう。

大社造 たいしゃづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造、妻入の最も原始的な形。出入り口を向かって右側に寄せて形成し、屋根を付けたものが多い。

大斗 だいと

組物を構成する部材の一つで最も大きい斗。柱上に直接または台輪や皿斗を介して置かれ、肘木や卷斗を載せて構成する。

大塔 だいとう

多宝塔のうち、初層の裳階の柱間が五間で、内部に身舎の円形平面を残すものをいう。

大斗肘木 だいとひじき

組物形式の一つ。大斗の上に肘木を載せ、その上に直接、桁を据える。

大瓶束 たいへいづ

瓶のような形をした束。虹梁の上に用いられ、上部に斗を載せ、下部に結綿と呼ぶ彫刻が施される。

台輪 だいわ

柱頂部及び頭貫の上にある水平材をいう。

手挾 たばさみ

向拝の柱の内側などにおいて、肘木と垂木の間に設けられる三角形の材。装飾彫刻が施されているものが多い。

多宝塔 たほうとう

下層を方形、上層を円形とする二重の塔であり、下層の屋根と上層の間に白漆喰の亀腹が設けられている。上層の頂部には相輪が立っている。

垂木 たるき

屋根の野地板などを支持するために棟から桁にかけて斜めに架けられる材。

【ち】**力肘木 ちからひじき**

肘木のなかでも、特に荷重を受ける肘木。桁と垂直な方向に長い材として使用される。

千木 ちぎ

屋根の妻側の端部において斜め上方へ突き出した一対の部材。

千鳥破風 ちどりはふ

切妻破風を葺き降ろしの屋根に直接置いたもの。

粽 ちまき

円柱の柱の上下端または上端において、角を落として丸めたもの。唐様（禪宗様）に特徴的な意匠。

【つ】**繫虹梁 つなぎこうりょう**

虹梁のひとつ。外陣などにおいて、内側の柱と外側の柱とを繋ぐ短い虹梁。

妻入 つまいり

大棟に対して平行な妻側の方向に入り口のあることをいう。

妻飾 つかざり

切妻造、入母屋造の屋根の妻側の三角形空間に組物・懸魚・笈形・大瓶束などの架構による装飾を妻飾という。

詰組 つめぐみ

柱の上の組物と次の柱の上の組物の間において、梁や桁の上に、和様では間斗束や幕股などを置くが、唐様では組物を置く。

連三斗 連れみつど

三斗組の変形で、肘木の一方を二手だけ伸ばし、卷斗を一つ加えて並べたもの。桁の外側が下がらないように外方向に延ばすことが多く、向拝に多くみられる。

【て】**出組 でぐみ**

組物の一形式。深い軒を支えるため、持送式に組物を前に挺出させたもの。

出三斗 でみつど

三斗組の一つ。大斗の上に粹肘木を載せ、中央に方斗を、四方に卷斗を置いたもので、一つの肘木が壁から突出する。例えば、壁方向で桁を、手先方向で繫虹梁を受ける。

照り てり

上方が凹の弧形をいう。

【と】**通肘木 とおりひじき**

組物と組物を連結する横材。斗にのり、組物を繋ぐ水平材。

【な】**内陣 ないじん**

神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。仏寺本堂の場合、堂内を奥の内陣と手前の外陣とに分けている。

中備 なかぞなえ

柱上の組物と組物の間に置かれる荷重支持部材であるが、装飾的に用いられることが多い。間斗束、幕股などが使用される。

流造 ながれづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造、平入の、前の軒を流れるように延長して向拝としたもの。千木、堅魚木は設けない。正面の柱間の数によって、一間社流造、三間社流造などと呼ばれる。

長押 なげし

柱面に釘付けされた横木で長が押しの略。土台に接する地長押、縁板に接する切目長押（縁長押、足元長押）、窓下の腰長押、出入口や窓の上部の内法長押、内法長押と天井の間の蟻壁長押、天回縁下部の天井長押（回縁長押）などと、位置によって種々の名称がある。

【に】**二重虹梁棟股 にじゅうこうりょうかえるまた**

妻筋の一つ。虹梁の上に棟股を置き、その上に虹梁を架して、さらにその上に棟股を置いて棟桁を受けるようにした形。

二重門 にじゅうもん

二階建ての門で、二層ともに屋根があるものをいう。

【ぬ】**拭板 むぐいいた**

平滑な床板をいう。

貫 ぬき

柱を貫いて、柱と柱を繋ぐ横材。建物の強度を増すための部材であり、柱に穴をあけて貫を通し、楔を差し込んで固定する。柱の頭に通す貫を頭貫という。

【の】**軒唐破風 のきからはふ**

唐門の屋根に用いられ、主屋の軒の一部に取り付けたものをいう。

野垂木 のだるぎ

下から見えない隠れた箇所に設けられる垂木

【は】**拜殿 はいでん**

祭員が礼拝するための殿舎をいう。

秤肘木 はかりひじき

肘木の一種であり、十字に組まれていないもの。天秤のような形状からこのように呼ばれる。三箇

所に巻斗を載せる。

箱棟 はこむね

箱形の大棟をいう。大棟は屋根頂部において水平に走る棟を指す。

撥束 ばちづか

間斗束（台輪や頭抜きの上に並ぶ斗構間にあって上部に斗を載せた形の束）で、下方が開いた撥形の束のことをいう。

八幡造 はちまんづくり

神社の社殿形式のひとつ。切妻造の三間社を、平同士で前後に連ね、両殿の屋根の接するところに共通の樋をかけ、その下が合ノ間となった形。

鼻隠板 はなかくしいた

垂木の先端（鼻）を隠すために、垂木の先端間に架け渡して取り付けられる板。

花狭間 はなさま

花飾りのように美しい華奢な透かしを花狭間という。扉の上部などに用いられる。

花肘木 はなひじき

肘木に斗が融合して一体になったものをいう。

割高欄 はねこうらん

高欄の一つ。親柱上部に擬宝珠を載せないで、架木を反らせて突き出すもの。跳高欄とも書く。

浜床 はまゆか

大床に対するもので、向拝階段の下部にある板張りの床をいう。本来は異なるが浜縁も同義で使われている。

羽目 はめ

板を幅方向に繋いで張る壁をいう。

破風 はふ

屋根の切妻に付いている合掌形の装飾板。あるいはその破風板が付いている部分をいう。屋根に飾りとして形成される。

梁間 はりま

建物の大きさを示す指標のひとつ。梁方向（棟と直行する方向）での柱間距離をいい、柱間の数で表す。「梁行き」ともいう。

【ひ】**庇 ひさし**

身舎の外側に屋根を葺き下ろした部分。

肘木 ひじき

組物を構成する部材の一つ。斗と組み合わせて上部の荷重を軸部に伝えるもの。枠肘木と秤肘木が

ある。

一手先組 ひとてさきぐみ

組物形式の一つで、出組ともいう。壁面から肘木を一つ飛び出させたところに三斗組を乗せ、桁を一段持ち出して支える。

平入 ひらいり

大棟と直角方向の長手側に入口があること。

平彩色 ひらさいしき

置き上げを施さず、漆下地面に絵具を着彩色していく技法。

平三斗 ひらみつど

三斗組の一つ。大斗の上に肘木を載せ、その上に三つの卷斗を置き、桁を受ける組物。卷斗の上に実肘木を置くこともある。

檜皮葺 ひわだぶき

檜皮で葺いた屋根。檜皮の寸法は長さは2尺～3尺5寸(61～106cm)程度、幅は3寸5分(11cm)以上である。

【ふ】

双斗 ふたつど

肘木の上に斗を二つ置いた組物。例は少なく、中備として使用される。二斗とも書く。

二手先組 ふたてさきぐみ

組物形式の一つ。壁面から斗組を二段に張り出させ、桁を二段に持ち出して支える。二手先が虹梁の場合と、尾垂木の場合がある

舟肘木 ふなひじき

組物形式の一つ。柱の上に肘木を置き、この上に桁を受ける。肘木が舟のような形に形成されるので、この名がある。組物で最も簡単なもの。

【へ】

平行垂木 へいこうたるき

切妻屋根では、垂木は平行に配置されるが、寄棟屋根や入母屋屋根において、隅木の部分まで平行に配した垂木を特に平行垂木という。

幣殿 へいでん

参詣者が幣帛をささげる殿舎。本堂と拝殿との中間にある。

別当寺 べっとうじ

仏教諸宗派の管轄下にある神社を運営するために設けた寺院。神社境内または隣接して構える場合が多く、明治の神仏分離により分割される。

扁額 へんがく

鳥居・門戸などに掛ける横長の額。社号・寺号などが記される。

【ほ】

宝珠 ほうじゅ

頭部が尖り、左右から火炎が燃え上がっている状態にかたどった玉。如意宝珠を表したもの。

方丈形本堂 ほうじょうがたほんどう

禪宗の方丈にならった平面形式の本堂。県内では内部を前後2列3室の計6室に分け、中央前後2室を仏間、前を外陣・後ろを内陣する場合が多い。その類似形として、数は少ないが前後2列2室の計4室、前後2列4室の計8室も見られる。

方斗 ほうと

組物を構成する斗の一種で、肘木の上に載せて使用される。二方向の肘木あるいは桁を受ける斗。

本薦股 ほんかえたまた

薦股のひとつ。内部を透かし彫りなどして削り抜いたもの。組物の中備などとして荷重のかからない部位に装飾材として用いられ、構造材の機能は損なわれている。

本瓦葺 ほんがわらぶき

屋根葺きのひとつ。平瓦を並べ、平瓦の端部間に上に断面半円の丸瓦を重ねた葺き方。本格的な瓦葺。

本殿 ほんでん

神靈を安置する殿舎をいう。

【ま】

巻斗 まきと

組物を構成する斗の一種で、肘木の上に載せて使用される。一方のみで肘木あるいは桁を受ける斗

組物を構成する部材の一つ。柱の上、あるいは肘木の上に載せて使用され、別の肘木や桁を受ける。「大斗」「卷斗」「方斗」などがある。

疊垂木 まばらたるき

垂木の間隔が広く、疊らに並んでいるものをいう。垂木が一段の一軒のとき、一軒・疊垂木という。

眉欠き まゆかき

虹梁・破風板など端部の袖切の脇に見る眉形の縁形をいう。「弓眉」「弓決り」ともいう。

丸彫 まるぼり

部材を題材の実物の形通り立体的に彫るもの。線の平彫、面の浮彫に対して立体的な彫刻。

【み】**水引き虹梁 みずびきこうりょう**

向拝正面の虹梁。

三斗組 みつどぐみ

組物形式の一つ。大斗肘木の上に三つの卷斗を載せ、桁を受ける。平三斗、出三斗、連三斗がある。

三手先組 みてさきぐみ

組物形式の一つ。壁面から斗組を、一手先、二手先、三手先と、三段に張り出させ、桁を三段に持ち出して支える。軒の出を長くすることができる。

養束 みのづか

間斗束の一種。束の上部に装飾を施したもの。

【む】**起り むくり**

照りとは反対に上方が凸の弧形を指す。

棟木 むなぎ

根を作る部材の一つで、母屋や桁と平行に、屋根の最も高いところに配される横材。

棟札 むなふだ

建物の上棟や竣工の時、建物名、工事の由緒、年月日、施主、建築工匠などを墨書きで木札に記し、棟木・棟束などに打ち付けたものをいう。それらに打ち付けず保存するものは置札と呼ぶ。新築のみならず修理の際にも作成される。通常は細長く上部を尖頭形型（駒型）とする。近世になっても見られるが、時代が遡ると棟札の内容を墨で棟木や梁などに直接書いており、棟木に書かれたものは「棟木銘」、梁に書かれたものは「梁銘」、などと呼ぶ。また、曹洞宗建築において、必要事項を記した長い板を梁下打ち付ける場合がみられるが、これは「上梁銘」と呼ばれている。

【も】**身舎 もや**

下屋に対して家屋の主体となる上屋部分をいう。

身舎柱 もやはしら

家屋の主体となる部分を支える柱

【や】**八脚門 やつあしもん**

一階建ての門であり、四本の本柱の前後にそれぞれ控柱を設けて屋根を支える。控柱が八本あるので、八脚門という。三間幅で中央が出入り口となる三間一戸の門になる。

【よ】**寄棟造 よせむねづくり**

大棟から四方に葺きおろす形式の屋根。大棟の両端に隅棟が寄った形になる。

四脚門 よつあしもん

一階建ての門であり、二本の本柱の前後にそれぞれ控柱を設けて屋根を支える。控柱が四本あるので、四脚門という。「しきやくもん」ともいう。

【ら】**来迎柱 らいごうばしら**

仏堂において本尊を安置する須弥壇の左右の柱。

欄間 らんま

長押の上の壁に相当する部分を開口にしたもの。格子を入れた格子欄間、格子の柵が二重の吹寄格子欄間、菱格子を入れた菱格子欄間、菱格子の柵が二重の吹寄菱格子欄間、波連子を入れた波連子欄間などがある。

【ろ】**楼門 ろうもん**

二階建ての門で、一層目に屋根がないものをいう。

【わ】**脇障子 わきしょうじ**

神社建築の流造などにおいて、三方を囲む縁の突き当たりに設けた壁板をいう。

鰐口 わにぐち

古くは金鼓と称し、金属製の円形、中空で下方に細長い口をあける。仏堂・社殿の前に吊り下げ、参拝者は前に垂らした津名でって鳴らす。

薙座 わらざ

桟唐戸の吊元軸を差し込む孔のある部材。

割拝殿 わりはいでん

社の拝殿の一形式。中央が通路となって建物が左右に分割されたようになっている。中央の通路の上に軒唐破風があるものが多い。

群馬県近世寺社総合調査報告書

—歴史的建造物を中心に—

《寺院編》

令和4(2022)年3月4日 印刷

令和4(2022)年3月18日 発行

・編集・発行 群馬県地域創生部文化財保護課
〒371-8570 群馬県前橋市大手町1丁目1番1号
TEL 027-223-1111 (代表)

・印 刷 朝日印刷工業株式会社
